うつろふものは瞬過愁灯

蘭花

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シャニマスの凛世とプロデューサーの恋物語を四季の流れに沿って進めていきたいと思います。

ｐｉｘｉｖにも同名で投稿しております。

他のＳＳもいくつか上げていますので、よろしければそちらもどうぞ。

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ．ｐｈｐ？ｉｄ＝４０７２６６４

目次

花筏―spring―
一枚目、花冷 …… 1
二枚目、春宵 …… 9
三枚目、春陽 …… 18
四枚目、花時 …… 27
五枚目、花筏 …… 39
恋蛍―Summer―
いたつき …… 46
のべつまくなし …… 56
とんとん …… 76
どろん …… 85
じゅんしょく …… 116
爽籟―Autumn―
それはとても綺麗だった …… 120
やはり心は分からなかった …… 135
『わびぬれば』 …… 148
だから空を見上げた …… 161
そして風が吹いた …… 175
凍蝶―Winter―
見えない寒さと。過…現 …… 193
ひとつ咲いた過…現 …… 207
消えぬ季節…過 …… 222
消えぬ季節…現 …… 234
そして春へ …… 249

花筏―ｓｐｒｉｎｇ―

一枚目、花冷

ゆらりゆらり。

『貴方さまは、凛世にとって、何物にも代えがたきお方……』

ゆらり、ゆらりとまた一つ。

桃色の花弁が宙を舞う。どこへ向かうわけでもなく、ただ悠々と空を踊る。

枝から別れた小さな一枚は儚くも美しく、地に落ちようとする瞬間こそが全てと言わんばかりの存在感を一心に放つ。

『ですので、どうか、これからずっと、ずっと……』

桜はいつか、その悉くを散らし、大地を淡い色に染め上げてゆくだろう。

多くの人々が見上げる満開の花弁も、散ればきっと見向きもされない景色の一部へと成り下がる。

光には限りがある。

輝きには限界がある。

永遠と感じられるほどの時間を照らし続けられる光源はおそらく、存在しない。そし

て光ることに価値があるモノは、輝きを失えば価値も失う。
桜も時期が過ぎれば枯れて散りゆく運命にある。輝けるのは今だけなのだ。
――それでも。
『凛世をお傍に置いて、くださいませ』
地に落ちようとも、朽ちようとも、輝きを失いたくないと考えるのは、強欲だろうか。
もしもそんな罪深き欲が許されるのなら。散った桜にも美しさがあるというのなら。
「永遠に、いつまでも……」
ゆらりゆらり。
ゆらり、ゆらりとまた一つ。
儚く散りゆく桜の花弁。視界を覆うは幻想的な桜吹雪。変わらぬ時を求める心に答を示す者はいない。流れゆく桃色が瞳に映り続ける。止まっている暇はないのだと、訴えかけてくるように。
青い空の下、春風と共に花弁が運ばれていく。
杜野凛世はその様子を、ただただ呆然と眺めていた。

◇　◇　◇

「凛世、学校生活で何か困っていることはないか？」

桜舞い散る春の朝、プロデューサーは開口一番にそんな言葉を投げかけた。

まだ日が完全に昇りきっていない空を窓越しに眺めていた少女――杜野凛世は、彼の問いに瞬時に反応して振り返る。迅速かつ落ち着き払った凛然とした様子で振り向く姿から、育ちの良さが感じられた。

「はい……問題なく、快適に……過ごしております」

「そうか、充実しているんだな」

顔色ひとつ変えない返答。一見人形のように無機質に見えるが、口元が柔らかく微笑んでいる。

（何か良いことでもあったのかな）

その微笑みに対してプロデューサーはぼんやりとした理由付けをしてみるが、「何か良いこと」がなんなのか理解できる日はまだまだ遠いだろう。

快晴の空の下、アイドルとして活動をしている杜野凛世は、今日も早朝から事務所で待機している。誰よりも早く事務所に足を運ぶ姿勢は称賛に値するもので、常に真っ直ぐと前を向いて物事に取り組む姿は、見習わなければならないと感じるほどだ。

そんなしっかり者だからこそ、稀に、ごく稀に、日常生活の様子が気になることがある。おそらくどのような場面でも彼女は彼女なのだろう。故に彼女に投げかけた問い

は、半分くらい好奇心からなるものだった。
　そして、もう半分は。
「じゃあ、学校生活を取材とかされても、平気か？」
「取材……お仕事、でしょうか」
「そうなんだ、この雑誌のことなんだけどさ」
　下ろしていた腰を上げ、テーブルの上に置かれた雑誌を持って黒髪の少女へと歩み寄る。背丈に差があるため、彼女は距離が近くなるほど首を持ち上げて目線が上がっていく。雑誌のページを探しながら歩いていたためその様子に気づかなかったが、隣に並んでからも熱烈な視線を感じてプロデューサーも凛世を見た。
　視線がばっちりと絡み合う。微妙にこそばゆい空気が漂った。
「あの、凛世」
「はい、プロデューサーさま」
「俺の顔に何かついてるか？」
「はい。凛々しく……麗しいお顔がございます」
　突然ド直球の褒め言葉が飛んできて、むず痒い気分になる。凛世は先ほどよりも上機嫌に、柔らかい笑みを浮かべて此方を見つめていた。
　その視線と堪え難いむず痒さを振り払うように、目線をそらす。

「そ、そういうことを軽々しく言うのはやめた方がいい。前にも言ったけど、もっと大切な人のために取っておくべきだ」
「……でしたら、まさに今でございます」
「え？」
一拍置いての返答に思わず視線を戻して聞き返した。相変わらず一心に自分を見つめてくる紅い双眸には、強い意思が籠っている。しかし彼女はどこか困ったような表情をしており、もう一度微笑むと小さく肩を揺らした。
「なんでも……ございません。易々と届くものとは、思っておりませんゆえ」
「……凛世？」
分かっていた、とでも言いたげな表情。呆れているとも悲しんでいるともとれない、なんとも微妙な感情の表れ。
時折凛世は今と同じ顔を見せる。何か大切なことを伝えようとして、喉元まで出かかった言葉を持ち前の謙虚さで胸中に沈め、何かを悟ったような困り顔を見せるのだ。
その真意が読みとれない。プロデューサーとして理解すべきことのはずなのに、踏み込んではいけないと心の中に潜む何かが行く手を阻む。とても大事なことのはずで、聞いてしまわなければならないことだと感じるのに。知らなくて良い、聞こえなくて良い、凛世の態度からするに今のままでも彼女のアイドル活動に支障はない。けれどそう

いう問題ではなく、知ろうとする自分を抑えようとするなにかがいる。
聞いてしまえば、何かが終わる。そんな予感が消えてくれないのだ。
「……プロデューサーさま。取材のお話、御聞かせ願えますか」
「っ、あぁ、悪い」
思考の渦にはまって逡巡していると、先程までの表情はどこへやら、いつものように穏やかな顔の凛世がプロデューサーを心配そうに見上げていた。
考えても答えの出ない思考は一旦置いておき、本題に入ることにする。
「この『クラスルーム・ディフュージョン』っていう雑誌の企画でな――」
所持したままやり場のなかった雑誌を開いてパラパラとページをめくると、ほとんどのページに映っているのが制服姿の美少女達。アイドル活動をしている者もそうでない一般人もすべてひっくるめて、学生・生徒として過ごしている様子が収められている。
それは登校から始まり授業風景・休み時間・昼食・放課後・下校と、勉学に励む立場でしか経験することのできない日常のオンパレード。青春・挫折・苦悩・夢・恋愛・勉強・成長――多くの人間が通る道であり、一度しか歩むことのできない輝かしい毎日を、これでもかというほどに詰め込んでいるのが『クラスルーム・ディフュージョン』だ。一冊でうら若き乙女たちが同じ装いに身を包んだ姿を十二分に堪能できる。
そんな雑誌のコーナーの中、最も人気を博しているのが『ワンウィークドリームス

テップ』という、「ある特定の女子生徒の学校生活を一週間分取材する」もの。集団で映っていたり、一人一人の収録数が少ない他のコーナーとは正反対である。
「凛世の次の仕事はこれになると思う。一応、学校での生活だから本人の同意が必要なんだ。大丈夫か？」
「はい、問題ありません……ですが」
いつもと同じようにこくりと頷く凛世だが、彼女は頷いたのちに俯きがちに目を逸らして眉を顰めた。
「凛世で、よろしいのでしょうか」
「それは勿論。でなければオファーはこないだろ？」
「……プロデューサー、さまは」
「俺？」
逸らした目線を再び、ゆっくりと合わせてくる。分からないこともあるが、こういう時の凛世が何を考えているかはすぐにわかった。
オーディションを受ける前に、ステージへ向かう直前に見せる顔だ。本番前の不安や緊張感への答えを求める——要するに、「何か言って欲しい顔」をしている。
ならば、プロデューサーとしてとるべき答えはただ一つ。
「俺も凛世には、是非ともこの仕事受けてもらいたいな。学校での凛世の姿を見てみた

いし、きっと凛世なら、たくさんの読者を釘付けにすると思う」

「――ふふ……」

青い着物の袖が揺れる。少し高い声音の上機嫌な笑みがこぼれた。

凛世は嬉しそうに目を細めると、胸の前で自らの両手を合わせる。

「プロデューサーさまが、そう仰ってくださるのでしたら……凛世は、その御期待にお応えできるよう、尽力いたします」

一礼。

山の麓を流れる小川の如く緩やかで、非常に美しい所作。本当に彼女は、何から何まで美麗な立ち振る舞いをする。

尊敬の念すら覚えるほどの彼女を見ていると、プロデューサーもまた一つの安心感を覚えるのであった。凛世ならばきっと、上手くやってくれる。これが互いに信頼し合えている形であれば嬉しいと、心から思う。

（よし、楽しく話せたな）

会話が一段落ついたことへの安堵。事務所の窓の外に見える桜の木から、小さな花弁が一枚、また一枚と流れ落ちて行く。

春真っ只中の桃景色を感じながら、２８３プロダクションの朝が過ぎて行くのであった。

二枚目、春宵

杜野凛世は『放課後クライマックスガールズ』に所属するアイドルだ。大和撫子を絵に描いたような人柄で、冷静沈着で慇懃かつ実直、アイドルとして高みを目指そうとする志も人一倍もっている。

口数はユニットのメンバーと比較しても少なく大人しいため、周りの人間とあまり関わらないように思われがちだが、実際は違う。他のメンバーにはない個性と素直すぎる性格は、彼女を取り巻く環境にしっかりと受け止められ、彼女も周囲を快く受け入れている。ユニットとしての活動は実に円満であり、問題点を見つける方が難しいくらいだ。

しかしどうやら、彼女自らが通う高校でも同じようにはいかないらしい。

とりわけ目立った問題があるわけでも、彼女自身が悩みを抱えているわけでもなく、寧ろ平穏な学校生活を過ごしている。通う高校はイジメや不登校といった世間の学校が内包する悪しき面も少ないし、地域からの評判はとても良好。

ではなにが『放課後クライマックスガールズ』と違うのか、と聞かれた場合。

「なんといいますか、アイドルとして活動しているときとは違うんですよね」

凛世を撮影するためのカメラマンが言う。

『ワンウィークドリームステップ』の撮影期間の初日。さすがに一日中凛世に張り付いておくことはできないが、せめて少しだけでも彼女の様子を確認できればと思い、午後から学校に訪れたプロデューサーに告げられた言葉である。

昼休憩の最中にやってきた彼の目に映ったのはいつもと変わらぬ凛世――に見えたが、しばらく眺めていると確かに様子が違う。

見慣れている着物がブレザー型の制服になっていることではない。そこにあったのは、感心せざるを得ないほど完璧な佇まいで椅子に座り、何かの本を黙読しつづけている少女の姿だった。

（……いや、まさか、さすがにそれはないと思うけど……）

もしかすると凛世は、学校では話す相手がいないのではないだろうか。

しかし物腰柔らかで誰にでも分け隔てなく接する彼女のことだ、いくらなんでも孤立しているなんてことはないはずだ。

「今日一日、あんまり誰かと話している姿は見られなかったんですよ。たまーに会話したかと思えば、すぐに終わってしまうし」

「そう、ですか」

そういえば彼女の学校生活について尋ねたことはあまりない。

俗世に疎く、会話のペースが若干ゆったりとしている部分が現代の若者とは噛み合っていないのだろうか。

それともアイドルとして活動しているが故に、一般人には近寄りがたいオーラでも放たれているのか。実際彼女は新人アイドルの祭典である『W・I・N・G』で優勝という輝かしい実績を収めており、その辺りにいる人々とは異なるステージを歩んでいる。

加えてアイドルというものは、人気が出れば出るほど多忙になるため、学校を休みがちになってしまう。その辺りが彼女と周りに壁を作っている可能性も十分にあるだろう。

顎に手を当てて思考を張り巡らせていると、カメラマンが肩を竦めた。

「凛世ちゃん、そこにいるだけで絵になるんですが……もう少し、青春っぽさがほしいかなあ、と」

「もしかして一日中、こうやって教室の後ろで構えていらっしゃるんですか？」

「まさか。そんなことしたら皆気が散ってしょうがないでしょうし、時折様子を見に来ては撮影しているんですよ」

乾いた笑いが零れる。昼休憩ということもあって校内はガヤガヤと喧騒に包まれており、程良く心地良い騒がしさが鼓膜を揺らす。教室の後ろの方から黒髪の少女を眺めながら、プロデューサーはぼんやりと先日の言葉を思い出していた。

（問題なく、快適に……か）

学校での様子を尋ねた際、表情に陰りも曇りもなく、何か遠慮したようにも見えなかったと記憶している。本人が大丈夫だと言っているのなら、これ以上の邪推は野暮というものだ。

（とりあえず、もう少し様子を見ようかな）

春の麗らかな空気と、暖かな日差しが眠気を誘発する。膨大な睡眠欲を含んだ欠伸を一つすると、何とも言えない不思議な感覚に陥った。

高校の教室。騒がしい室内、学校全体。平和な日常の一欠片。社会人になった今ではもう戻ることのできない空間。そのどれもがただ過ぎ去っただけの記憶となってしまっているのが妙に口惜しいと感じるのは、何故だろうか。

もう一度戻りたいと感じている――否、それは断じて無い。懐かしさを感じることはあれど、プロデューサーとしてアイドルたちをサポートするべく日々奔走している「今」に十分満足しているのだ。過去を渇望する気は一切ない。

ならば綺麗な姿勢で本を読む少女を見て、何を残念に思うことがあるだろう。

――嗚呼、自分があの場所に今、居ることができたなら。

――手を伸ばして、声を掛けるのに。

「……えっ？」

深い深い思考の淵に陥った意識がはっと呼び戻された。自分は今何を考えていたのか、ぼんやりとしか思い出せない。

素っ頓狂な声は割と大きめな声量を持っていたようで、室内の生徒が何人かこちらに振り返った。恥ずかしい。

凛世も羅列する文字から目を離してこちらを一瞥するが、再び本の世界に入り込んでしまった。

「――っ、!?」

と思った直後に再度振り返った。二度見だ。それも、かなりの勢いで。

首を痛めないかと心配しているプロデューサーを目を丸くして凝視していた凛世だったが、数秒後には我に返り、読みかけの本に栞を挟んでから静かに席を立ち上がった。

制服のスカートを揺らしながら、これまた静かに近寄ってくる。

「……プロデューサーさま、いらして頂いて、いたのですね」

「あー悪いな、読書の邪魔しちゃって」

「いえ、お気になさらず。本日も、お顔を見ることが出来て……凛世は、幸せでございます」

プロデューサーは彼女の声を聞いて少し安堵した。予想以上に平常運転で、特に変

わったようにも見えないいつも通りの凛世。それだけで十分すぎるほどの安心感が身を包んだ。

　しかし立場上、気になるものは気になる。

「えっと……凛世。普段も学校ではさっきみたいな感じか？」

「さっきみたいな……凛世が、小説に読み耽っていたことでしょうか」

「そう、だな。いつもはどんな感じなのかと思ってさ」

「普段ならば――……どうやら凛世は、プロデューサーさまに、不要な心配を、お掛けしてしまったようですね」

「え？」

　揺るがない真面目な表情で凛世が目を伏せ、何かを悟ったようにゆっくりと両眼を開く。

　握り拳をつくった左手は胸に、右手は正面に伸び、何かを求めることを躊躇い伸びきらずに虚空を掻く。弱々しく震えた指先は、隠すように華奢な身体の後ろに仕舞われた。

「あれは、学友の方に、お借りしたもの。折角、勧めていただきましたので……早く感想を伝えたいと思い、夢中になっていた次第で、ございます」

「なんだ、そういうことだったのか……なるほどな」

「雑誌に載るからといって、何か特別なことを意識する必要はない。いつも通りの学校生活を送ってくれ」――前日に彼女に掛けた言葉である。

要するに今日という日は、たまたま借りた本を読んでいただけで、別に孤立しているとかそういうことではないようだ。これが彼女にとってのいつも通りの学校生活で、普段も読書に集中する日があるのだろう。

心配が杞憂に終わり、心のつかえが完全に払拭された。

「ちなみに貸してくれたのはどの子なんだ？」

「はい、あちらの方々でございます」

そう言って凛世が振り返った視線の先、教壇付近には、二人の女子高生がにこやかな笑みを浮かべながら楽しげに会話している姿が。見た目から既に明るい子と、前髪で目が隠れた子だ。

「変な心配しちゃったな。困ったことはなさそうでよかったよ」

「はい。……ですが、一つだけ」

それまではっきりと見開かれていた凛世の紅玉の瞳がうっすらと細められ、口端が軽く吊り上がった。

「大切な方の……お傍に居られないことが。それだけが……苦しいのです」

真意の見えない発言に当惑する。苦しいと言いながら、何故少しだけ嬉しそうな顔を

するのだろう。何故嬉しそうな顔に見えるのに、どこか寂しげな雰囲気を醸し出しているのだろうか。

何か言葉をかけようと思ったが、口を開くと同時に予鈴の音が鳴り響いた。懐かしいメロディがまるで眼前の少女との間に立ちはだかるように空間を制圧する。もうすぐ授業が始まるという合図が教室内の僅かな生徒を動かし、楽しい時間の終わりを告げた。

凛世も、ぺこりと丁寧に礼をしてから自分の席へと戻っていく。

「……なるほど、そういうことなんですねぇー……」

一連のやりとりを黙って見ていたカメラマンが独り言を呟いているが、その顔はニヤついている。なんとなく嫌な予感がしたが、とりあえずは考えないことにした。

（そろそろ俺も帰るかな――って、あれ？）

教室を去ることに若干の名残惜しさを感じていると、席に向かっていったはずの凛世が未だに腰を下ろしていないことに気付く。見れば、彼女の前には背の高い男がいた。

おそらく同じクラスの生徒なのだろう、男子生徒はブレザー服をゆるく着崩し、ズボンのポケットに手を突っ込み、立ち姿が軽く猫背になっている。表情からはこれでもかというくらいに倦怠感が滲み出ており、背丈の高さも相まってかなりの威圧感がもっていた。お世辞にも、人柄が良さそうには見えない。

（り、凛世はああいうタイプとも交流があるのか……？）

同じユニットのメンバーのうち二人くらいはビビりそうな相手だ。どこからどう見ても不良の道を進もうとしているようにしか見えない生徒だが、凛世の言う『学友』に彼は含まれているだろうか。

と、思ったのだが、凛世が男子生徒に若干皺が寄ったプリントを手渡しているのを見て、なんとなく察する。落とした物を本人に渡しただけなのだろう。男子生徒は差し出されたプリントを乱雑に受け取って顔をしかめ、さっさとその場から去ってしまう――あまり気分の良い受け取り方ではなかった。

しかし凛世は相手の様子など歯牙にもかけず、今度こそ席に戻る。あからさまに柄の悪い生徒にも臆せず話しかけられるのも彼女の美点だ。

（合宿の時も、肝試し、全然怖がってなかったもんな）

度胸というべきか、肝が据わっているというべきか。感情の起伏があまり激しくないため、驚いたり焦ったりする姿はなかなか想像できない。

（っと、本当に授業が始まりそうだ。流石に帰ろう）

カメラマンに目配せをして足早に教室を立ち去る。

背中から視線を二つ感じたような気がしたが、おそらく気のせいだろう。

三枚目、春陽

「ええっ！　この雑誌に凛世さんがのるんですか!?　すごいです！」

夕方。

元気と活力とやる気に満ち溢れ、はしゃいでもお釣りが出そうなほど天真爛漫な声が事務所内に響き渡った。一日の半分以上が過ぎ、疲労を感じ始める時間帯だというのに、小宮果穂はびっくりするくらいエンジン全開だ。日頃の生活でエネルギーが有り余っているのだろうか。

そんな果穂が目をキラキラさせて釘付けになっているのは、件の『クラスルーム・ディフュージョン』である。

「じゃあじゃあ、今日は一日中、たくさんのカメラが凛世さんをかこんでいたんですか!?」

「いえ、他の皆様に配慮して、一台のみ……とのことです」

学校生活の撮影の初日が終了し、自ら淹れたお茶を静かに飲む凛世が答える。プロデューサーも他のアイドルも不在の今、事務所に居るのは二人だけだ。

「いいなぁー、あたしもこんなふうに、制服で雑誌にのってみたいです」

「果穂さんならば……焦らずとも……すぐにその時期が訪れるでしょう」
「ほんとうですか!?」
「はい……本当、です」
何気ない平和な会話が繰り広げられる。とにかくキラキラした瞳で憧れに心躍らせる果穂と、優しく微笑む凛世。アイドルとして活動している時とはまた違った、魅力の溢れる生活の一ピースである。
そんな中、果穂の話を聞きながら凛世はいつかの思い出を頭の中に描いていた。
咲き誇る桜に散る桜。地に落ち、はらりと目蓋を撫でる花弁はくすぐったい。彼女の視界にはユニットの皆と、大切な大切な存在が映し出されている。
――この辺なら良い写真が撮れそうじゃねーか？
――そこは半分日陰になっているから、全員が綺麗に映らないわよ。
――ねえねえ、ここならどうかな？　事務所も桜の木も、皆も映ると思うよ！
――あっ、ほんとですね！　あたしもそこがいいと思います！
和気藹々とした空気。しがらみも何もない、心安らぐ彼女の世界。ここが自分の居るべき場所なんだといつでも実感できる。大好きな皆がいて、大切な居場所があって、自分を信じてくれるファンがいて、そして――……。
そんな皆と一緒に、集合写真を撮ることになった。事務所がしっかりと映って、折角

だから春の象徴である桜もよく映る場所で、最高の笑顔で。

――……。

しかし舞い散る桜を見ていると、どうにも心が落ち着かなくなる。春風に揺られて悠々と宙を泳ぐ花弁は美しく、暖かな春の香りを優しく運びながらも、あてもなく彷徨っているようで儚い。一枚一枚が淡い色で漂いながら成す術もなく地へと引き寄せられていくその様に、凛世は焦燥感を掻き立てられていた。

この花たちは、散った後にどうなるのだろうか。その美しさは永遠のもので、ヒトの目より下に落ちても誰かが覚えていてくれるだろうか。

ほんの僅かに心にわいた寂しさを埋めようと手を伸ばしてみる。のらりくらりと自由気ままに落下する花弁は白い手をすり抜け、我が道を行くと言わんばかりに過ぎ去っていく。この一枚一枚はもう過ぎたモノなのだ。人の目に留まることなく静かに、ただ静かに終わっていく存在。彼らを、彼女らを再び綺麗だと感じる存在はきっと多くないのだ。

怖い。

漠然とした恐怖が身を震わせる。運命を抵抗することなく受け入れるその光景に、杜野凛世は自身の在り方とまだ見ぬ未来を重ねてしまったのだ。安寧と桜の織り成す芸術美の全てを享受することができない、皆が咲き誇る花々を見上げているというのに、

自身は散った桜ばかりに目がいってしまう。
いつか自分も、この桜のように――。
――凛世は、いつまで……。
（……そればかり、考えてしまうのは……間違って、いるのでしょう）
この悩みは誰かに打ち明けることもなく自分で解決するべきだと分かっている。だからこそ今回もいつものように、胸に潜む黒く暗い不安感を否定することで打ち消すのだ。こうして凛世は、記憶の世界から現世へと帰還する。
しばらく果穂が制服に対する想いを並べて語っていると、ふと思い出したかのようにぴょこん、と跳ねた。座っていたソファがその体を心地良い感触で受け止めてくれる。
「そういえば！　あたし、昨日かえってから時間があったので、『ジャスティスV』を見たんです！　そしたらジャスティスレッドがすっごくかっこよくって！」
唐突に始まったヒーロー番組の話に、凛世は果穂にも見えないくらい僅かに小首を傾げた。
彼女がヒーロー番組、特に『ジャスティスV』という作品を非常に好んでいるのはよく知っている。ヒーローという存在に対しての憧れは尋常ならざるもので、アイドルとしての理想像、どころか生き様にすら「ヒーローのようになる」と刻まれているほどだ。ユニットのメンバーやプロデューサーにも、その憧憬を喜々として語っている。

しかし、その話題を二人きりでの会話で持ちだされたことはほとんどない。どちらかというと、そういった話は樹里や智代子にするものだとばかり思っていたのだが。

「今回のお話では、ジャスティスレッドがキケンなパワーを使っちゃって……暴走して、ジャスティスブルーを攻撃しちゃうんです！　気がついた頃には周りの皆がボロボロになってて、『もう戦いたくない！』ってなっちゃって」

興奮冷めやらぬ面持ちで、身振り手振りを使って全力で番組の流れを表現する果穂。しかし今回は今までとは異なり、聞けば聞くほどかなり重い展開が進んでいく。子供向け番組でそこまでやっていいのだろうか、というギリギリのラインのストーリーに、説明している果穂も若干悲しそうにしている。

「――それで、敵になったはずのお父さんがやってきて、怖がるジャスティスレッドを励ましたんです！」

「まさかの……展開で、ございますね」

「そうなんです！　あたしもびっくりしました！　お父さんが『恐れるな！　たとえ地に伏しても、どこまでも落ちようとも、諦めることは許されない！』って言って……ジャスティスレッドは、またヒーローとして戦うことを決めたんです！　それがすごく、すっごくかっこよかったんです！」

拳を握って力説され、物語の壮絶さを一身に受け止めたような感覚に陥った。感情的

に語ることができるというのは、彼女の才能の一つだろう。

「それでですね、凛世さん」

不意に、凛世の両手が柔らかな感触に包み込まれる。

見れば、隣に座っていた果穂が真剣な表情で、真っ直ぐ自分を見据えていた。

「凛世さんも、諦めちゃダメですよ！」

「……凛世が？」

一瞬何を言われているのか分からず、目をぱちぱちと瞬きさせてから聞き返す。果穂はその問いに全力で首を縦に振った。

「はい！　凛世さんこの前、桜を見てすっごく寂しそうにしてました！　もし何か辛いことがあったら、あたしとか、樹里ちゃんとか、ちょこ先輩とか、夏葉さんとか、プロデューサーさんに相談してください！」

そして、一息吸ってから、花が咲いたような満面の笑みを浮かべる。

「みんなが、凛世さんのヒーローになりますから」

驚愕のあまり言葉が喉に詰まって出てこない。

ここまで真面目に直球で、心の底からの激励を受けたのは初めてだった。彼女はこれを言うためにヒーローの話をしてくれたのである。とても小学生とは思えない気遣いと、頼もしすぎる笑顔と、いつか自分にかけられた『ある言葉』が脳裏に浮かんだこと

で、凛世もつられて笑顔になった。

きっと果穂は、凛世が桜を見て何を思ったのか分からない。舞い散る桜を見て想ったことも、胸が痛んだ理由も、他ならぬ自分にしか理解できないものだろう。

ゆらりゆらり。

ゆらり、ゆらりとまた一つ。

散りゆく桜が窓の外に見える。毎日、桜は散っている。

暗い色のアスファルトを鮮やかな桃色に変えてゆくその景色に焦燥感を掻き立てられ、縋るもののない漠然とした不安に駆られたのは何故か。他人から見ても丸分かりなほど悲哀に満ちた表情をしていたのは何故か。杜野凛世には、その理由の全てが把握できている。

本来、他人にどうこうしてもらうべき問題ではない。自分で乗り越えていかなければならない問題だ。

だけれど、もし、どうしても、辛くなった時は――

「果穂さん……ありがとうございます」

――頼もしいヒーローに、お力添えを願いましょう。

「ですが、今はまだ。凛世自身で……もう少し……自らに、問いたいのです」

「……？　そう、なんですか？　でもほんとに辛くなったら言ってほしいです！」

「はい、承知……いたしました」

少し、肩の荷が下りた気分になった。

なにかが解決したわけではないけれど、彼女の心遣いと優しさが胸に響く。胸が暖かくなる、ここにいたいと心の底から思える。

「ええ、はい。え、そうなんですか？　そんなことは――」

話が一区切りついた段階でとても聞き覚えのある声が耳に入ってきた。ガチャ、とドアが開く音が一つすると、誰かと真面目な顔で電話をするプロデューサーがあらわれる。

彼は凛世と果穂の姿を確認するや否や、ピタリと動きを止めた。室内が静かだったため、誰もいないと思って入ってきたのだろうか。

「はい、はい。ええと――え？　すみませんもう一度お願いします」

部屋から出ようとするプロデューサーが素っ頓狂な声をあげる。声音に合わせて気の抜けた表情になり、なぜかその視線は凛世に向かっていた。

「はい……なるほど……えぇ!?　いやそれは趣旨がずれてしまいませんか!?　えっ、ちょ、ちょっと待――」

どうやら電話を切られたらしい。あまりにも余裕のない反応をするプロデューサーを見て凛世も不安になるが、相手の反感を買ったような顔はしていなかった。ただ唖然

と凛世を凝視し、繰り返し瞬きをしている。なんともいえない表情からは感情が一切読みとれない――というより、今の彼に感情はないのだろう。奇怪な出来事に出くわしたとでも言いたげで、普段は目にする事ができない呆然とした顔が可愛らしい。

その日、彼の表情の理由を知ることは出来なかったが、凛世は翌日に、彼が電話相手に何を言われたのかを知ることになる――。

四枚目、花時

放課後というものは、その絶大な解放感と青春の象徴のような存在感により、生徒たちの個性が最も表出しやすい時間である。何時間も同じ場所に拘束され続けていた何十人・何百人もの若者が一斉に解き放たれ、彼らを縛るものも引き止めるものも何もない（勿論例外もあるが）、思い思いに行動を開始する瞬間。放課後の楽しみのためだけに学校へ通う人間もいるほどである――それは些か学生として問題がある気がしないでもないが。

「おーい、凛世ー」

校門に佇む、すらりと背筋の伸びた後ろ姿に声を掛ける。日が傾き始めた放課後に校舎から出るなんていつぶりだろうか。もう二度と訪れなかったはずの光景は、信じられないくらい眩い。

まどろみから覚めた視界に差し込む朝日のように鋭い日差しはひどく幻想的で、一時的にでも世界の時が過去に巻き戻されたのでは、とさえ錯覚してしまう。

「――プロデューサー、さま」

短い呟き。降り積もった新雪の如く白い肌の上には、柔らかそうな桜色の唇と二つの

ルビーが乗っている。顔立ちは若干の幼さを感じさせながらもある種の妖艶さを醸し出し、それでいて尚文句のつけようがないほど整っていた。爽やかな微風に揺られる黒髪もまた、凛とした雰囲気を漂わせている。

彼女は昨日と同じ制服姿で校門の前に立ち、優美に振り向いた。

「えっと、どうだ。変じゃないか？」

「ふふ……よく、似合っております……プロデューサーさま」

凛世は誰が見ても一目で分かるほど上機嫌だ。その理由は、いつものスーツではなく〝制服〟を身につけているプロデューサーである。

「まったく、これはいくらなんでもやりすぎじゃないか……？」

凛世の通う高校の男子用制服は、妙にフィットしている制服に謎の違和感を覚えた。もう二度と着る機会はないと思っていたせいだろうか――なんにせよ、いい歳した大人が着るとただのコスプレにしかならないことに違いはない。

――プロデューサーさん、凛世ちゃんとデートしてあげてください！

前日の電話で、凛世の様子を見ていたカメラマンから受けた指示を思い出す。

――今日一日見ていて思ったんです、良い写真は撮れるんですが……一番良い顔していたのがプロデューサーさんと話している時だったんですよね

――え、そうなんですか？　そんなことは

――そんなことありますよ。というわけで、上からの許可も取ってきたので……明日から凛世ちゃんとデートしてあげてください。プロデューサーさんも制服を着てですよ！

無茶ぶりにも程がある。

そもそも「凛世の学校生活のありのままを撮影する」ことが目的だったというのに、制服コスのプロデューサーが介入してアイドルとデートをしている様子を撮影なんてした日には、企画の趣旨のズレどころか炎上しかねない。

言われるがままに制服に着替え、校門で待つ凛世に駆け寄るといういかにもな登場の仕方をしたわけだが、本当にこのまま進んで行っていいのか疑問だ。

「……」

どうしたものかと凛世の方を見るが、何やら浮かれたような熱っぽい視線をしている。自分が歩き出すのを今か今かと待ち望んでいるかのようだ。

「……あの、どうすれば？」

『ではそのままデートコースへ！　大丈夫、変な噂が立つことはありませんよ！　数人で撮影しますから、スキャンダル問題はお気になさらず！』

どこかから自分達を撮影しているカメラマンにスマホで呼びかける――が、どうやら企画はもう、そういう方向に進んでいるらしい。今更抗議の声をあげたところで現状を

覆すのは不可能だろうし、何より嬉しそうに待っている凛世を放っておくのは心が痛む。

「でも、やっぱり趣旨がズレてきていませんか……？」

『何をおっしゃいますか、折角一週間も撮影期間があるんですよ！　もし凛世ちゃんが恋人だったらっていうシチュエーションの写真集とか、絶対需要あるじゃないですか！』

「やっぱり企画変わってきてる!?　いや、さすがにそれは――」

「……プロデューサーさま」

スマホを片手にその場で右往左往していると、凛世が制服の袖をくい、と遠慮がちに引っ張る。

思わず反射的に振り返ると、凛世は眉根を下げて沈鬱げに視線を落としていた。悲しそうな顔にどう対応して良いか分からず硬直すると、彼女は不安げな顔を上げながらこちらを見据えてくる。

上目遣いというやつだろうか、潤んだ瞳が半分ほど隠れ、いつもより鋭い視線が扇情的で、普段とはまた異なる魅力が潜在していた。

「凛世では……役に、不足しているでしょうか……」

「……あー、えーっと。うーん……あー分かった、行こうか、凛世」

「……！　プロデューサーさま……」

彼は懇願するような視線に完全に打ち負けた。

話によると凛世しか映らないよう調整するらしいし、こうした方がいいというのなら、彼女の良い表情を引き出せるのなら、あまり否定的な意見ばかり出し続けるのも無粋だろう。

うっすらと微笑む凛世の横に並び、「行こう」と合図をして歩き始める。制服を着た男女が夕暮れ時に二人で出掛ける姿はもうどの角度から見てもカップルだが、あまり気にしないことにしたプロデューサーであった。

「これから放課後はだいたい毎日俺とどこかに行くことになると思うけど、大丈夫か？」

「毎日……。はい、この上ない幸せで、ございます」

「はは、それは言い過ぎだと思うけどな――」

他愛のない会話を続けながら歩く事数分。時折傍らを歩く凛世の様子を気に掛けながら会話に花を咲かせていると、二人は目的地のカフェに到着した。

商店街の中ほどにある、平日の夕方でもそこそこ繁盛している店だ。何度か訪れたことがある店とは異なり、若干和風のインテリア等を取り入れている少し変わった見た目をしている。

店頭に置かれたメニューを見て、「今だけ！」と大きく書かれた商品を指差した。

「期間限定の『ハルザクラ』っていうやつを頼めばいいんだっけ……お、これだな」
「桜味……」
「美味しそうだな。えーと、座る前に頼めばいいのか」
　開放された入り口から中に入り、メニューで目当ての品を確認してからカウンターへ向かう。注文待ちの列はなかったため、スムーズに進むことができた。
「ハルザクラを二つ……あ、サイズどうする？　凛世」
「大きさは……普通のもので、お願いいたします」
「じゃあ、トールとグランデを一つずつ」
「かしこまりました～！　お客様はカップルでいらっしゃいますか～？」
「はい――え!?」
　反射的に肯定してしまった。
　店員は何食わぬ顔であっけらかんと聞いてくるが、カップルではない。
「ではカップル限定の『逢引割引』を有効にさせていただきますね～！」
「ネーミング！　いやそうじゃなくて！」
「かっぷる……」
「いや凛世？　なんでそんな嬉しそうなんだ？」
　営業スマイルでバリバリに割引をきかせようとしてくれる店員と、恍惚とした表情を

浮かべて呟く凛世。うっかり返事をしてしまったことで収拾がつけられない状態になってしまったらしい。

スキャンダルは気にしなくて良いと言われたし、あまり気にし過ぎるのはよくないだろうか――。嘘にはなるが、割引がきくならそれは誰にでも有り難い話だ。何より〝そういう風〟に見えたのなら、否定するのは空気が悪くなるように思えた。

「じゃあ、はい。その割引でお願いします」

「畏まりました～！　あちらでお待ち下さい～！」

その後は特に何事もなく、プラスチックの容器に入れられたハルザクラを受け取り適当な席につく。向かい合って座れる場所が空いていなかったため、凛世とは細長い形状の机の隅に座ることにした。

「へー、なんか綺麗だな」

ハルザクラ。

名前からして桜をイメージしていることは間違いないのだが、想像以上に『春』の印象が強い。透明な容器は桃色に染まり、容器の外側に映る枯れた木々がまるで色づいた桜のように生き生きとしている。上部分に丁寧に乗せられたクリームと花弁状のチョコレートはとても柔らかそうだった。

ストローを咥えて吸い上げる。容器に収まった桜色が濃い緑色のストローを通過し、

口腔内にひんやりとした感触が訪れる。ほんのりとした甘酸っぱさが舌の上で転がり、弱い力で音を立てて砕けるパフが良いアクセントになっていた。
「……美味しゅう、ございます」
「期間限定って、なんだか特別な感じがするな。俺あんまりこういうところ来ないから、新鮮だなあ」
「……では、またいずれ――」
　と、言いかけた凛世が口をつぐんだ。
「どうした？」
「いえ、なんでも……ございません」
　実は味が気に入らなかったのだろうかと彼女の顔を覗き込むが、どうやらその視線は容器に映った木々に向いているらしかった。飲めば飲むほどピンクから透明な色に戻っていき、元の枯れた枝が露出してしまう様子に、彼女は寂しげな顔をする。
「……。飲み終われば枯れてしまう……少し、悲しく……思います」
「そっか、なるほどなあ。言われてみれば確かに、だ」
「けれども美味、このままというわけには……参りません」
「――凛世、ほら」
　その豊富な感受性に感心しながら、謎のサービスで付け加えられたクッキーを指差

す。ハルザクラとセットで注文すると安くなる、と記述されていた割に一年中販売されていそうな、普通のクッキーだ。真っ白な皿に一枚だけ乗せられている。
「気持ちは分からないでもないけど……とりあえず、それ食べて元気出そう？　な？」
「……はい、ありがとうございます――では」
穏やかな目つきとしなやかな手つきでクッキーを摘み、少し大きめなソレを彼女は自分の口には運ばず――何故か、こちらに向かって差し出してきた。　粉が零れ落ちないよう、もう片方の手も添えて。
「えっと、これは？」
「……あーん」
短い響きが桜味の何千倍も甘ったるい感触をもたらした。
いくら鈍感でも流石にどういうことなのか、理解するに時間はかからない。
「り、凛世……それは、ちょっと」
「かっぷる……でございます」
「へ？」
クッキーを持つ手を僅かに震わせて凛世が言う。いつも通りの穏やかな目に少し微笑んだ口、そしてほんのりと紅潮した頬。そんな表情を目の当たりにして、ますます小っ恥ずかしさが込み上げてくる。

が、一向に止める気配はなかった。むしろだんだん甘い香りが近付いて来ているきがする。

「恋人というものは、このくらいして当然と……学びました」

「どこで!?　いやあんまり間違ってないけど！」

「プロデューサーさま……あーん」

「わ、分かった……あ、あー……んんぐっ!?」

羞恥心を覚えながらも口を開くと、想像以上に力強くクッキーが押し込まれた。否、押し込まれたというかねじ込まれたというべきか。

力の加減が把握できていないせいか、かなり勢い良くズボっと入り込んだ。自分の口って意外と横に広がるんだなーなどと一瞬放心しかける。一枚丸ごと投入されるのではないかと恐れ、強引に噛み砕いてハルザクラを流し込んで食べきった。

「むはっ！　ちょ、ちょっと多かったかな……凛世？」

「……じーっ」

「今度はどうし……凛世さん？」

本番前と同じくらい真剣な眼差しで半分になったクッキーを凝視する凛世。何を考えているというのだろう。

「凛世は……どこから食べれば良いのかと……思考しておりました」

「ごめん、俺の食べかけはいやだよな。もう一枚買ってくるから待ってて――」
「間接キスというものでございます……間接……」
「え？　おーい凛世？　凛世ー！　戻ってこーい!?」
平和そのものの穏やかな時間が過ぎていく。天下泰平、世はこともなし。普段のアイドルとプロデューサーという関係とは少し違った束の間の休息を、二人はきっと楽しめたのだろう。
――そんな放課後が。
「プリクラ……ってあんまりやったことないんだけど、凛世わかるか？」
「はい、何度か。ですが、使い方はあまり……」
「多分ここで絵を描いたり文字を入れたりするんだよな、えっなにその達筆！　俺の名前まで!?」
「ふふ……完璧に仕上げます……お任せください」
――しばらく続き。
「ターキー！　凛世結構ボーリング上手いな！」
「要領が掴めて参りました……制覇いたします」
「よし、俺も負けないぞ！　――あぁっ、一ピン残った！」
――撮影は順調に。

「なんかこのオムライス呼吸してないか……？　ビームで薙ぎ払いそうな見た目してるぞ」
「プロデューサーさま……はい、ちーず」
「えっ今？　ぴ、ピース！　……こんなにテンション高くていいんだろうか」
「とても活き活きと……お映りになって……おられます」
「って、俺の写真いる？」
——順調に、終わりを迎えた。

五枚目、花筏

「いやー、終わったな、凛世」
「はい……今までで最も、充実した日々を……送ることが、できました」
「そう言ってもらえると、俺も素直に楽しかったって言えるよ」
伸びをするプロデューサーと凛世が並んで歩くのはとある並木道。手前に公園が見えるその場所は、咲き誇る桜の木々に視界を埋め尽くされるほどだった。
時間はもう十分に遅い。空にあがった月が夜の世界を薄明るく照らし、星々が瞬きをするかの如く動きをしながら、輝いては消えてを繰り返している。あたりは完全に静寂に包みこまれ、人の声一つしない。
「なんか普通に楽しんじゃったけど、よかったのか……まあ、撮影係の人を信じよう」
「プロデューサーさま……すっかり、制服姿が馴染んでおられます」
「あぁ、四日間も着ると変な感じはしないな。でもこれで本当に着る機会もなくなるわけか」
「――っ」
特に意識することなく呟いた一言に凛世が足を止める。

彼女はきゅう、と胸あたりを掴みながら、はらりと舞い降りる桜の花弁を見ていた。
「……終わりで、ございますね」
「？　そうだな。一週間っていう話だったからな」
凛世は反対の手を静かに前へ差し出し、手の平を空へ向ける。何かの受け皿のようにただ黙して滞在している白い手の平を、宙を舞う花弁は何処吹く風ですり抜けていった。少女の心も想いもすべて我関せずといったふうに、ただただ己が往く道を突き進んでいく。
掴めなかった花弁を感情の灯らない瞳で眺め、凛世は続ける。
「プロデューサーさまは、桜が……お好きでしょうか」
「そうだな、綺麗だし、春って感じがして結構好きだよ」
「では……散った桜は……如何でしょう」
「散った桜？」
その声は弱々しく、聞くだけでも不安な気持ちが含まれていることが分かるほどで。
彼女は何かを求めているのだと、察するには十分だった。
「美しい桜の花弁も……いつかは、散りゆく定め。散った一枚一枚は……人の目に留まることなく……ただ、静かに息を引きとる。そう思うと、凛世は……苦しく、なるのです」

「凛世……」

ゆらりゆらり。

「――『てのひらに　落花とまらぬ　月夜かな』」

ゆらり、ゆらりとまた一つ。

桃色の花弁が宙を舞う。どこへ向かうわけでもなく、ただ悠々と空を踊る。

枝から別れた小さな一枚は儚くも美しく、地に落ちようとする瞬間こそが全てと言わんばかりの存在感を一心に放つ。

「とまらぬ物に、美があることは……重々、承知しております」

桜はいつか、その悉くを散らし、大地を淡い色に染め上げてゆくだろう。

多くの人々が見上げる満開の花弁も、散ればきっと見向きもされない景色の一部へと成り下がる。

光には限りがある。

輝きには限界がある。

永遠と感じられるほどの時間を照らし続けられる光源はおそらく、存在しない。そして光ることに価値があるモノは、輝きを失えば価値も失う。

桜も時期が過ぎれば枯れて散りゆく運命にある。輝けるのは今だけなのだ。

――それでも。

「それでも、凛世は……」

地に落ちようとも、朽ちようとも、輝きを失いたくないと考えるのは、強欲だろうか。

もしもそんな罪深き欲が許されるのなら。散った桜にも美しさがあるというのなら。

「凛世は、いつまでも、永遠に……」

ゆらりゆらり。

ゆらり、ゆらりとまた一つ。

儚く散りゆく桜の花弁。視界を覆うは幻想的な桜吹雪。変わらぬ時を求める心に答を示す者はいない。流れゆく桃色が瞳に映り続ける。止まっている暇はないのだと、訴えかけてくるように。

「――――なぁ、凛世」

――だからこそ、人は歩くしかないのだろう、そう思った。

「確かに、多くの人は散ったあとの桜なんか見ないと思う。まあ、芝桜とか桜のカーペットとか、下を向いて楽しむものもあるって聞くけど……今は、そういう話じゃないんだよな」

今という輝ける瞬間を精一杯、光を失わぬように。

歩くしかない。必要であれば走ることも大切だ。振り返る時間も立ち止まる時間も、生産性も希望もないただ過ぎていくだけの時間なのだ。

それでも苦しくなった時、どうするか。

「確かに、こうやって落ちていく桜っていうのは、踏まれるし汚れるし、あんまり見る人はいないかもしれない」

「……はい」

「けどさ、例えば……あそこの川とか」

振り返って指差した方向には、長く長く流れていく川があった。

普通の川だ。これといって特筆すべきこともない、街中でもよく見かけるものだった。

「……――あ」

小さく、吐息のような声が漏れる。見れば、凛世が驚愕に目を丸くしていた。

夜空を映すはずの川を遮る桃色の欠片。いくつもの花弁が連なって、一つの橋のように水面に浮いていた。

驚いたままの表情で、凛世が呟く。

「……花筏……」

「はないかだ、っていうのか。名前は知らなかったな」

「……はい、水面に浮かぶ桜の花弁を指す言葉でございます」
川の近くまでゆっくりと歩き、傍らの凛世と共に桃色に染まりつつある川を覗きこんだ。
落ちていったはずの桜が月夜に照らされ、再び輝きを取り戻している。まるで枝を離れてもなお、自分はここにいるのだと主張しているようだ。
「こんな風に、散った後の桜も綺麗だと思う。俺は好きだよ」
「プロデューサーさま……」
「桜は散って、終わっていくんじゃない。新しいステージに向かっていくだけだ。皆に見上げられてた姿から、この花筏になるために」
「……素敵な、お考えで、ございます……」
不意にとん、と左肩にほんの僅かに重みがかかった。
少し空いていたはずの二人の距離は完全に埋まり、美しく艶がかかった黒髪が見える。
「……『恋君へ　届けと願ふ　花筏』」
「……え？」
「一句……僭越ながら、凛世の今の気持ちを」
肩に寄りかかっていた存在は何も言わずとも自ら離れていき、制服のスカートをひら

りと優しくはためかせた。無感情だったその顔に小さな微笑を刻みながら、杜野凛世は人差し指をピン、と立てて自分の口の前にもっていく。

「いつかこの句が、貴方さまに届きますよう……」

「え、それってどういう」

「ふふ……今は、秘密です……本当に、ヒーローになっていただけるのですね――」

流麗な動作に見惚れながら、静かすぎる世界と舞い降りる桜たちに祝福され、二人の間には緩やかな空気が流れる。

きっと今までもこれから先もずっと、変わらずにいられる。そんな予感を助長するような、心地の良い空気だ。

数日後、『クラスルーム・ディフユージョン』には五日間の凛世の写真が大量に掲載されていた。

教室に吹いた南風が、机上に広がった教科書を閉じる。柔らかな風と共に春の香りが運ばれ、解放感に身を委ねる放課後を楽しみに――そんな様子の微笑んだ凛世は、今までで最も美しく、輝いていた。

恋蛍―Ｓｕｍｍｅｒ―

いたつき

『人殺す　我かも知らぬ　飛ぶ蛍』

魂の舞踏。死界に漂う夏の夜。荒涼とした人の近寄らぬその場所は、世界がとうの昔に置き去りにした生命全ての終着点。誰もが見捨てた孤高の墓場、誰もが恐れた孤独の墓場。ふらふらゆらゆら笑う影、くらくらきらきら遊ぶ影。

立つは寂れた墓標。揺れるは光の百鬼夜行。暗闇照らす灯りが一つ、闇夜に煌めく星々二つ。

何人たりとも邪魔立てさせぬ、何人たりとも生かして返さぬ。一度訪れたが最後、骨の髄まで貪り尽くさん。

心は此処に在りはしない。

ゆえに心臓型の穴が空いた肉体が、上質な心を、魂を求めるのだ。

「……こんにちは」

少女は来訪者の足音を聞き、静かに嗤う。

整った美しい顔に、怖気すら感じさせるほどの嘲笑を浮かべて、侮蔑の念に満ちた視

線を向ける。彼女は来訪者をヒトと見なしていない、尊い命を宿す者と理解する気もない。寂れた墓地に足を踏み入れるものは全て例外なく、ただの獲物に過ぎないのだから。

肉を喰らい尽くそう。心を貪り尽くそう。そうして心を満たすのだ。そうして、穴の空いた心は満たされていくのだ。

「こんな所まで、わざわざご苦労様。……何をしに来たのでしょう?」

悪戯めいた口調で尋ね、頬に手を添える。長い間雨に打たれたその体はきっと、氷のように冷たいのだろう。触れるだけで凍らされてしまいそうだ。

冷酷、残酷。けれども少女は美しい。嘲るような優しく辛辣な微笑を刻み、針のように鋭く刺さる言葉を連ね、気付けば身も心も溶かされ虜になってゆく。

彼女の名前は『恋蛍』。墓地に漂う無数の光を自在に操り、怪しげな死地にヒトを誘き寄せ、美貌という名の魔法で恋に落とす。

そして、恋を喰らうのだ。熱を持った心身を、自分だけに捧げられる膨大な気の昂り、愛を。魂の往く最果てで永久に愛され続ける、それが彼女の生き様だった。

「……美味しい」

口に付着した生暖かい『赤』を舐める。裂いた肉から溢れ出た生命の源は、いつだって新鮮で絶品。次に肉を喰み、骨を砕き、最後に残した心を丁寧に味わう。心はいつ

だって胸を焦がす程の恋の味がする。酸味と甘味の入り交じった、筆にも舌にも尽くしがたい味だ。

「いらっしゃい、幾万の魂達……」

今日も恋蛍は恋慕を喰らう。

小雨に濡れた黒髪揺らし、夜を照らす赤目を光らせ、黒百合の髪飾りが死を唄い、青白い光の渦に包まれる。不敵に微笑むその様は、まるで三途の川を渡る死神のよう。

しかし満たされない穴はいつまでも、風穴のように空いたまま。

自分は何処へ向かうのか。

何を求めて彷徨うのか。

少女は、恋が知りたかった。

味わう恋ではなく、自らの心に灯した恋が知りたかった。

誰も理解はしない、きっと自分すらも理解していない。帰る場所も戻る場所も、全てわからない。わかろうともしない。愛を灯すその日までは、何もわかりはしないだろう。恋を喰らう魔物は誰よりも恋が知りたかった。恋の味を知っている怪物は、自分の恋を味わってみたかったのだ。

「……いきましょうか」

恋。

死。
恋。恋。恋。死。
恋。死。恋。恋。恋。恋。死。恋死恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋死
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋死恋恋恋恋恋恋恋恋死恋恋恋死恋恋恋恋恋死恋恋恋死恋恋恋恋
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋死恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋——恋。

いつの日か、味わえる日は、来るだろうか。
繕るものもない微かな願いを胸に秘め、今日も哀れな恋が死んでいった。

「——はい、カーット！」

張り詰めた空気を一つの掛け声がばっさりと切り裂く。緊張しきった場の雰囲気は、声一つで弛緩する。
「オーケー！　良かったよ凛世ちゃん！」
「……ありがとう、ございます」
おどろおどろしい雰囲気から解放され、舞台の中心にいた凛世が深く頭を下げた。先程までヒトを喰らう怪物、「恋蛍」を演じていたとは思えないほど丁寧な動作で、口から出る言葉は柔らかな声音で奏でられている。

彼女は一話限りのスペシャルドラマ『人喰い蛍』の主役である、冷淡で他人を見下す性格の人物を演じていたのだ。

「プロデューサーさま……いかがでしたでしょうか」

「お疲れ様。俺も良い演技だったと思うよ、すごくハマっていた。なんというか……こういう役もできるんだな」

純粋に心からの賞賛を送るが、少女の秘める無限の可能性に身震いする。普段の凛世は礼儀正しく真っ直ぐな人物だが、「恋蛍」は間違いなく常識の範疇から外れた狂った人物像をもっていた。杜野凛世といえば大人しく清楚に振る舞うキャラクターが似合っているとばかり思われていたが、これを機にその評価も変わっていくだろう。

これまでとは明らかに違う、新たな可能性を見出すことが出来た。今後の方針も少し組み直す必要があるかもしれない。

「凛世は……プロデューサーさまや……ファンのみなさまのためなら……どんな役でも、演じてみせます」

「頼もしいな……なあ、さっきの演技、もう一回見せてもらえないか？」

「……？」

可愛らしく小首を傾げる凛世。頭上に疑問符が浮かびそうなほど不思議そうにするが、数秒もしないうちに「畏まりました」と言って姿勢を正す。

「プロデューサーさまは、今は……凛世ではなく、『恋蛍』が……よろしいのですね」
「え？　いや――」
「ふふ……冗談でございます」
珍しくからかうような言い回しをするあたり、気分が良いのだろうと察する。今回の撮影はリテイクなしの一発終わりだ。誰だってうまくいけば気が良くなるだろう。凛世はにこりと微笑むと、胸に手を当て静かに息を吸った。
刹那、空気が変わる。
「これで、よろしいですか」
軽いキャラ崩壊だ。
口調は普段とほとんど変化がないように思えるが、内に秘めた気質と表情が凛世のものではない。完全に墓場に漂う蛍の主になりきっている。
他者を蔑むような眼差し。嘲るような声音。同じ空気を吸うことですら唾棄すると言わんばかりの表情。優しく、尊敬の眼差しを向けてくれる姿はそこにはなかった。
「……いつまで、こうしていれば良いのでしょう」
「おぉ、まだ収録してないところのセリフもやってくれるのか……」
「この心が届かず……いつになれば、理解してもらえるのでしょうか」
「……ん？」

覚えのない台詞だ。台本ではたしか「来る日も心を貪り」で始まるはずだが。
「実は、楽しんでいるのですか」
「り、凛世……さん？」
「私の心を見て見ぬふりをして。もう十分ではしょう？　貴方の気持ちが、知りたいのです」
ずい、と遠慮なしに距離を詰められる。表情はサディスティックなため変な性癖が芽生えそうになるが、風変わりした様子に怖気付いている気持ちの方が若干強い。いつもより少しだけ砕けた言葉遣い、冷酷だが嗜虐的な雰囲気をまとった演技、覚えのない台詞。もしかすると、台詞ではなく――。
「……失礼、いたしました。二つの場面の台詞を……混同して、記憶しておりました」
「……あっ、そうなの……か？　いや……俺も、急に演じてくれなんて言ってすまない」
「良いのです。やはり……婉曲な物言いでは、届きません」
張り詰めた糸が解けたように凛世が演技をやめた。謝罪の言葉に畏れ多いと首を振るが、どこか不満げな顔をしている。
「凛世、言いたいことがあったら遠慮せず言ってくれていいんだぞ？」
「遠慮せず……」

「ああ。なんでも聞くからさ」

掛けられた言葉に、不満で曇りかけていた顔が明るくなった。感情表現に乏しいと思われがちだが、明るくなったり暗くなったりする時は他のアイドルよりも分かりやすい場合がある。

遠慮せずに、と言われながらも凛世は目を逸らし、どこか別の方向を見ながらなんともいえない顔になった。何か言いたげ、ということは分かるのだが、それ以上は分からない。

「……プロデューサー、さま……凛世……は」

ゆっくり、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

恐らく前々から言おうとしていたことがあるのだろう。言いたいことは頭の中ではっきりしているのだが、口にするのが憚られるといった様子だ。

「……あちらの」

「あちら？　ポスター……夏祭りの？」

「はい……」

『雷火來耶！　業火聖結祭！』と、デカデカと漢字が存在を主張しているポスター。大仰な名前だが要するに近辺で行われる夏祭りの告知であり、今までも何度か目にしていた。

夏祭り。ポスター。物申したそうにしているが言いづらそうな凛世。近いうちに夏祭りに関連する仕事はないため下見ではない。導き出される答えは――

「ああ、皆で行くから休みが欲しいってことか？　もっと早く言っておけばよかったな。そうだと思って休みの日も調整するつもりだったんだ」

「……プロデューサーさま」

「ん？」

「……。……」

沈黙。不満がある、といった感じではない。何を考えているのだろう。撮影用のスタジオには既に凛世とプロデューサーしか残っておらず、閑散とした空気が溢れていた。

少し肌に擦れるようなピリピリした空気感。更に、凛世が口と目を閉ざしてしまったことにより、居てもたってもいられなくなる。何か間違ったことを言っただろうか。ユニットのメンバーで夏祭りに行くという話を、どこかで耳にしたはずなのだが。

「いえ……なんでも、ございません」

「そ、そうか？　じゃあスケジュールはまた後で組むから、一旦事務所に戻ろうか」

「……はい」

穏やかな笑みを浮かべる凛世を疑問に思いながらも、ひとまず行動することにした。

二人は照明が完全に落とされ暗くなったスタジオを後に、

「ちょっと、待ちなさい!!」

自信に満ちた表情でドアを開け放ち、曖昧な現実に喝を入れるべくよく通る声が突き抜けてくる。橙色の長い髪が爽やかに流れ、突風のごとく現れた人物が二人を見据える。

もどかしい時間は終わりだと、停滞した世界に一石を投じるかのように、その瞳はどこまでも真っ直ぐだった。

のべつまくなし

　日差しが強い。空から無遠慮に降り注ぐ熱光線がアスファルトを焦がし、身体を覆う外気は常に生ぬるい。それは直射日光を浴びる屋外で泣くとも同じことで、むしろ室内は空気がこもって逃げられない分、余計に暑く感じた。
「今冷房をつけたから、しばらくの間暑いかもしれないわね。平気かしら、凛世」
「はい……然程、暑さを感じませんので」
「そう、なら良かったわ」
　額の汗をタオルで拭いながら凛世をじっと見据えるのは有栖川夏葉だ。放課後クライマックスガールズに所属するアイドルの一人で、ユニットの中でも最年長、緻密なスケジュール管理をし、毅然とした態度を崩さないといった点から、皆から頼られたり、レッスンの予定調節を自ら行ったりするというリーダー的存在となっている。
　彼女はジャージ姿でスタジオに突如現れ、有無を言わさぬうちに凛世を連れ出した。状況が把握できていないままジャージに着替えさせられ、普段はダンスレッスンで使用する部屋に連行され、今に至る。
「夏葉さん……これは、一体」

「いきなりごめんなさい。今日アナタには、私からのレッスンを受けてもらうわ」
「……凛世の至らぬ点を、指導してくださるのですか？」
「あー、えっとだな。そういうのじゃねーんだ」
短く切り揃えた金色の髪に手を当て、西城樹里が言う。やや億劫げにしているがしっかりとジャージを身につけているあたり、彼女も夏葉に呼ばれてここにいるのだろう。
「アイドルの話は一旦置いといてな、ちょっと……もう少しその、なんつーか……」
「何を恥ずかしがっているの樹里。そんなに恋愛話は苦手なのかしら？」
「う、うるせーよ！　悪かったな苦手で！　縁がないんだからしょうがねえだろ！」
「……恋愛？」
荒っぽい口調で言いながら顔を真っ赤にするという可愛らしい一面を見せる樹里。腕組みして余裕そうな態度をとる夏葉。仲睦まじく微笑ましいやりとりを余所に、凛世は首を傾げた。
恋愛。ユニット内では、智代子以外からはあまり聞かない単語だ。
「そう、恋愛……あなたがプロデューサーに対して抱いている感情の話よ」
「――！」
ぴくり、と体が小さく跳ねる。
プロデューサーに対する想い。それは憧憬や尊敬だけではなく恋慕の情もあり、「あ

なたと永遠に添い遂げたい」と臆面もなく口に出せる程度には、本気だ。初めて出会った日に掛けられた言葉と優しさに惹かれ、アイドルとして活動するようになってからも想いは増すばかり。

　日を跨ぐたびに心から彼を強く想い、時間が立つほどに甘酸っぱく切ない気持が強くなる。きっとこれからもこの気持ちが変わることはなく、いつか届く事を願っている――まさしく、恋だ。

「本当は、人の恋路に口出しするのは気が引けるのよ。だけどアナタたち、お互いにすれ違いが多いし、見ていてハラハラしてしまって」

「申し訳……ございません」

「謝らなくていいの。智代子も、進展がない原因はほとんどプロデューサーにあると思うって言っていたし、あなたを責めるつもりはないわ。ただ――」

　一度言葉を区切り、夏葉は凛世の肩に優しく手を置いた。

「どっちが悪いとかじゃなくて、凛世。アナタはもう少し自分の言いたいことを言えるようになるべきだわ」

「要するに。……夏祭り、まだ誘えてないんだろ？　アタシらも手伝うぜって話だ」

「い、いえ……そのような、お手を煩わせることは……」

「いいから。私たちも力になりたいのよ」

いつも以上に真剣な表情。全員分のレッスンスケジュールを立案したときと同じ顔をしている。

果たして素直に気持ちを受け取るべきか、迷惑がかかることを懸念して断るべきか。凛世の心の中で二つの意見がぐるぐると渦巻く。確かに夏祭りには誘いたい。想い人と二人で楽しみたいと思っている。しかし、自分の欲だけで、多忙なプロデューサーを振り回すのはどうだろうか。

――自分の気持ちは迷惑になるのではと、いつもそればかり気に掛けている。

いつだって自分のために考えてくれて、いつだって自分のために動いてくれて、いつだって最善のアドバイスを与えてくれる存在。自分はもうアイドルとして輝ける世界に、最高の舞台に連れてきてもらっている。これ以上を望むべきではない、浮ついた心は全てを滅ぼす、そう考えてばかりで前に進むのが怖いのだ。いつか伝わって欲しいと思う気持ちすら、今の関係に終止符を打ってしまうのではと、いっそ伝わらない方が幸せなのではと考えてしまう。

けれども、もし。胸を焦がす熱い気持ちが伝わるのなら。想いの丈を伝えられるのなら――。

……。

……。

……。

「……お願い、いたします」

凛世は、他者の意見を多く取り入れることも必要だという結論に至った。

「任せなさい！　まず手始めに、祭りに誘えないと何も始まらないから……今から樹里をプロデューサーだと思って、誘うのよ」

「はぁ!?　なんでアタシなんだよ！　聞いてねーぞ！」

「私はもう少し凛世の様子を客観的に見る必要があるのだから、アナタしかいないでしょう」

「……あー、わかったよ。じゃあ、凛世。いつでもいいぜ」

「樹里さんを、プロデューサーさまに……」

本番を想定したシミュレーション。言いたい言葉を遠慮して引っ込めてしまうのは、確かに改善すべき点である。目の前で堂々とたつ樹里を無言で見つめ、凛世は自分自身の世界へ没入していく。

――樹里さんは、プロデューサーさま。樹里さんは、プロデューサーさま。樹里さんは――

「……プロデューサーさま……」

「お、おう。何かね凛世くん」

「樹里、それ本気でやっているの？」
「えっ？　ど、どんな感じだ……？」
「とりあえず喋らない方が似ているわね」
「……わかった」
ここにはいないはずの人物がいつのまにか現れたような気がして、少しばかり顔が熱くなるのが分かった。凛世は凄まじい集中力で、樹里をプロデューサーに置き換えることに成功したのだ。
「……凛世は」
何を言えば良いか、祭りに誘うのだ。
それは何故か、彼と二人で行きたいから。
どうして二人で行きたいのか。そんなことは決まっている、決まりきっている。
好きだから。この世の何よりも愛おしく、かけがえのない大切な存在だからだ。恋蛍は恋を知らない、しかし杜野凛世は恋を知っている。生きる糧となるほどの原動力を知っているのだ。
「貴方さまと、二人で、祭りに行きたいのです」
胸の奥からこみ上げる炎のように熱い想い。感じる度に幸せで、けれど心は寂しくて。収まりきらず抑えられないものを吐きだすために、今まで何度も、等身大の愛を口

にした。何度も何度も、何度も、何度も。時には少女漫画の台詞を借りて、時には敢えて遠回しな表現をして、時にはわざと真意を捉えにくいように伝えて。心の奥底で「きっと伝わりはしない」と諦観して、溢れる愛を吐露し続けてきたのだ。

今までのそれはただの自己満足。けれど――

「どうか凛世に……お付き合い……いただけないでしょうか……」

もっと前に進みたい。吐き出さなければ溢れてしまうこの愛を、受け止めて欲しいと思った。

きっと届かない、今はまだ伝わらない。そう思い続けているのはきっと、胸に秘める想いが本当に伝わった時、今という幸せが変化してしまうのが怖いから。言い方が悪いだけ、伝わりにくいだけ、彼の受け取り方がかたいだけ、今はまだ今はまだと現実が大きく変わるのを、本当は恐れている。

だから届かなくても仕方ない。いつか届けばと後回しにしている。心の中では、想いに気付いてもらえないことを少しだけ安堵していることにも、気付かない。

（もう……恐怖に怯えている場合では……ないのでしょう）

想いを成就させるには覚悟を決める必要がある。

今に満足している時間も、そろそろ終わりが近いのだろう。

「おっ、おぉ……なんか、告白でもされた気分だ」

「完璧ね。これならプロデューサーにも伝わると思うわ」
　照れ隠しに樹里が背を向け、夏葉も満足げな顔で頷いている。凛世はようやく己と対面する夢から醒め、意識が現実へと戻ってきた。ふわふわしたまどろみの中に身を委ねていた感覚が残っている。
「夏葉さん、樹里さん……」
　二人の名を呼ぶ。シミュレーションは終わったはずなのに、胸中には今までよりもずっと、ずっと強い想いが宿っていた。心臓に火でもついた気分だ。
「凛世はプロデューサーさまが……好き、です」
『お慕い申しております』
　いつもだったなら、そう言っただろう。しかし思ったのだ、もう抑えられないと、いつか必ず伝えたいと。考えれば考えるほど強くなる気持ちを自分のもので収めるのは嫌だと、思ったのだ。
「……大丈夫そうね。それじゃあ私は走りに行くわ。あなたたちもどうかしら？」
「もう終わりでいいのか？」
「自分の気持ちに整理がついたみたいだし、これ以上私が割って入るのもお節介じゃないかと思ったのよ」
　言われて、ようやく気がつく。本当は、夏葉のスケジュールではランニングをする時

間帯だったのだろう。
その時間を凛世のために割いてくれたのだ。
「でもよ、外かなり暑そうだぜ？」
「あら、随分消極的ね。また私に走り負けるのが怖いのかしら」
「はぁ？　アタシの勝ちだったはずなんだけどな？　良いぜ、もう一回やってやるよ」
春のことを思い出す。果穂も凛世が悩んでいた時に、悩みを打ち明けたわけでもないのに励ましてくれた。
自分が真っ直ぐにプロデューサーを想っていられるのはユニットの皆のおかげなのだと、改めて実感する。
「……凛世も、ご一緒させていただきます」
きっと外は暑い。ランニングの距離がどの程度のものか見当もつかないが、日頃から鍛えている夏葉の事だ、楽観視できる距離ではないだろう。終わった頃には汗も疲労感も、相当なものになるに違いない。
それが魅力的だった。大好きな人たちと一心不乱に身体を動かすことができる時間はおそらく限られており、それは逃してしまえば永遠に戻ってこない時間だ。プロデューサーと同じくらい、ユニットの皆との時間も大切にしたい。
欲張りだろうか、あれもこれも欲しいというのは間違っているだろうか。否、この世

界は彼が導いてくれて、皆がくれた幸せで溢れている。遠慮することの方が間違っているのだ。

そうして幸せを噛みしめながら、少女は淡い心を鮮やかに彩っていく。様々な色が混ざり合う様は感情のぶつかり合いでありながらも美しく、やがて暖かな一つの色にまとまって静かに溶けていった。

そろそろ蛍が舞う頃だ。曇った心を照らす光のように、小さな命が暗がりで輝いている。

それは儚く、しかし輝きは永遠に。

闇に沈んでいく世界を照らす小さな希望は、弱々しく、けれども強く舞っていた。

◇　◇　◇

夏の宵、そこは閑散とした空気と孤高な静寂に溢れている筈の世界。

虫たちのさざめきが時折聞こえ、暗い闇がただ広がるばかり。空には星々が輝き始め、うっすらと月が世界を照らし出す。街の大通りから少し外れた道を歩けば人の気配は少なく、その場所も本来は寂れた商店街の一部に過ぎなかった。塗装の剥がれ、降りたシャッター、めくれたタイル、消えかけの街灯。人で溢れ返る街の裏には、悲しいく

らい廃れた場所もある。
しかし、その日の商店街は普段からは想像もつかないほど賑わっていた。
賑わうといっても、普段がほとんど無人である状態に比べて、という話ではあるが。
「チョコバナナ！　やっぱりお祭りと言えばチョコバナナだよね！」
「あーっ！　ジャスティスファイブのお面があります!!」
「……思っていたより賑やかね」
夏葉による凛世の特訓（？）から三日後の夜。放課後クライマックスガールズは、ユニットの五人で揃って、小さな祭り会場へと足を運んでいた。
女五人で訪れた祭りはお世辞にも大規模とはいえないが、一本道にずらりと並ぶ屋台を見ているだけで一時間は潰せそうなくらいには会場が広い。
「張り紙だけ見たときは、屋台が十個くらいだと思ってたな」
「これくらいの規模なら皆で浴衣を着てもよかったわね……」
浴衣で祭りという夏を象徴するような楽しみを逃してしまったことを夏葉が悔む。
祭り会場を発見したのは偶然で、彼女のランニングに同行した際に樹里が張り紙を見かけ、それに興味を抱いたのがきっかけだった。どう見ても無人に近い旧商店街を見て、大したビッグイベントではないが折角だから行ってみよう、という話になったのである。

しかし蓋を開けてみれば想像の十倍近くは広い会場。通りが人で埋め尽くされるほどではないにしろ、思っていたより来客数も多い。地元民に愛され続けている年に一度のイベント、といったところだろう。

「とりあえず、一度端まで行ってみましょう。どんな屋台があるか見てから、何を買うか決めるのが良いわ」

「え？　普通に欲しいものあれば買えばいいじゃねーか」

「手当たり次第にモノを買うのは、金銭感覚が狂う切っ掛けになりかねないわよ？」

「そんなこと……いや、ちょっとあるかもな」

夏葉と樹里が今後の動きについて意見を出し合っている。だが果穂と智代子は既に少しずつ進み始めており、視界に映る限りの屋台全てに目を輝かせていた。主に果穂が。

凛世も、なんとなく二人についていく。

「ヨーヨー釣り、金魚すくい、しゃてき、あてくじ……どれも面白そうです！」

「折角だし、一緒に何かやってみる？」

「はいっ！　凛世さんも一緒にやりましょう！」

「はい……是非」

祭りの屋台の種類には飲食系と遊戯系の二つがある。飲食系は目当てのものを購入

して味を楽しむだけだが、遊戯系というものは実力や運次第では単なる金銭の浪費にしかならない場合があるため、人によっては存在自体を嫌うこともあるだろう。
特にあてくじは完全に運任せな上、あたりくじを予め抜くという悪質な経営者もいるため、当たるかもしれないというワクワク感を純粋に味わうことができる子どもでなければ、楽しむことは難しい。
「……あてくじは、やめようね？」
「どうしたんですか、ちょこ先輩」
「あてくじは当たらないと思うから！　やめよ!?」
どうやら約一名、苦い思い出があるようだ。
「では……金魚すくいは、いかがでしょう」
「はいっ！　あたしもやりたいです！」
「よしっ、じゃあいこっか」
まず始めに三人は金魚すくいの屋台へ赴く。祭り会場の入り口から少し離れた位置にあるソレは、通常の屋台のデザインを守りながら、木でできた金魚の看板や流れる水のイラストなどで見栄え良く彩られている。張られた薄い屋根の下、年季の入った三脚椅子にどっしりと腰を据えた中年の男が細い目で三人を見た。
「みんな、やってくかい？　ポイによって値段が変わるよ」

「ポイ？　って、すくう網のことですか？」

伸ばした人差し指を顎に当てながら果穂がたずねる。

小学生といえど、金魚すくいという文化にそこまで精通しているわけではないのだろうか。

「ああ、三種類だ。一番破れやすい……まあボロだな。これが百円だ。次に普通のやつは小赤が七匹くらいはとれるやつで、二百円。んで……ちと値が張るが、そう簡単には破れねえがっちりとしたやつが五百円だ」

「ひ、一つだけ値段全然違う……！」

「びっくりするだろ、茶髪のお嬢ちゃん。けどこの一級品は他二つと同じ場所で使えば、多分全部掬えちまうんだわ。だから」

「――わぁっ」

どっこらしょ、と男が身体を捻り、奥の方に潜んでいた大きめのタライを持ち上げる。腰に負担がかかっているのか、やや辛そうな顔をして、既に店頭に置かれていたタライの隣に置いた。

置かれたものは同じ、しかし中身の違いに果穂が声を上げ、智代子も中を覗きこんで驚く。

「五百円払ったら、こっちでやってもらうぜ」

タライの水が波紋を生む。隣の金魚たちより一回りも二回りも大きい個体のものが悠々と――否、暴れ狂うように水中を乱舞していた。中には小さな金魚もいるのだが、やはり気性が荒いのか凄まじい速度で泳ぎ回っている。

あまりの猛烈っぷりに智代子が若干引き気味になり、逆に果穂は興味津津といった様子で目を輝かせていた。無自覚だが凛世の視線も荒れる金魚たちに釘付けだ。

「えっと、なんでこんなに元気なんですか？」

「ぶっちゃけ、わからん！　けどこいつらは今はこんなだが、誰かの手に渡ればそりゃあもう人懐っこくて可愛いもんだぞ。この暴れ具合も感情が豊かってことなんだろうな」

「金魚に人懐っこいとかあるのかな……？」

「生き物であれば、感情は命と同じもの。凛世は……そう思います」

「どうする？　やるかい？」

ニィ、と口角を吊り上げて笑う中年の男に、果穂が真っ先に手を上げる。シュバッ！

と効果音が鳴りそうなほどストレートに掲げた右腕と輝く表情からは、好奇心と同時に幾らかの自信が感じられた。

「はいっ！　あたし、五百円の――」

「ま、待って果穂!?　積極的だね!?」

「だってちょこ先輩！　あんなに元気な金魚！　欲しいじゃないですかっ！」

興奮しているのか、それとも似たような気配を金魚たちから感じ取ったのか。何にせよ彼女は一番上等な得物で金魚すくいをやりたいらしい。

しかしここで安易に許可するのも如何なものだろうか。いくら勢い良く暴れ回っている個体が欲しいとしても、金魚すくい一回に五百円は些か高いような――

「果穂さん……お金に余裕はあると思われますが……使い過ぎは、控えましょう」

と、思ったので凛世は可愛らしくぴょんぴょん跳ねる果穂を宥める。

一般のこどもと同列に扱うわけではないが、夏葉が先程言っていたように無計画な出費は金銭感覚に狂いが生じかねない。大人になるまでは、ある程度自制をきかせておいた方がいいのだろう。

「そう、ですね……分かりました！　じゃあ、二百円のでお願いします！」

「それじゃあ、私も同じので！」

「凛世も、そちらで……お願いいたします」

「おう。しっかりとれよお嬢ちゃんたち！」

それぞれ二百円を支払い、縁の色が果穂は赤、智代子は黄、凛世は青のポイを手に取る。三人が覗き込んだ水面には大人しくも悠々と泳ぎ回る金魚たちがおり、小さい赤や小さい黒、大きめの赤や白と赤色など、カラーのバリエーションもなかなか豊富なものだ。

横一列に並んで屈む。小さな世界を縦横無尽に駆け巡る魚たちをしばらく眺め、どれを取るべきか決める。やはり金魚も生物ゆえにそれぞれに個性があり、全く同じ動きをする存在はいなかった。

「ていやぁっ！」

「それっ！」

「……えいっ」

――結果からいうと、惨敗。金魚は予想以上に素早く逃げ回り、その小さな体で三人を翻弄した。果穂は間髪入れずに水につけすぎてポイが破れ、智代子は最初の一手で金魚に突撃されて穴を空けられ、凛世は同時に三匹を掬いあげて確保しようとするところまではよかったものの、網の上でのた打ち回る金魚の重みでポイがダメになってしまった、という結果だ。

「……で、一匹だけお情けでもらってきたってわけか」

「はい……今日の金魚さんは、すごく調子が良かったみたいです……」

参加賞兼敢闘賞として手に入れた赤い魚を見ながら樹里が苦笑い。肩を落として戻ってきた三人に、夏葉もなんともいえない表情をしている。

ちなみに情けの一匹は果穂が持ち帰ることになった。手ぶらで終わるよりはマシな結末といえるだろう。

「あんまり気にしていてもしょうがないわ。次に行きたいところを探しましょう」
「皆元気出せって。そうだ、さっき美味しそうなジュースの屋台があったから、そこ行ってみねーか？　隣にチョコバナナもあったぜ」
「はっ、チョコバナナ！　そうだった！　私はそれを楽しみにしてたんだったよ！」
「あたしもチョコバナナ食べたいです！」
　切り換えが早い。金魚すくいの失敗はそこまでダメージになっていないようだ。
　顔色を明るくして次なる目的地へと足を運ぶ果穂と智代子、肩を竦めて微笑みながら二人についていく樹里。足早に駆けていく三人を保護者のように見守る夏葉が、口を閉ざして前を真っ直ぐ見詰めている凛世の隣に立った。
「どう？　良い案は浮かびそう？」
「……よく、分かりません。凛世は、何をすればよいのでしょう……」
「難しく考えすぎよ、プロデューサーと来た時のこと」
　少しずつ足を進めながら夏葉が呆れたように言う。
　寂れた商店街で開催される夏祭りに来た真の目的、それは『シミュレーションパート2』である。プロデューサーを夏祭りに誘った後、実際にどのような行動をするべきか把握したいという凛世の要望を、夏葉は快く承諾してくれたのだ。
　誘うべき祭りはもっと大規模なもの。しかし男と二人で祭りにいくという経験は凛

世にとって初めてである。予習をしておいて損はないだろう。
「まず、アナタは根本的な考え方が少し違うんじゃないかしら」
「根本的……」
夏葉は橙色の髪をバサリ、と掻き上げて、信念の籠った力強い視線を凛世に向けた。
「多分だけれど、『どうすればプロデューサーに喜んでもらえるか』を考えているんじゃない？」
「はい……凛世が誘い、プロデューサー様にお付き合いいただくので――」
「それが違うのよ。いや、素敵な考えだけど……まずは凛世。アナタが楽しいと思える事を見つける必要があるわ」
焦げた匂いが食欲をそそる。容赦なく火に焼かれたイカの匂いだ。
たちこめる煙が屋台から漏れ天まで昇り、涼しい風が吹く中で暑苦しさを思い出させる。夏の夜というものは、涼しさと蒸した暑さが混在しているものなのだろう。
カラフルなリンゴ飴には艶のかかったコーティングが施され、「どこからでも齧りついて良い」と言わんばかりの完璧な丸々とした形状が愛おしく思える。少し離れた位置で樹里たちがチョコレートのかかったバナナを買い終え、楽しげな表情を浮かべていた。
やることもできることも、此処にはたくさんある。夏にしかできないことが山のよう

に存在しているのだ。
「凛世が、楽しいと思えること……」
「アナタなら多分、プロデューサーと一緒に居られれば全部楽しいと思うけれど……折角一緒な時間ができるなら、もっと楽しい時間にした方が有意義になるわよ？」
「……では、夏葉さん」
「何かしら」
「凛世の『楽しいこと』探しに……お付き合いください」
じっと、まだまだ続く道の先を見つめながら凛世は言う。
夏葉はその言葉に対して、ただ短く答えた。
「勿論」
熱気と静かな寂しさと、心の温まるような優しさと。全てが混ざり合って溶けてゆく。この感覚を彼と味わうことができたらどれだけ幸せか——そう思うと、凛世の胸の中にふつふつと思いが浮かび上がってきた。
その思いは欲望。彼と、こんなことができればという願い。彼女は胸の内に漂う欲が真実であるかどうかを調べる為、無言のまま本能の赴くままに足を進めた。
「では——」

とんとん

殺意。殺意。敵意。剥き出しの殺意、溢れる敵意。

もう長いこと腹の虫が機嫌を悪くして鳴いている、五月蠅い。喧しい。口にいくら血を含んでも肉を押し込んでもこの空腹は満たされず、ただ果てのない飢餓が満ちるのみ。いつぶりかも分からない苛立たしい感覚とわき上がる暴力的な食欲に、彼女は目を爛々と輝かせながら穴が空くほど前方の空間を凝視していた。

血の最後の一滴まで、骨と肉を一片も残さずにこの浮くような胃袋に収めたい、そんな衝動が何度も何度も湧き上がってくる。欲望の連鎖で頭が埋め尽くされてしまう。空腹による感情の暴走が全く抑えられず、己の中を濁流のごとく這いずりまわる無限の欲望が視界を埋め尽くしている。

壊したい。嬲りたい。刻みたい。消したい。捩じ切りたい。引き千切りたい。潰したい。殺したい。抉りたい。奪い取りたい。狂わせたい。掻っ捌きたい。引き裂きたい。滅ぼしたい。噛み砕きたい。屠りたい。舐りたい。縛りたい。絞めたい。斬り落としたい。吸いとりたい。削ぎ落としたい。打ち砕きたい。虐めたい。苛みたい。葬りたい。味わいたい。崩したい。貶めたい。辱めたい。弄びたい。刺したい。絞りた

い。穢したい。染め上げたい。堕としたい。剥ぎ取りたい。雀りたい。食べたい。食べたい。食べたい。愛されたい。愛したい。愛したい。愛したい愛したい愛したい愛愛愛愛愛愛愛愛――。

溢れる嗜虐的思考の中心にあるのは、やはり彼女特有の愛欲。存在全てを喰らい尽くしてしまいたいという傲岸不遜で傍若無人で放辟邪侈な、身勝手な欲望である。

「そこにいるのでしょう？」

ぬらりと揺れる瞳に、遅れて紅い眼光が軌道を描く。狙うは一点。倒壊したビルの瓦礫に隠れた、若く強い生命力をもった一人の青年だ。

「なっ、なんで！　なんでこんなことするんだ!?」

青年は青褪めた顔にだらだらと汗をかき、悲鳴すら恐怖で上塗りされながらも必死に声を上げる。気を失いそうなほどの絶体絶命な状況に瀕しているというのに、それでもなお冷静さを保とうとする姿はとても気丈だ。目の前に化け物が現れても生きることを諦めない姿勢も、勇敢そのものである。

しかし、少女の頭につけた黒百合がしゃらん、と鈴の跳ねるような音を鳴らすと、心地良く響くはずの音色に青年の身は恐怖で震えあがった。振り絞ったなけなしの勇気を嘲笑うかの如く一瞬で、たったひとつの音で、彼の心は半壊以上に蹂躙されたのである。

「ひぃ……っ!?」

「なんだっていいと思います。知った後には何も残らないのだから」

艶のある髪を控え目な雨で濡らしながら、少女は首をゆらりと横に傾けた。剣呑とした雰囲気を身に纏い、殺意に満ちた瞳からは苛立ちも感じられる。

場所は無数の人々が行き交う都市の交差点付近にあるビル――などがあったはずの、瓦礫と死体が散乱した灰色の世界。災害でも起きたのかと疑わざるを得ないほど破壊の限りを尽くされており、逃げ遅れた人間たちは既に息絶えている。

なぜこうなってしまったのか。それは彼女が――恋蛍が、人の立ち入ることを禁じられた『最果ての墓場』から抜けだし、人間界へ足を踏み入れてしまったから。さらに元を辿るとするのならば、全ては瓦礫を盾に怯える青年に起因する。元来、恋蛍の領域とされている墓場に訪れたものは皆、問答無用で骨抜きにされて恋に堕ちるものだ。しかしあの男だけは、自ら土足で踏み入れてきた癖に慌てて逃げ帰ったのだ。

「けれども、強いていうのなら……貴方のせい、でしょう」

来るものを一切拒まずに与えられる一方的な恋や愛を貪ってきた彼女にとって、これは由々しき事態である。なにせ食事がやってきたと思ったら脱兎のごとく逃げ出したのだ。初めての出来事ゆえに何も考えず飛び出し、無我夢中で青年を追いかけ続け――あらゆる障害を破壊して進み、ついに追いつめることに成功した。

彼女は透き通る刀身の愛剣を肩に乗せ、刺さるような声音で喋る。
「貴方を追いかけているうちに、貴方の恋が知りたくて堪らなくなってしまいました。責任を取ってワタシの血肉となりなさい」
「い、いやっ、言っている意味がよくわからなっ」
――ズガアン！　と耳を劈くほどの破壊音が一つ。
恋蛍は瞳から迸る紅い光を揺らし、無気力な動作で剣を投擲。切れ味抜群の得物が青年の頬を擦過してそのまま背後へと通り抜けていき、積み上げられていた瓦礫の山木端微塵に吹き飛ばしたのだ。
軽い靴音を鳴らし、黒いワンピースの裾をはためかせながら、少女は獲物へと歩み寄っていく。
「口答えは、だーめ……です」
ゾクリ、と健康的な肌が震えあがる。頬や手足を返り血に染めているとはいえ、甘い声で嗜虐的な表情をする姿は純粋に美しい。妙な妖艶さと絶対的な恐怖が織り成す二重奏は青年の心を――
「だからっ、どういうことなんだ！」
「……！」
それでも彼は折れなかった、否――堕ちなかった。

今まではこうしていれば全ての生物は怪物の虜になり、糧となることを喜んで受け入れていたというのに。

「……そう、ですか」

ゾクリ、と自分の体が震えるのが分かった。

自分は今興奮しているのだ、未知との遭遇に。いままで退屈で腐っていた世界を彼なら変えてくれるかもしれないと、暗く淀んだ蟠りから解き放ってくれるのではないかと、恋を、愛を教えてくれるのではないか、と。

少女は小さく微笑む。それは他者を見下すような嗤いではなく、これから起こることへの期待と希望に心躍らせた可愛らしい微笑だった。

「貴方にお願いがあります……ワタシに、恋を……教えてください」

「――はい、オッケー！　いい感じだよ凛世ちゃん！」

監督の声で作り上げられていた場面の空気が霧散する。殺伐としていた世界線は彼方へ葬られ、そこに『青年』と『恋蛍』の姿はなく、セットされた瓦礫に囲まれた二人の男女が立っていた。

杜野凛世は演じていた役から本来の彼女へと戻り、無機質で感情の読みとりにくい瞳で周囲を見渡す。少し離れた位置で小さく、人に聞こえない程度に拍手をして自分を見

ているプロデューサーの姿を見つけた。
「じゃあ今日はここまで！　お疲れ様――！」
「お疲れさまでーす！」
「……」
上機嫌な監督の言葉で一気に解散ムードが広がっていき、一つの作品のためにその場にいる全ての人々が同じことに集中していた雰囲気は完全に消えてなくなる。凛世は何人かに「今回も良かったよ！」「リテイク全然出ないなあ、すごいよ」などの声をかけられるが、当たり障りのない返事をして足早にその場を去っていく。
鼓動が高鳴る。演じ終えた解放感とどうしようもない期待と不安が全身の脈を駆け抜けているのが分かった。怖いと思う反面、これからのことを考えると、楽しいことや幸せなことが待ち構えているような気がして、それだけで口元がゆるんでしまう。
「プロデューサーさま」
「お疲れ、凛世」
聞きたかった声がすんなりと滑らかに耳に入る。短い言葉で優しい顔をして、彼はいつものように微笑んだ。
「俺も結構、あの演技をしている凛世に慣れてきたよ」
「……凛世は未だに、違和感を覚えてしまいます」

「そうなのか？」
「はい……ですが、今はそれで良いのです」
演じている自分自身が感じている違和感の正体は、自分の中でなんとなく答えは出ている。それはきっと、恋も愛も知らない恋蛍が少しずつ恋を知っていくという物語の途中までしか演じていないからなのだろう。何にせよ、今は特に気にするべきことではない。
それよりも言わなければならないことがある。この日の収録が終わったら彼に伝えようと、夏葉と決めていたのだ。
「あの、プロデューサーさま」
「どうした？」
「……あちらの、夏祭りのことでございます」
緊張で少しだけ震える人差し指で前方を指し示す。簡易的に設置された机の上に、以前見た夏祭りのチラシが置かれていた。記述してある内容は変わらない、しかし開催日は少しずつ近づいてきている。
言えばいい。言うと決めた今日、この瞬間に。これを逃せば自分が決断する前に祭りの日は過ぎ去ってしまう。しかし「言葉にする」ことは決して容易ではない。プロデューサーに対する好意が本物であると再確認出来て、予行練習もしたとしても、彼に

自分の気持ちを素直に伝えることは、決して簡単なことではなかった。
拒絶。一抹の不安が拭いきれない。もし心からの想いを告げたとして、それを彼に拒まれてしまったら、自分はその時平常心を保っていられるだろうか。
全くもって難儀な話である。自分の気持ちをひとつ操作できないことに呆れて、どんな顔をしていいのか分からない。早く告げれば良いものを、一言いえばいいだけなのに、その一言が実際になると怖くてなかなか出てこない。
（ですが……）
『アナタが楽しいと思える事を見つける必要があるわ』
一つの言葉が浮かぶ。それは当然のことであり、いままで自分ができなかったこと。
気持ちを伝えるのは難しい。言葉にするのも難しい。ならば人は、何がその難しさを上回って行動に移せるのだろう。
そんなもの、胸に秘めた想い以外にあり得ない。
「……凛世は貴方さまと、二人で。あの祭りに行きたいのです」
過去にいえた言葉を丁寧に、ゆっくりと噛みしめながら、いう。
「アイドルやお仕事とは、一切関係がなく。ただ純粋に貴方さまと……二人で」
後の事を考えると恐怖から胸が苦しくなるが、てのひらでそっと優しく押さえつける。

今は楽しいと思えることをするために、言わなければならない。
「どうか凛世に、お付き合い、いただけないでしょうか」
――言い切った。
今までは、迂遠で一歩引いた表現ととられても仕方のない言い回しばかりしてきたが
――今回は、正確に。誤解されるようなことは一切ない言い方ができたはずである。
そして、精一杯の誘いに対して、彼は。
「えっ……と。その、俺でよければ」
少しだけ恥ずかしそうに頬を掻きながら、遠慮がちに答えた。
数日後の予定が埋まった瞬間である。

どろん

縁日の日の催し物は地域や主催する組織によって少しずつ異なるが、細部の違いを差し置いて明確な差が出るのは、規模の大小による客の数だろう。小規模なものでは「人が少なくていまいち盛り上がらない」という意見が出ることもあり、逆に規模が大きいと「人が多すぎて身動きがとりづらい」「駐車場から会場が遠すぎる」などの不満があがることもある。どちらが良いと一概には言えないが、必ずしも人は多い方が良い、ということではない。

そして、凛世が入ろうとしているのは、規模が大きいほうの祭りである。

装いは紅の浴衣。持ち得るモノの中で最も紅く、情熱的な色合いをしている。お気に入りの下駄と小鬼百合の髪飾り、そして藁人形。

前方には燃え盛るように広がる祭りの明かり、後方には静かに広がる暗い道。賑わいと静寂のちょうど境目に立ち、彼女は口を閉ざして夜空を見上げていた。

「お待たせ、凛世」

不意に声がかかってくるりと振り返る。いつも聞き慣れている声だと思い心躍らせて振り返った凛世は、良い意味で絶大な衝撃を受けた。脳天から足のつま先まで落雷が

走って痺れたような感覚だ。
「プロデューサーさまも……浴衣を……」
「俺だけラフな格好でいくのもどうかと思ってさ。あとはほら、この方が夏っぽいだろ？」
　青の浴衣。どこまでも透き通り澄み渡る空色と、大らかなる深い海の色。二つの色が上半身と下半身の間に引かれた一本の白線で住み分けられている。背の高く顔立ちも整っている彼と穏やかな青色は非常に噛み合っており、大人らしい気質を感じさせた。
　夏場の熱にやられただろうか。いつも以上に彼のことが愛おしく見えてしまう。
「というか、俺結構早く着いちゃったかなって思ったんだけど……いつからそこに？」
「凛世も、先程到着したばかりでございます」
「そっか。待たせてしまったわけじゃなかったなら良かった」
　ちょっぴりと嘘をつく。本当は三十分ほどまえからこの場所に居たが、そんなことは一々報告する必要もない。楽しみすぎて予定時間まで我慢ができなかっただけなのだから。
「割と早い時間なのに人が凄いな。とりあえず何の屋台に行くか決めるか？」
「……あの、プロデューサーさま」
「どうした？」

「凛世は……貴方さまと行ってみたい屋台をいくつか、考えております」
「お、凛世からそういうことを言ってくれるのは珍しいな。じゃあその屋台を探そう」
「はい」
夏の冷たい夜風に頬を撫ぜられながら、二人は祭りの中へと足を踏み入れていった。既に月が昇っているとは思えないほど明るいその場所はとにかく多くの人で溢れ返っており、待ち合わせの時間が早かったためにまだ動きやすいが、あと一時間もすれば前に進むのにも時間を要するようになるだろう。
左右を屋台に挟まれた通りはどこまでも長く続いている。微かに聞こえる音楽は和太鼓や尺八を用いたもので、飄々としていながらもどっしりとした音の重みが心地良い。聴覚が吸収する音のほとんどは個々を認識することすら困難なほどの声の群れ。人々の会話が様々な角度から飛び交い、混ざり合い、暴力的に鼓膜を叩くも、それすらも夏の祭りの様式美に感じられる。
そんな中で、隣にいる彼の声だけはしっかりと、はっきりと耳に届くことが凛世にとってこの上ないほどの幸せだった。
「まずは、あちらのものを」
「金魚すくいかぁ、懐かしい」
人混みを順調に進んでいった先に見えたのは、果穂と智代子と挑戦して惨敗した金魚

すくい。屋台の造りが非常に見覚えのあるソレは、以前のときと同じであることがすぐにわかった。三脚椅子にどっしりと腰を据えた中年の男は、今日も腕組みして流れていく人の群れを眺めている。

二人が屋台に近寄ると客だと分かったのか、腕を解いて此方を一瞥した。

「いらっしゃ……どこかで見た気がするな、お嬢ちゃん。まあいいか、やってくかい？」

「二人分お願いします。ここはポイが選べるタイプなんだな。凛世、どれにする？」

「凛世は……。……」

二百円のモノを選んで失敗したのを思い出す。店側に不正はないと思うが、三人全員あっさり破られたことを考えると思いきって五百円払ってしまった方がいいのではないかとすら思考してしまう。流石に二回連続で金魚が掬えないのは凛世としても少し悔しくなる。

口に手を当てて悩んでいると、プロデューサーが肩をちょんちょん、と小突く。

「俺結構得意だから、コツ教えようか」

「ご指導いただけるのでしょうか？」

「はは、そんな大層なものじゃないけど。一回見ていてくれ」

彼は百円を払って一番安いポイを受け取った。二百円のモノですらかなり破れやすく感じたのだが、楽しげに微笑む横顔には絶大な頼もしさがある。

「うーん、どうしようかな。あの辺にするか」
そう言って素早く水の中にポイをつける。狙いを定め、一匹の金魚目掛けて放たれた一手は惚れ惚れするほど美しい動作で、見惚れているうちに狙った金魚を掬いあげてお椀に移し終えた。
流れるような掬い方に凛世は目を丸くする。一番安いポイであっさりと成功できるのは、彼の腕前だろうか。
「こう、斜めから入れて、できるだけ網を一気に素早く水に浸からせる感じかな。俺は小さい頃からだいたいこれで上手くいっていたと思う。ほら、こんな感じで」
今度は水中を泳ぐ金魚たちをちらと一瞥したかと思うと、先程よりも速くポイを投入してもう一匹の金魚を掬い上げた。反対の手に持ったお椀には二匹の小赤が悠々と泳いでいる。
「達人並みの……腕前でございます」
「いやいや、本当にそんな大したものじゃないから。凛世もやってみれば分かるよ」
「では……あ……」
再び水面に向き直って自分も再挑戦してみようと思った矢先に、凛世の脳裏に一つの思考が過った。
プロデューサーが獲った二匹の金魚。彼らは小さな世界でしっかりと生きて、持てる

力を発揮して自由気ままに泳いでいる。だがどちらも元気に泳いではいるものの、以前目にしたような活力のあり余った暴走、といったかんじの動きではない。どちらかというと控えめで、見ていて微笑ましくなる。

あの二匹はもう客が自らの実力で勝ち取った金魚。つまりこのまま持ちかえることができる。その二匹を無意識になにかに重ねたのか、凛世の頭の中ではなぜか「これ以上増やしたくない」という謎の思考が生まれてしまっていた。

「凛世は、遠慮させていただきます」

「えっ、どうした?」

「いえ、少々気の迷いが生じました。プロデューサーさま……一つ、凛世の身勝手を聞いてはもらえないでしょうか」

「勿論いいけど……なんだ?」

「……」

なんだろう。

彼のもつお椀の中で泳ぐ片方が欲しくてたまらない。一度「祭りに誘う」という最大の難所を突破し終えた後だからか、欲が遠慮なしに次々と生まれてしまう。いつから自分はこんなに欲深くなったのだろうと、少しだけ恥ずかしさに反応して体温が上がった。

しかしこんな欲を表に出してもいいものか。自分の気持ちに素直になり、楽しいと思えることをしようとしても、こんな自分勝手すぎることを頼んでもよいのだろうか。

「お嬢ちゃんが一匹欲しいってよ、兄ちゃん」

暫し逡巡していると、ニヤニヤと二人の様子を見守っていた屋台の男が割って入る。

プロデューサーはばしばしと割と強めに肩を叩かれ、お椀の中身が零れないように両手で抑えながら凛世を見た。

「あ、そうだったのか?」

「いえ、その……。……はい」

「身勝手なんかじゃないだろ。俺がとったのでよければ譲るよ」

「ありがとう、ございます……」

そんなこんなで、よく分からない欲が浮上したが故に金魚すくいは再挑戦することなく終了した。しかし一匹ずつ小さな袋に入れられた金魚たちを見ていると口元が思わず緩んでしまう。愛嬌のある二匹の小さな生命は別の部屋に閉じ込められながらも、近い距離で存在している。今まで近いようで遠かった、彼と自身の距離を彷彿とさせ、お揃いで袋を持っているという現状にすら嬉しくなった。

ここにもう一匹別の金魚が混じっていたとしたら、きっとこんな気持ちにはなれなかったと思う。凛世は以前智代子から借りた少女漫画で、今の自分達のように一匹ずつ

金魚をもつ男女の絵をみたことがあるのを思い出した。
（凛世は……あの姿に、憧れていたのですね）
金魚すくいの屋台に行ったのにすくっていない、おかしなことだ。けれども心は十分に満足した。
次に二人が目指したのは射的の屋台。射的は前々から気になっていたため、夏葉と二人で挑んだものだ。あまり扱いが分かっていないがまあまあな成績を残した凛世と、ほとんどの的を正確に撃ち抜けるが目玉の景品だけは簡単にはとれず、取れるまで挑戦した夏葉と。初めての経験だったがかなり楽しかった。あの楽しい時間を是非彼と過ごしたい、そう思ったのだ。
「射的かぁ、懐かしいな……へー、あれ結構昔のゲーム機だ！　ああいうのも置いてあるのか……凛世はなにか欲しい景品見つけたか？」
「はい。凛世はあちらのぬいぐるみを狙います」
コルク銃を受け取って、横並びになって銃を構える。縦横に組まれた木の板にはいくつもの景品が並んでおり、凛世が狙うのは橙色の柴犬のヌイグルミ。どことなく果穂に似ているし、凛々しい表情は夏葉にも似ている。サイズは少し大きめで簡単には落とせないように見えるが、注視すると置かれている木の板からいくらか後方に下がっているのが分かった。運が良ければあと数発で落とせそうだ。

「大きいの狙うんだな。じゃあ俺はあのゲーム機を狙ってみよう」
「ふふ……勝負、でございます」
「望むところだ！」
テンションを上げて乗ってくれる優しさに、温かな気持ちになる。深いことも細かいことも全て忘れて楽しめそうな雰囲気で、周囲の喧騒と道行く人々で緊張する空気などは一切ない。だというのに彼と会った瞬間から、心臓はトクトクと少しだけ速く脈を打っている。幸せの中に妙な照れくささもあり、きっと顔も赤いままだ。彼の笑顔を見るとそれだけで幸福が胸に舞いこんでくる、隣に居てもらえるだけで身体が浮くような気分になる。でもほんのりと帯びた熱も赤くなった頬も恥ずかしいから、全て夏や祭りの熱させいにして誤魔化したい。
いつからこんな風に想えるようになっただろうか。誰かのために全てを捧げたい、誰か一人のためだけに己の全てを注ぎたいと、いつから自分はここまで他人を慕うようになったのだろう。想いが強すぎて悩むことも胸が締め付けられることも、数年前までは考えられなかったことだ。
（この気持ちこそが……幸せなのでしょう）
ポン、ポン、ポン。
高い音が鳴って真っ直ぐ飛ぶコルク。僅かに後方へとずれていくぬいぐるみ。「大き

いものは頭を狙いなさい」と夏葉に教えられたとおりに狙撃すると、どしんと構えていたはずの柴犬は存外あっさりと落下した。全弾を使い切ることなく標的を撃ち落とすことに成功――なかなかの達成感だ。

「すごいな凛世、俺の方は……あれ動くのか？　全然動く気がしないんだけど」

プロデューサーが渋い顔をして唸っている。全部の弾を撃ちこんだようだがあまり動いているようには感じない。どうやら彼が狙うのは小型の機械らしく、一目見ただけでもかなりの重量があることが分かった。機械が箱に内包されている上に横に平たいせいでなかなか落とせないように見える――そもそも落とせるのだろうか、あれは。

「プロデューサーさまは、あの景品をご存じなのでしょうか？」

「あれは俺がまだ子どもの頃にハマっていたゲームなんだ。かなり遊んだんだけど今はもうどこ行ったか分からなくて、久々にやりたいなと思って……凛世？」

「凛世に……お任せください」

傍らに立つプロデューサーに半歩近寄って銃を構える。銃口をしっかりと標的に向けて一発。軽い音を立てて飛行していった弾丸は過たず命中、しかし同じように軽く頼りない音を立ててくるくると回転しながら大地へと転落していった。

「ちょっと落ちそうにないよな。凛世、残りの弾は取りたいものに使って――」

「凛世が落としたいのは……あの景品のみでございます」

「い、いつも以上に真剣な表情だ……」

彼が欲しがっているのだ。先程の金魚のお返しをするなら今しかない。

しかし機械の入った箱はびくともせず、ひょっとして底の面が木の板に固定されているのではと疑いたくなるほどの強度を誇っている。生半可なやり方では絶対に落とせない、あまり大きくないためにパッとしない印象だが、実はこの店の目玉だったりするのかもしれない。

凛世は以前の射的で、夏葉が言っていたことを思い出す。

――景品だけを見ていたら、落とせないこともあるの。全体をよく見ることよ、凛世。

「全体を……よく見る……」

一度景品から視線を外してその周辺を見回す。他の景品が組まれた木の板の上に並び、板は少し古いものなのか若干曲がっていたり傾いていたりと心許ない。

成る程、狙うなら其処だろう。

「プロデューサーさま……見ていて、ください」

残り二発のうち一発を撃ち込む。狙うのは景品ではなく乗っている板の、縦と横が交差している部分。狙い通り弾は命中し、古びた板はコルクが当たった衝撃だけで傾いた。間髪いれずにもう一発撃ち込んで追撃――グラグラと斜めになって傾いていた土台は二回にわたる衝撃でガコン、と音がして外れ、景品ごと落下する。

屋台の中で様子を見ていた男性が「あ～やっべ、さっきの子たちが撃ちまくったからか……？」と呟きながら板と景品を回収。プロデューサーは驚愕した表情で凛世を凝視していた。
「すごいな凛世、こんな特技があったのか！」
「ふふっ、特訓の成果が出たようです」
「特訓？」
プロデューサーが欲しがっていた機械は無事に渡すことができ、続いてアクセサリー屋、お面屋、ヨーヨー釣り、あてくじ等、様々な屋台を回り、食事以外のものはある程度制覇できたため、ひとまず飲み物を買うことにする。最初の金魚から始まり射的の景品、お面や水風船などでかなり持ち物はごちゃついてきたが、お互いに収納用の道具を持っていたために隙はなかった。
飲み物も祭りだから、ということで『電球ソーダ』なるものを購入。電球型の容器に注がれた炭酸飲料水がカラフルに発光し、様々な明かりが灯る中でも一際存在感を放っている。その光は幻想的というよりは現代的だ。
「てっきり電球みたいなやつにソーダが入っているだけだと思っていたけど、ちゃんと光るんだな」
「とても……綺麗です」

凛世はメロンソーダを、プロデューサーはレモンソーダを。緑色と黄色が主張の激しい光を見せつけている。一口飲めば甘く冷たく、それでいて口の中で弾ける強烈な炭酸が味覚を刺激。容器が特別なためか、飲んでいるものも風変わりしたもののように感じられるのが面白い。

「飲み物買えたから、さっき話していたトルネードポテト買いに行くか？」

「はい。参りましょう」

と、口内で奔放に弾ける炭酸を感じながら、凛世はプロデューサーの袖を引いて足を止めた。

「プロデューサーさま、あちらの方々は……」

「え？」

凛世の視線は二人が今歩いてきた方を向いている。その目線に誘導されてプロデューサーも振り返り、意外そうな顔をして「おぉ！」と声を上げた。その先にいるのは人だかりから手を振ってやってくる数人の男性で、彼らは息を荒げて全員こちらに走ってきている。

うち一人の茶髪の男が肩で息をしながら一番乗りで到着し、表情を喜色に染めて声を張り上げた。

「おぉい！　久しぶりだな！　こんなところで会うなんて！」

「お、お前らなんでいるんだ!?　ココ住みのやついないだろ？」
　プロデューサーの声が少し違う。根本的な部分は何も変わらないが、声音に一切のかたさを感じない、男性同士の会話だからだろうか――否、この声音はきっと、気を許し合っているからこそのものだ。複数人の男性は学生時代の旧友、といったところか。
「二丁前に浴衣着て彼女とデートかよ！　俺らむさ苦しく野郎で集まってるのにな！」
「全然顔変わってねえなー。なんだ、まだ学生みたいな面してるぞ！　ハハ！」
「そうかねえ？　隣に可愛い子いるからちょっと大人びてみえるけどな？」
　活気が有り余って溢れ出るほどのテンションで次々に話しかけられ、プロデューサーも久方振りの再会を喜んでいるのか、心の底から楽しげな表情を浮かべている。
「あーもー、同時に話しかけてくるな！　落ち着け！　すまん凛世、こいつら中学とか高校の頃の友人でな……」
「……プロデューサーさま、とても楽しげなお顔をされております」
　自分も見たことのない表情ではあるものの、新しい一面を垣間見ることができたのは純粋に嬉しい。
　――が、なにか胸に突如として靄が棲みついたような感覚がある。あまりにも唐突すぎて何が原因なのか見当もつかない。
　不思議に思っていると、最初に話しかけてきた茶髪の男が今度は凛世に話を振ってき

た。
「こいつの彼女さん、でいいんかな？　どうよー、結構鈍いやつなんだけど振り回されてない？」
「い、いえ……凛世は……」
「こらやめろ。まずこの子は彼女じゃないから」
「違うのか？　浴衣デートって完全にカップルだろ？」
「確かに浴衣着てはいるけどな、だから――」
　困惑した表情でプロデューサーは腰に手を当て、反対の手を前に突き出して制止のポーズをとる。彼がその姿勢をとるとそれまで各々で騒いでいた男性たちが一気に静かになり、周囲の空気が祭り全体の熱さから取り残されたような感覚に陥った。
「――この子は仕事仲間だ。そういう関係じゃないよ」

ピ　　シ　　リ。

破壊。空気が木端微塵に打ち砕かれた。

何の空気が？　プロデューサーの一言が投じられた直後に、彼らはそれまでと同じように和気藹々と会話を楽しんでいる。別に壊れていないしどこもおかしな点はない。ならば何の空気が？　何が壊れた？　ヒビが入って亀裂が刻まれ砕け散ったのはなんだ？　なんだ、なんだ――。

「……プロデューサーさま、折角の機会です。旧交を温めてください」

「え、でも凛世」

「凛世の心配は……不要です。今の内にとるねーどぽてとを、買って参りますので

……っ」

今すぐこの場を離れたい。

今すぐこの場を離れたい。

イマスグコノバヲハナレタイ。

脱兎の如く勢いで、苦しさに締め付けられる胸を抑えながら凛世はその場を足早に去っていく。

そこまで傷付くようなことを言われたわけではないし、彼の言葉は真実であり覆しようのない事実だ。仕事仲間、その通り。何一つとして間違っていない、何一つとしておかしな点はない。

それでも彼の言葉で崩れてしまったモノはある。何気ないさらりと出た発言だったとしても、それが当たり前の現実だったとしても、これほどまでに心を焦がすほどの想いを抱えながら——仕事仲間と、ただそれだけの関係だと断言されてしまうことは、耐えられなかった。

自分の気持ちに素直になる。伝えたい事をしっかり伝える。

もしかしていくら恋に積極的になったところで、アイドルとプロデューサーという『立場』が足枷になって全てを邪魔するのではないだろうか。彼と出会えた切っ掛けであり彼と関わることができるようになった切っ掛けが、自分の想いを通すことを妨げて

しまうのではないか――どうすればいいのか、分からなくなって。
好きだとしっかり言葉にしたにも拘わらず、杜野凛世の心は不安で再び揺れ動く。脆く淡く、悲しいくらいに足元が覚束ない想いを抱えながら、彼女は祭りの会場を抜けだした。
最後に聞こえた彼の声を聞き入れることなく、熱さも幸せも全て置き去りにして。

「なあ夏葉、本当にこれやる必要あるのか……？」
「当然じゃない。無理やり練習させて本番の様子を見守らないなんて、そんな無責任なこと出来ないわ」
祭り会場の木の陰から声がする。其処には二人の浴衣を着た女がおり、彼女たちは喧騒と人混みで絶え間なく動いている祭りの様子をひっそりと見ていた。
一度関わって後は当人に任せるということが性格上許せなかったのか、祭りに来るついでに凛世とプロデューサーを見守ることにした夏葉と、半ば強引に連行された樹里だ。
「い―だろ別に。上手くやってるじゃねえか。なんつーか……申し訳ない気持ちになってくるよ」

「私もそう思うけど、あのプロデューサーはアクアリウムの時のことがあるもの。もしもやむを得ない事情で抜けたら、その後の凛世はどうなるかしら?」
「心配しすぎだろ……」
いつになく過保護になる夏葉に樹里が辟易して溜め息を吐く。とはいえ彼女の考えていることに全く賛同できないというわけではない。
凛世とプロデューサーの関係は傍目から見ていてもすれ違いの連続で、近いようで常に一定の距離を保っているように見える。お互いが深層心理で考えることは不明瞭だが、想いと配慮の行き違いでかなりトラブルが発生しやすいため、周りの者は割とハラハラしているのだ。
今までは無関係故に口を出す者はいなかったが、今回は「第三者の介入」という今までにないケースになっている。関わった以上最後まで見届けたくなる気持ちは痛いほど分かっていた。
そもそも樹里自身もシュミレーションと称して凛世から率直な想いを述べられた身なのだから、気にならないわけがないのだが。
「とにかくもうしばらくは身守るべきだと思うわ」
「その後はどうするんだよ?」
「夏祭りを満喫するに決まってるじゃない」

予想通りの答えに笑みが零れる。なんだかんだ言って夏葉的には祭りの方がメインだったりするのかもしれない。初めから分かっていれば智代子や果穂も呼んだのだが、と少し後悔する。

（でもあの二人は今回のこと知らねえし……うーん、やっぱ皆で来ればよかったかな）

手始めにゲットした水風船をビヨンビヨンと弄びながら、口を閉ざして思考。前回五人揃って祭りにいけたとはいえ、どうせなら規模の大きい方にも行くことが出来れば良かったと思う樹里であった。

「まあ何にせよほどほどにしろよな、あんまり遅くなると明日もレッスンだし……夏葉？」

喋りながら横目で一瞥すると、夏葉の表情が強張っているのがわかり、疑問符を上げる。

何があったのかと思い凛世たちを見て――ああ、そういうことかと、理解した。

知らない男性数名。楽しげに会話していたプロデューサー。そして、一人抜け出した凛世。

俯いていて表情は見えなかったがとても穏やかな雰囲気だとは思えない。プロデューサーが話していた男たちのことは分からないけれど、夏葉が危惧していたことが起こってしまったことだけは瞬時に理解出来た。

「――樹里」
「なんだ？」
「ちょっと、行ってくるわ」
「……ああ」
ひどく落ち着いた声音の夏葉に短く返事をして、人混みの中に毅然とした態度で入っていく様子を見届ける。何が起きてこの後どうなるのかは分からないが、悪い結末にだけはならないでほしいと、西城樹里は夜空を見上げながら願った。

自分は何をしているのだろうと己の愚かさを呪うのは、これで何度目になるか分からない。揺さぶられて落ち着かない心に平静を取り戻そうと拳を握りしめるが、力んだところで得られるのは途方もない虚しさだけだ。冷えた夜に相応しい冷風と乾いた空気が慰めるように優しく肌を撫でた。
「……」
此処は墓場。数えきれないほどの人で賑わう世界から少し離れた位置にある、小さな小さな墓石の集落。誰が眠っているのか、どれほど長い間眠っているのか何も分からないけれど、祭りにあるような暖かい空気がここには存在しない、そして自分は今、そんな空気を欲しているということだけは分かる。

何も浮かばず何も考えられない。お面、水風船、電球ソーダ、ぬいぐるみ――それらを持つこともやめてしまった。今は何もないただの地面に無造作に置かれている思い出に過ぎず、輝かしいモノのはずなのに目を背けてしまう。

唯一すぐには手放せなかった水の入った袋をぼんやりと眺める。赤く小さい金魚が相変わらず好きなように泳いでいるが、その世界は少し窮屈そうに感じた。早く帰って水槽にでも移してあげなければ。

「なぜ、凛世は……このようなことを……」

誰に届くわけでもない呟きが漏れて閑散とした墓地に虚しく散っていく。墓石に生えた苔は根元から徐々に浸食をすすめ、いつしか全体を覆い尽くすだろう。自分の心も苔のような不安に覆われ、押し潰されて諦めてしまう日がくるのかもしれない。

逃げてきてしまった。夏葉や樹里に手伝ってもらって勇気を得たと思っていたのに、伝えられないのは嫌だからいつか必ずと覚悟も決めたというのに、全部蔑ろにして葬り去ってしまったのだ。

だって分かってしまったから。結局自分はアイドルであり、職業柄一緒に居るだけの人物で、他意は一切ないと認識されていることが。どれだけ想い焦がれて憧れようと、結局は叶わない恋であることを理解してしまったから。今日だってきっと、精一杯の想

いで誘った祭りすら、「ただそういう付き合いでしかない」のだということを。

諦める、いやそんな考えは浮かばない。何年も届かず叶わないとしても自分は永遠に、何度でも彼に恋をする。だからこそ辛いのだ。

思い返せば今まで何度もこんなことがあった。自分の気持ちは迷惑になるだとか、邪魔な存在なのではないかとか。春には果穂にもプロデューサーにも励まされ、そうして今度は夏に思い悩んでいる。難儀な性格だと、自分で自分を嘲笑してしまいそうだ。

虚しさ、苦しさ、切なさ、痛み、憂い、陰り、曇り。

恋とは前途多難である。生まれも育ちも考えも、何もかもが違う人間二人が同じ想いを抱えなければ成立しない。しかし片想いは苦しく、辛いことばかり。もしかすると恋に向いていないのではないか、いちいちこんなことを気にする心さえなければ、自分は彼や周りに迷惑をかけることなくアイドルとして活動できるのではないか――正解が分からない。問いかけても全て虚空に吸われて消えてゆく。やるせない心と同じように、全て夏の夜に溶けて消えていくのだ。

「……恋とは……なんなのでしょう」

遠くで愉快で軽快な音が響いている。あそこには楽しさも幸せも暖かさもあった。逆にこの場所には何もなく、闇を照らす月明かりすら心を刺してくるほどだ。

ふいに凛世は、眼前を漂う光の粒に目を奪われた。闇夜を照らすこともできないほど

弱々しく淡い光がふらふらと舞い、懸命に輝こうとしている姿――蛍だ。
「あなたは、どちらへ向かいますか」
か細く強い意志がこもった光に、まだ収録されていない台詞を投げてみる。虫に言葉が通じる筈がないのはわかっているが、今は話し相手がほしかった。
しかしこうして口を動かしていると気を紛らわすことができるような気がして、続ける。
「……いつまで、こうしていれば良いのでしょう」
答えはない。
「この心が届かず……いつになれば、理解してもらえるのでしょうか」
答えはない。
「実は、楽しんでいるのですか」
答えはない。
「私の心を見て見ぬふりをして。もう十分でしょう？　貴方の気持ちが、知りたいのです」
答えはない。答えはない。答えはない。答えはない。答えはない。答えはない。答えはない。
何を何度言ったところで答えはない。これが物語ではなく自身の台詞で、伝えたい人

に伝えられる気持ちのすべてであったのなら違ったかもしれないが、臆病な心から引き出せる言葉はもうなくなっていた。

一通り言い終え少しだけ気分も落ち着いた、これ以上虚しさが増す前に、金魚が苦しくなる前に、帰ろう。

「――ここにいたんだな」

帰ろうとした瞬間、背後から声をかけられてゆっくりと振り返る。その声を聞いただけで心臓が跳ねてしまうのを自覚し、本能に忠実な心に呆れてしまう。

青い浴衣。頭にかけた狐のお面。ゴムひもが伸びきった水風船。蛍より強く光る電球ソーダ。機械の入った箱。そして、袋の中を泳ぐ金魚。夏祭りの楽しさが具現化したような出で立ちのまま、彼は確かに其処に居た。

「ごめん、凛世。俺のせいで折角の祭りがこんなことになってしまって」

口から出る言葉は切れがよく、しっかりと耳に入り込んでくる。首筋を伝う汗や乱れた吐息で、彼がどれだけ全力を尽くして走ったのかが分かった。けれど時間は然程経っていないことを考えると――

「どうして、凛世がここにいると……お分かりになられたのでしょうか……」

「なんとなくというか、ほとんど勘だった。今の凛世がどこに行くかって考えて、ここじゃないかと思ったんだ」

祭りを抜けだして墓場に来る者などそうそういない。それだけ考えを読みとられたということか。

それならばこの恋心にも気付いてくれればいいのに――と良くない感情が浮かび、俯く。想いが伝わるだけでは駄目なのだ。想いを伝えるその先を望んでいるというのに、成就しないことを恐怖している、叶わない恋を恐れている状態で、伝わってはいけない。

結局は失恋という未知なる魔物が怖いだけだと、心を蝕む痛みに涙がこぼれた。頬を伝う一筋の水滴はひどく冷たい。

「り、凛世!?　泣くほどだったのか……本当にすまない」

「いえ、プロデューサーさま、凛世にも理解出来なく――」

「訂正させてくれ」

言葉を遮って神妙な面持ちで、彼は一歩前に出た。

「凛世のことを俺は仕事仲間って、さっきのあいつらに言った。けど言い方が悪かった。悪過ぎた」

もう一歩、もう一歩前に出て、徐々に歩み寄る。距離を詰められ、相変わらず高鳴る鼓動と若干の恐怖に身動ぎしてしまう。視線は彼の真剣な表情に吸い込まれて離れない。

「凛世は俺の仕事仲間だ。でもそれはただ仕事のときに一緒にいるだけとは、思ってな

いよ。辛いことも苦しいことも、楽しいことも嬉しいことも共有できて、色んな新しいことを発見していって、一緒に成長していける――そんな、かけがえのない大切な仲間だと思ってる」

「……はい」

「俺もさっき色々あってさ。俺と凛世の関係ってなんだろう、なんで俺は凛世に誘われたんだろうって。分かってないことがすごくたくさんあって、理解してあげられないことがいっぱいあって」

持っていたものを全て丁寧に、下ろし、プロデューサーは此方の肩を両手で掴んだ。がっしりと、しっかりと。離れないように、離さないように。

「凛世は俺のことどう思ってくれているのか、まだはっきりと分かっていないけど……俺は大切な存在だと思ってる。今回誘われた時に、もっと真剣に向き合いたいって思ったよ」

「……はい」

「不安にさせてごめん。けど俺は今日みたいに誘われたらすごく嬉しいし、なんというか……その、最近は、凛世と一緒にいる時間がすごく楽しいってよく思うよ。だから良ければ――そうだな」

手を離して、恥ずかしげに顔を少し逸らして言う。誘った時にも似たような表情を見

たが、彼が気恥ずかしさから頬を赤くする姿はかなり珍しい。そんな顔が愛おしくて、狂おしいほど愛おしくて、先程まで悩んでいたことや苦しんでいたことが嘘みたいに吹き飛んだ。

そうだ。好きだから、一緒に居たいのだからそれでいい。きっと今はまだ振り向いてもらえないけれど、いつか想いが届いた時、彼からも同じ想いを貰えるように頑張ればいいのだ。彼は自分のことを大切におもってくれている――なぜこんな簡単なことが分からなかったのだろう、ただの仕事仲間で割り切れるほど淡泊な関係ではないことくらい、凛世自身が一番理解していたはずなのに。

それとも、プロデューサーの言葉を聞いて初めて理解出来たのだろうか。浅い関係で簡単に断ち切れてしまう縁で、自分は何とも思われていないのだと、消極的な思い込みをしていたのは自分のほうなのかもしれない。

しかしもうどうだっていい。

杜野凛世はプロデューサーのことが好きで、想いが届くまで、いつか想いが実るまで待ち続けるのだ。

その事実さえあれば、他は何にもいらない。少なくとも今はそれだけで十分。

「まだ祭りが途中なんだ。これから花火もある。俺と一緒に最後まで付き合ってくれないか？」

だって、慎重に言葉を選んでくれる彼のことがこんなにも好きでたまらないのだから。

それで十分だ、それ以上を望んだらきっと、幸せで身が張り裂けてしまう。少しずつ歩み寄っていけばいいじゃないか。

「はい、プロデューサーさま――では」

「えっ、ちょ、ちょっと、凛世?」

直立したままふわりと前方に倒れ込むような形で、目の前の胸に飛び込んだ。両腕を背に回して少し力を込めて抱きしめる。強固な胸板がとても頼もしく、柔らかで薄い浴衣の生地が良い肌触りをしていた。香るだけで心臓が破裂しそうなほどの興奮を覚える彼の匂いが鼻孔をくすぐり、あらゆる方向から幸福が押し寄せてきて脳が麻痺しそうになる。

「ど、どうしたんだ凛世……?」

「こうしていたいのです」

「え?」

「花火の時間まで、暫く。こうして……密着していたいのです」

顔を押し付けたままくぐもった声で答え、安堵で再び流れる涙を見られまいと誤魔化す。頭上では慌てふためいた彼の声がする。上擦った声音からして、きっと顔はさっき

以上に赤く染まってくれているに違いない。もう少ししたら照れている様子をしっかりと視界に収めよう。

　万感の思いを胸に、凛世は目の前にある大好きな存在を強く抱きしめ続ける。多分まだ想いは伝わっていないし、おそらく彼の中では「尊敬されている」程度の認識に落ち着いていると思うけれど、そんなことはもう、どうだってよかった。

「貴方さまが、凛世をお傍に置いてくださるのなら……それだけで凛世は、世界一の果報者で、ございます」

「～っ、この場合はどうしたらいいんだ？　今どういう状況なんだ？」

「花火待ち、です。それまでは……凛世の頭を撫でてください」

「頭を撫でるって。なんで……こう、か？」

　頼んだ通り、頭部を覆う大きな感触が広がる。それから優しく何度も撫でられ、凛世は何度も最上級の幸せを噛みしめて笑みを浮かべた。

　これが幸福。もっと味わいたい――もっと、彼の心を知りたい。

　一度出た欲望は戻せない、引っ込みのつかない思いは叶うまで消えることはないだろう。

（夏葉さん……凛世はこれから……より一層、精進して参ります……）

　その後凛世は三十分近くプロデューサーを抱きしめ続け、花火が始まる時間には後か

らくる恥ずかしさで、燃え尽きそうなほど顔を真っ赤にしていた。夏の夜に広がる花火を見る二人には、反動で妙な距離があったという話だが――もう問題は起こらないだろう。

じゅんしょく

街全体を見下ろせる絶景の名所で、少女と青年は夕方に見下ろされながら立っていた。

少女の頬はほんのりと赤く染まり、青年は夕焼けの眩しさに目を細めている。

「それでは。良い時間を過ごすことができました。感謝します」

うっすらと微笑んで少女は小さく礼をして、もたれ掛っていた柵から身を離した。

「あなたは、どちらに向かいますか」

濡れた赤い瞳が煌めく。そよ風に揺れて黒いワンピースが揺れる。

もう血に染まっていない黒髪はどこまでも深い色をしており、黒百合の髪飾りも死を運ぶことはなくなっていた。あれほど無数に浮いていた蛍も今は自分達の意思でどこかに飛び去っている。

問いに対する答がないことを少女は咎めない。剣呑な空気も霧散し、怪物だった恋蛍はどこにもおらず、そこに居るのはただ一人の少女だった。

しかし、別れ時に対して文句がないわけではないのである。

「……いつまで、こうしていれば良いのでしょう」

揺れる髪を片手で抑えて夕日を眺める。

影が夕日に照らされ踊り、漆黒の舞踏を繰り返す。人の心も知らずに呑気なものだと、横目で自身の影を見ながら溜め息を吐いた。

「この心が届かず、いつになれば理解してもらえるのでしょうか?」

返事はない。しかしそれは話す言葉がないのではなく、青年の口が遠慮がちに開かれようとしては閉じてしまっているからだ。優柔不断で思い切りのない男だが、しばらく一緒にいるうちにその姿さえも愛おしく思うようになっていた。

「実は、楽しんでいるのですか?」

悲哀を纏った言葉に対して口元は緩み、表情は穏やかだ。

まるで試しているかのような、答えが分かりきっているかのような言い方をする。

「私の心を見てみぬふりをして。もう十分でしょう? 貴方の気持ちが、知りたいのです」

「――分かっているよ、恋蛍」

重く閉ざされていた青年の口が開く。

ああ、やっとだ。この時をどれほど待ち侘びたか。やっと彼は自分に振り向いてくれたのだ。もう愛欲という名の食欲は起きないが、それでも待ち続けた甲斐があったというものである。

彼女の恋は、ようやく成就するのだ。

「俺の心は、決まっている」

「……ふふ、知っていますよ。でも早くしてくださいね。遠慮はだーめ、ですよ」

わざとらしい言い回しをして、もう一度だけ微笑んだ。

恋蛍は恋を知った。

青年と過ごすうちに、彼のことを深く知りたいと思うようになり、獲物は好きな人となった。

（……あなたは、相思相愛に……なれたのですね）

――演じている役に対して、〝凛世〟は心の中で祝福する。

（凛世も、いつか……）

――彼女のように夢叶う日を思い描いて、台本にはないとびきり優しい笑みを浮かべながら、『青年』の言葉を聞き入れた。

――いつか恋蛍と青年のように、プロデューサーに最高の形で想いを伝えられる日を夢見て。

「……それで、祭りは上手くいったのね？」

「ああ。すまないな、夏葉。夏葉があの時声をかけてくれていなかったら、俺はすぐに追

いかけることは出来なかったと思う。凛世が俺をどう思ってるかもう少し真剣に考えてみようって思えたよ」
「そう。それなら良かったじゃない」
「まあどうにも……別の悩みが出来てしまったわけだが……」
「なにか言ったかしら？」
「いやなんでもない、こっちの話だ！」
余談だが、夏祭りは人と人とが恋に発展しやすいビッグイベントの一つだという。
一人の少女が想いを強くする傍らで、ある男の胸にも小さな炎が灯ったらしいが――
それは彼自身が少女と同様、悩んでいくことだろう。

爽籟―Ａｕｔｕｍｎ―
それはとても綺麗だった

「……プロデューサーさまとお話しすることなど、一切ございません」

身に覚えのない鋭利な言葉。それはあまりにも唐突だった。

◇　◇　◇

秋風がそよそよと木々の間を流れる。

揺られる草花はすっかり秋色に染まり、燦然と光り輝いていた太陽は優しく空に鎮座する存在となっていた。身を焦がすような暑さはどこかへ消え去っている。あるのは心地良く吹く風と、赤や黄、橙色や茶色で彩られた自然の世界だ。

「大自然って感じがするなあ」

草木に囲まれた空気は美味いとよく言うが、なるほど確かに口から肺に伝う酸素はどこか清々しい。解放感に溢れている場所では大きく息を吸うことに対して一切の躊躇いがなくなる。日頃からビルなどの建物に囲まれ、どこまでもアスファルトの続く道ば

かり歩いてきたからこその感覚だろうか。

大自然の豊かさを全身で味わいながら、プロデューサーは大きく伸びをする。大して特別なことはしていないのに、日々の生活で身体に蓄積した疲労やストレスが抜けていくようだった。

「……って、こんなにのんびりしている場合じゃないか」

頭上に伸ばして組んでいた手をほどき、くるりと回転して背後に振り向く。後ろには先程から美しい紅葉を見上げている凛世がいる。いつかの秋模様の着物を身に纏っているその姿は、いつどんな場所で見ても絵になるほど美麗で、絶佳の世界に一切の違和感なく溶け込んでいた。

思わず見惚れてしまいそうになる視線をなんとか操作して、落ち葉の小道を音を立てて進んだ。二人の物理的な距離が人一人分空いている程度までになった時、凛世も目線を此方に向けた。

「――っ」

――また、この感覚だ。

心臓が一瞬だけ上空に引っ張られるような、弾んで浮き上がるような感覚。頬も僅か数秒のうちに熱くなり、顔面が熱を帯びたことを自覚すると何ともいえない羞恥心が込み上げてくる。

なぜ今、唐突にこんなことになるのかと考えると、原因は一つしかない。凛世の真紅の瞳と目がしっかりと合ったからだ。恥ずかしさから目を逸らしたくなるが、不審がられるわけにもいかないので吸い込まれそうな瞳孔を見続けることしか出来ない。

プロデューサーは、夏祭りの一件以来ずっとこんな調子だった。

「あー、えっとだな。そろそろ行こうか、凛世」

どうにかして言葉を絞り出して顔の熱が早く消えろと念じながら目を伏せる。

毎回目線が交わる度にこうなるわけではない。この感覚は生活の中である時ふいに、突然病のように舞い降りて自分の肉体と精神を支配するのだ。時と場合も法則も何も決まっていないが、見慣れているはずの凛世の顔を見ると心が軽やかに跳ねてしまう。

まだ夏だった頃こそ対処法も分からず硬直していた。しかし何度も経験すれば流石に多少の慣れが生じてくるので、彼女自身に悟られていることはないと思いたい。

――何故悟られたくないのか、それは湧き上がる感情に〝答え〟が既に見つかっているからである。

「……」

一人で勝手に悩んでいるプロデューサーに対して、凛世は呼びかけに反応することなく口を閉ざしていた。視線だけはしっかりと合わせ、いまいち感情の読みとれない二つの瞳を少し揺らして。

時間が経って落ち着きを取り戻したプロデューサーはその様子に気付いて、軽く手を振ってみる。
「どうした凛世？　おーい」
「……」
しかし返答はない。
また何か悩みでも抱えているのかと心配しそうになるものの、以前のように瞳の紅は悲哀や困惑を宿していない。純粋に呆然としているだけなのだろうか。
「体調でも悪いのか？　何かあったならいつでも――」
「プロデューサーさま」
言葉を遮った短く強い響き。反応があったことに安堵するが、相変わらず無表情を貫いている姿に疑問を抱いた。何を考えているのか表情から読みとることが、いつもに比べて全くできない。
ひとまず名前を呼ばれたことに対して何の言葉が続くのかと待機するが――
「凛世に、あまり、近寄らないで……いただけますか」
放たれた言葉は、日頃の彼女からは想像もつかないほど冷たかった。

◇　◇　◇

某日。杜野凛世とそのプロデューサーはとある田舎町を訪れていた。

とある老舗旅館とその周辺の商店街のＰＲのため、凛世が広告のモデルに選ばれたのだ。

少ない人口、建物を囲む大自然、アスファルトすら敷かれていない土の道。秋の彩りが視界にこれでもかというほどに映り続ける和の空間。商店街、とはいったものの、規模は都会に比べてかなり小さかった。

はっきり言ってしまえば超がつくほどのド田舎である。最寄りの駅からバスを用いて数十分のところに位置する田舎町は、車も滅多に通らないような場所だ。自分達が今いるところだけ過去にタイムスリップしたのではないか――そう錯覚してしまうほどに、とにかく田舎だった。

「……」

プロデューサーは江戸時代の街並みのような建物を眺めながら、腕を組んで難しい顔をする。

彼の見る先には数人の大人たちと、一人の少女の姿があった。

「……大丈夫そう、だな」

プロデューサーは周囲の景観に全くといっていいほど合わないスーツをしっかりと

着込み、背筋を伸ばした姿勢で呟く。吐息同然に漏れた言葉は誰に向けたものでもないが、意識は全て凛世に向いていた。

今日の彼女はいつもどおり、いや、それ以上に綺麗だ。

彼女の出で立ちは普段目にするような着物姿とはかけ離れたものだった。

ベージュ色のトレンチコートに赤のプリーツスカート、清楚感のある黒のスニーカー。髪色よりも黒いキャスケット帽を被り、縛られることなくストレートに降りる髪は僅かにゆったりとした雰囲気を内含している。

交通機関が軒並み機能していない田舎町で、凛世は都会のファッションを引き抜いてきたかのような格好をしていた。

「うーん……」

彼女も年中着物姿というわけではない。洋服もそれなりに購入していることはプロデューサーも良く知っている。今回は二泊三日という期間の中で様々な服装で活動してほしいとのことで、「洋服と和服のどちらも用意してほしい」と頼まれていたため、現在のような格好をしている、というわけだ。

何らおかしな点はなく、彼女は真面目に仕事をしている。

だというのに。

「……あー、なんだろう……」

溜め息に似た独り言が漏れる。

これまで凛世の洋服姿は何度も見てきたが、あんな服装は見たことがない。知っている着こなしと方向性が違いすぎるのだ。

端的に言って、非常に新鮮で、綺麗だった。

――プロデューサーさま……本日の凛世の服装は、如何でしょう……。

きっと、恥じらいを持ちながらどこかしらのタイミングで聞いてくる。

普段ならそうだ。いつもならこうなる。言いづらそうに、しかし反応を聞きたいといったふうに問いかけてくるに違いない。以前「洋服も似合うと思う」と意見を口にした際、嬉しそうに「少し調えてみます」と言っていたのだ。少なくともあのような服装は今まで一度も見たことがない。何かしら会話の種になってもいいはずだ。

普段なら、そうなるはずなのだが。

今日の凛世はどこか違った。記憶に間違いがなければ、笑っている様子を一度も見た覚えがない。

此処に来るまでの道中も飛行機、電車、バス、徒歩と様々な空間を彼女と共に過ごしてきたが、いつ話しかけても愛想なく視線だけ向け、短く返事をするだけだった。

――プロデューサーさまとお話しすることなど、一切ございません。

突き放すような冷たい言葉。何かの聞き間違いかと思ってスルーしていたが、後に話しかけてもやはり似た反応しか返ってこなかった。

怒っている、確実に。何かに立腹している。そうでなければ彼女の現状を他に説明する手段がない。

無表情に、無感情に、どうでもよさそうに、本当に凛世なのか疑いたくなるくらい鋭い刃を口から吐く。そんな状態を改善することもできずに初日の撮影は始まってしまった。

観光協会の人々との接触・スケジュールの確認などを終え、近辺での撮影の最中――初日の活動はもうじき終了するだろう。凛世から近寄りがたい雰囲気を感じ取ったプロデューサーは、団子屋の前に置かれた赤い縁台に腰掛け、一人悶々としながら唸っている。

「うーん……何かしたか？　駄目だ、心当たりがない」

凛世が不機嫌になっている原因を突き止めようとするも、考えても考えても脳内には何も浮かばない。寧ろ真面目な思考にすら切り換わらず、今日の凛世の服装のことばかりが浮かんでいる。

いつもならもっと近くで見ているはずの少女の姿が、今日ばかりは遠い。新鮮で、い

つも以上に美しいと感じるのはおそらくこの『距離感』が原因なのだろう。
その原因がわかったところで、どうしようもないのだが。
「は～いお待ちで～す。みたらし団子になりま……お兄さ～ん？　どうしたんです？」
「えっ、あ、あぁ……ありがとうございます。大丈夫です」
どうやら相当難しい顔をして思い悩んでいたらしく、暖簾を押して出てきた店員に目を丸くされる。注文した団子を持って出てきたのは栗色の髪色をした少女で、凛世よりも少し背丈は高いがなんとなく同年代っぽい雰囲気を感じられる。
「ん～？　なにか……お悩みでも？　すっごい顔してましたよ」
「悩みっていうか、なんといえばいいのか。人に話すほどでもないので本当に」
「そうですかね。びっくりするくらい渋い顔でした。話したら楽になることもありますよ？　どうです～？」
「ま、無理にとは言いませんけどね！」と、少女ははきはきとした口調で付け加える。にこやかな笑みを浮かべる様はどこか飄々としており、初対面にして思いきった踏み込み具合にも嫌悪感を抱く事はなかった。一人で悩んでいても仕方がない、少し話してみるか――そう思える程度には、気を許せたのだ。
「……最近、ある人との関係について悩んでまして」
「あ。敬語やめましょ？　お兄さんどう見ても年上の方ですし、堅苦しいのはなしで！」

「分かりまし……分かった。本当に誰かに相談するべきか分からないから、嫌だと思ったら止めてもらえないかな？」
「あはは、人の話聞くの好きだからいーんですよ。でもまあ、了解です」
必要な前置きを済ませて何を口にすべきか考える。
悶々としているのは、凛世について。凛世への感情について。それと関連性は不明だが、今日の彼女の様子について。
「……仕事仲間、みたいな人がいるんだ。いつも慕ってくれて、何でも俺のためって言って頑張ってくれる人が」
「ふむふむ」
「今までずっと、俺はその人の進むべき道のために出来ることを取り組んできたつもりだった……悲しそうな顔をしたり、悩みがあったりしたときに、全部取り除いて自分のやりたいことのために走れるようにって」
どんなスケジュールも黙々と懸命に取り組む姿は、アイドルとしての優等生のように思えていた。しかし彼女には明確な『やりたいこと』が見つかっておらず、見えない心にどうしたものかと悩む時期もあった。様々な経験を経て見つめる先にあったのは『プロデューサーとファンのどちらものために頑張りたい』という、まっすぐで純粋な思い。揺れる瞳に映ったのはそんな、優しく美しく、強い感情だった。

だから、アイドルとしての在り方を見つけた彼女にもう大きな悩みはないと思っていたのだ。その他に何度も表情を曇らせることはあったが、ほとんどの原因が分からなかった。

夏祭りで彼女が抜け出した理由。それが『自分にただの仕事仲間だと思われていた』と思い込んだことに対するショックであったこと――それを知った時に、ひどく心が揺れたのを覚えている。

「けど、ちょっと前にその悩みの原因の一つが、俺だったことを知って……その人との関係についてもう少し真面目に向き合って、考えることにしたんだ」

――凛世は俺の仕事仲間だ。でもそれはただ仕事のときに一緒にいるだけとは、思っていないよ。辛いことも苦しいことも、楽しいことも嬉しいことも共有できて、色んな新しい事を発見していって、一緒に成長していける――そんな、かけがけのない大切な仲間だと思ってる。

涙を流す彼女にかけた言葉が記憶の水面に浮き上がる。勘違いさせないようにと思って発した言葉はしっかりと届き、凛世も納得してくれた様子だった。

この発言を機に、プロデューサーは凛世のことをどう思っているのか、自分と凛世はどんな関係にあるのかを深く考えることにしたのである。

「……」
「それから、関係がよく分からずに悩んでいるってことですか？」
「あぁ、そうなんだ……自分がどう思っているのか、考えれば考えるほど分からない」
杜野凛世。夏祭りの一件以来、彼女を見る時の感情に動きがあるのは理解出来た。
見つめ合うと少し気恥ずかしくなり、日常の中でふとした瞬間に脳裏に彼女の姿が浮かぶこともある。今までにはほとんどなかったことだが――不思議と、違和感はない。まるでずっと前から同じ気持ちを抱えていたかのような感覚だ。
この感覚がいつからのものなのか、そもそもどんな感情から生じているものなのか。それを探ろうとするほどに思考は迷宮入りしてしまう。プロデューサーは凛世のことをどう思っているのか――凛世はプロデューサーのことを、どう思っているのか。
団子屋の少女はそこまで聞くとニヤニヤと笑みを浮かべた。
「ははーん、恋バナってやつですね？」
「恋バナっ!?　違う……と思うけど……」
「で、お相手はあそこのオシャレな人、と」
「……」
否定できずに、団子を食べながら黙りこむ。何故見透かされたのだろう。
最初の打ち合わせが終了し、凛世は店の正面の離れた場所で一人佇んでいた。休憩時

間だが特にすることもない様子だ。
「だってお兄さん、さっきからずーっとあの人のこと見ているじゃないですか。誰の話かなんて直ぐに分かりますよー」
「そ、そんなに見てたか……？」
「そりゃーもう。口が動く度に目線もチラチラと」
　自覚の無かったことを指摘されてなんとも言えない気分になる。それほどまでに彼女のことを意識してしまっていた、ということだろうか。
「じゃあ隠していても仕方ないか……そう、だな。あの子のことだ」
「悩むことでしょうか？　十分、相性よさそーに見えますけど」
「俺もそうであってほしかったし、最近までは普通に会話もできていたんだよ」
　遠くの凛世をぼんやりと眺めながら言う。夏祭り以来、彼女と過ごす機会が増えたのは間違いない。以前よりも積極的に、はっきりと自分のしたいことを口にするようになった彼女は、プロデューサーと行きたい場所ややってみたいことを教えてくれるようになっていった。
　その願いに応じていくうちに、彼女とはより親密になれたのだと思っている。最近はユニット単位での活動が多かったため、彼女と二人での仕事は久しぶりだったが——今回も楽しく、上手くやれるとばかり思っていた。

「……なんか急に、冷たくされるようになったんだ」
「心当たり……なさそうですねえ。もしかしてそれが一番の悩みですか？」
「いや、えっと……そうなるな。冷たくされる理由が分からないことと、急過ぎて関係が余計に分からなく――」
と、喋っている最中。どこか他の場所を見ていた凛世も此方を見て、目が合った。彼女は一瞬だけびっくりした様子をしたがすぐに表情を消し、少し視線を逸らす。普段なら手を振るくらいはしてくれそうなものだが、と考えると余計に心が痛んだ。
プロデューサーは凛世に冷たくされると、想像の数倍ダメージを受けている自分がいることに気付いた。様子がおかしい、どうしたのだろう、という心配の前に漠然とした不安が過るのだ。
その理由すらもよく分からない。
「なるほど～、今みたいな感じですか。ふーん……」
「っと、そろそろ戻らないと。いきなりこんな話して悪かったな」
「いーえ！　なんならまたお話しください！　ド田舎の人間は暇なんですよ～」
「はは、また機会があればな」
乾いた笑いを口にしながら団子の代金を支払って立ちあがる。愛想よく微笑んで手を振る少女を尻目に、プロデューサーは宿泊先の旅館に向かって歩き出した。

　これから行う段取りや打ち合わせは、凛世がいなくとも可能なものだ。二人で行ってもいいのだが今は彼女には休んでいて貰おうと思った――否、きっと、声を掛けるのが少しだけ怖かったのだろう。
　その場を後にするとき最後に見えたのは、凛世が近くで遊んでいた子どもたちに話しかけられて輪に参加している姿だった。今日やるべきことを一通りやり終えたら、もう一度話しかけてみよう。少し痛む胸を抑えてプロデューサーは足を進めていく。
「初対面の女の子に、話しすぎたな……」
　そういえば何故『相性が良さそうに見える』と思ったのだろう。そう感じて振り返った時、既に少女の姿はなくなっていた。

やはり心は分からなかった

「いや、駄目だ、これ」

頭を抱えるというより頭を押さえつけているとったほうが適切な表現だ。

そう思えるくらい、プロデューサーは苦悩していた。

――お、お疲れ様、凛世。

――はい……。

――撮影、どうだった？

――いえ……どう、ということはなく。

――そ、そうか……。

昨日の夕方から夜にかけての数少ない会話の記憶が蘇る。

――じゃあこれ、部屋の鍵。何かあったら連絡してくれ。明日も朝早いけど大丈夫か？

――はい。それでは、プロデューサーさま……。

それっきり。

本当にそれっきりである。

非常に事務的な打ち合わせは二人きりではないときに行ったため、彼女と一対一での会話はこの二回だ。今朝も起床後すぐに話しかけはしたが、やはり一日経ったところで様子が変わる気配はない。

素っ気なく、冷たく、必要最低限の返事。おそらく踏み込んだ言葉を口にすれば、また拒絶されるのだろう。

何か、彼女を今の状態にしてしまったことがあるのなら謝りたい、しかし心当たりがない。最近は本当に、特に何事もなく過ごしていた筈だ。凛世の様子の豹変具合はあまりにも唐突過ぎた。

悩んでも悩んでも分からない、ただ答えのない深い思考の海に沈んでいくだけだ。

プロデューサーは悶々としながら、旅館から街までの道のりを進んでいた。

「まーだそんなに悩んでいるんですか～？」

「……あ、昨日の」

「名前言ってませんでしたね、奏でる子と書いてそうこって言います。呼び捨てで呼んでやってください！」

「奏子、か。どうしてここに？」

秋風の如く、音もなく現れたのは昨日の少女だ。彼女――奏子は上機嫌に体を揺らしながら隣に立ち、空を見て答える。

「そりゃあ、私の家、この辺りですから。団子屋のバイトがあるから、今は通勤中ってやつですかね～？」

唇に人差し指を当てて視線を流し、奏子は目を細めた。

「その様子だとなんにも解決してないっぽいですね、昨日のこと」

「はは、お恥ずかしいことに、その通りだよ」

「一つ気になったんですけど、お兄さんが気持ちを寄せている……杜野凛世ちゃんですよね。どんな子なんですか？」

言いながら彼女は懐から一枚の紙を取り出す。裏面は白紙、表には五色で鮮やかに彩られたデザインの『放課後クライマックスガールズ』が写っていた。宣伝広告のポスターのように見える。

「それは……」

「田舎ですけど、調べればこのくらいの情報は入ってきます。このユニットの子で、私が色々動画とかで見たところ……比較的に静かな人だって印象なんですよ。だから、アナタと関わる時の『杜野凛世』ちゃんが知りたいんです」

「俺と関わる時の、凛世」

草や葉っぱを踏み鳴らして歩く。一歩、一歩と足を前に出すたびに、乾いた自然の音が耳に届いてくる。

返答を待つ少女の栗色の髪が揺れ、ただ静かに言葉を受け入れようとする姿が一人の少女と重なった。いつも隣にいた存在、いつも隣で、自分のことをずっと見つめていた存在。

彼女の深みのある色合いの髪や瞳が視界を横切ったような気がして、気付けば勝手に口が開いていた。

「凛世……は。他のアイドルに比べれば口数も少ないし、言動に感情が現れるのも良く知っている人じゃないと分からないところが多いと思う。いつも大人しくて、どこか周りと違う雰囲気があって」

制服姿で公園のブランコを漕いでいた姿を思い出す。

天が落ちるような、昇っていくような感覚。二人で味わった『近い空』の景色を、想起する。

「色んなことに柔軟で、何事にも熱心に取り組むし丁寧で。一人で世界を渡れるんじゃないかって思えるくらいしっかりしていて――だけど、年相応の女の子なんだなって感じる姿も見ることがあるんだ」

花柄の風鈴を手に、嬉しそうに微笑んでいた姿が脳裏に浮かぶ。

あの青色を彼女は何度も優しい表情で見つめ、満足げに息を吐いていた。雅な雰囲気をもつ少女だが、笑顔は青春真っ只中の少女のものなのだ。

「俺といるとき、凛世はよく未来の話をする。遠くない未来だったり、実現するかも分からないくらい先の話だったり……俺との未来の話だったり」

少女漫画にある台詞を告げられたときの事を思い返す。

不意打ちすぎる言葉にドキリとして、「そういうことは本当に大切な人に」と言ったのを覚えている。彼女はそれに対して何か言おうとして、止めた。

とても大切なことを言うつもりだったような気がしてならない。

「どんな話も嬉しそうに語ってくれるし、俺の知らないことを沢山教えてくれる。たまに、少しだけ落ち込むことがあって……でも、自分なりの答えを見つけられる、強い心をもっている」

彼女との思い出は鮮やかで優しく、柔らかい色で描かれ、いつまでも心に。

感情のたゆたう心の世界にあるのは、物静かで大人しそうに見えながらも、感情豊かで年相応の表情や反応を見せてくれる少女の姿。無表情だと感じていた頃がひどく懐かしく感じられる。

そのくらいには親密に、彼女を知れる間柄になれたのだと思いたかった。

「勿論、俺と話している時よりもユニットの皆と居る時の方が色んな表情が見れるんだけど――」

「……ぷっ、あは、あはははははっ！」

歩きながら熱弁していると、傍らの少女が突然噴き出して笑い声を上げ始める。大袈裟とまで言えるほどに分かりやすい爆笑にプロデューサーは困惑した。
「ど、どうした？」
「あははは、はー……ふぅ。いや、だってお兄さんがあんまりにも熱心に語るものだから……あー駄目ですね、笑いが、ふふふっ」
目尻に浮いた涙を拭う奏子。どうやら相当面白かったらしい。
「まさかこんなに真剣に話してもらえるとは、って感じです。でもおかげでわかりました。やっぱりお兄さん、その人のこと、すっごく大切に思っているんだなって」
「……それは、まあ、な」
「照れてる～。やっぱり恋バナじゃないですか！」
「いや……違うんじゃないかな、やっぱり」
「ちがうんですか？」
はらりと舞う落ち葉が視界を横切った。
横に居たはずの奏子は目の前に立ち、穴が空くほどの勢いで視線を向けてきている。見開かれた両の瞳は言葉通りの疑念と、心臓を貫きかねないくらいの圧力を発していた。
「なんで、違うって思うんですか？」

「……なんで、って」
「私の目を見てよーく考えてみてください。どうしてそこまで、その人のことを分かっていて、悩んでいる自分も見えているのに、『恋じゃない』って思うんですか?」
彼女は目線の逃げ場をなくすためにプロデューサーの両肩に手を置いて身体を引き寄せ、お互いの息が鼻にかかる距離にまで詰めてくる。若干の恐怖が芽生えて身動ぎするも、肩に置かれた手に力が込められて「動くな」と威圧されているような感覚に陥った。
「そっけない態度、嫌なんですよね。頭を抱えて悩むくらい」
「……」
「お兄さんには何か、自分の感情を認めたくない理由があるように思えます。それが何なのかは分からないですけど」
そこまで言うとぱっと手を放して一歩後ろに下がる。鷹揚に腕を広げてくるくる回る姿には、先程の威圧感は全く残っていなかった。
「とりあえず、杜野凛世ちゃんが今の態度を続ける理由をはっきりさせましょう！　そうしないと悩みっぱなしですよ!」
「……そうだよな。仕事もあるのに、いつまでもこのままは良くないよな」
「ちょっと苦しいかもですけど、直接聞くか謝るかした方がいいですね～。……でも、よ

かったですね、お兄さん」
「よかった？」
「はい」
　木々から風に乗って運ばれてくる落ち葉を抓んで遊びつつ、奏子は天を仰いだ。
「この土地には、人と人との仲を取り持ってくれる神様がいるんです。姉妹の神様らしくて。気に入られれば、杜野凛世ちゃんの様子だけじゃなく、お兄さんの悩みも解決してくれるかもしれないですよ～？」
「へえ、そんな神様がいるのか」
「多分旅館のパンフとかにも載ってるんじゃないでしょうか？　気が向いたらご覧になってみては？」
「分かった、今日やることが終わったら、見てみるよ」
　今日やること、といって少しだけ気が重くなる。二日目の撮影等が完了すれば、最後の一日は夕方までほとんどフリーだ。仕事自体はいつもと変わらず、気合いを入れて取り組むつもりである。
　その仕事が終わったら、凛世と真面目に話をしよう――どんな反応をされるか考えるだけで胸が痛いが。
　気がつけば旅館からの道は既に通り抜け、時代劇のような街並みがそこにはあった。

秋の香りが流れる穏やかな空間で、プロデューサーは一つ伸びをする。
「――よし、じゃあ俺はそろそろ行くよ。なんか、何でも話しちゃってわるいな」
後ろに振り返って奏子に謝罪するが――そこに少女の姿はなかった。
「……あれ？　もう団子屋に行ったのかな……俺も、行くか」
少しだけ心にあった曇りがとれたような気がして、プロデューサーは次の撮影地に向かう。
ゆらゆら舞い降りる紅葉と共に、風は頬をなぞって通り抜けるばかりだ。

◇　◇　◇

――そして、夕方。
前日に様々な場所の風景と共に凛世の写真を撮り、今日も似たような作業が行われ、何事もなく仕事が終了した。二日目は着物姿での撮影、つまり凛世が最も着慣れている服装だったため、撮り直しなどはほとんど起こらず。
二日目で仕事が終わるにも拘わらず二泊三日の予定になっているのは、天井社長の優しさだ。本当は今すぐに帰ろうと思えば帰れるのだが、田舎での交通手段は限られている。あまり慌ただしくすることなく、最後の一日は休息にあてろという心配りである。

仕事を終えたということは、やるべきことを終えたということは。

「……」

街外れの場所から戻り、既に現場から去っていた凛世を探す。

おそらくまだ、彼女は旅館には戻っていないだろう。

「……あ」

ぽつりと一つ声が出る。前方、夕焼けに照らされながら遊ぶ小さな子どもたち。その中に一人、長く長く影を伸ばす少女の姿があった。

凛世だ。彼女は昨日から街の子どもたちと関わりをもっていたようで、とても懐かれている様子が窺える。今は達人の如く剣玉さばきを披露して、子どもの目を釘づけにしていた。

「すごいな、凛世」

カン、カン、カンと、一度も落とすことなく跳ねては静止する赤の玉。持ち手を回転させてリズムよく動かす姿はなかなか絵になる。途中から糸の部分を持って回したり小指に玉を入れたりといった高度な技術を用い始めて、ますます子どもが離れられなくなっていく。

しかし時間は残酷で、いくら楽しい時間が流れていても終わりを告げるものだ。どこからか寂しげなメロディが鐘の音で流れ、それを聞いて子どもたちは名残惜しそうにし

ながらその場を離れていった。
　最後の一人、おかっぱの子が凛世とハイタッチしてから去っていき、凛世は流れる音楽に耳を澄ませて目を閉ざす。別れの余韻に浸っているのだろうか。余計に声をかけづらいが――プロデューサーは、一歩踏み出して近寄る。
「凛世。今、いいか？」
「――っ、プロデューサー、さま」
　びくりと一瞬だけ身を震わせて反応。表情は申し訳なさそうな、話したくなさそうな、なんともいえないものになっていた。
　その顔を見てあまり長く話すことはできないと感じ、プロデューサーは頭を下げる。
「……？　プロデューサーさま？」
「すまん。何にも、分からなくて」
　ロートーン。口から出るのは純粋で率直な謝罪。
　凛世の表情も見えないままに続ける。
「俺、多分凛世をまた悲しませるようなことをしたんだよな。けど何をしたのか、なんで怒っているのか……全然、わからなくて」
　皮肉なくらい綺麗に腰を折ったまま話し続ける姿は、傍目から見ればかなり異様に映るだろう。西日から訪れる風が冷たく、空虚な心を痛々しく刺激する。

口から出る一文字一文字が苦しい。彼女は今どんな顔をしているのだろうか。

しかしあれこれ考えたところでどうにもならないことはすでに出た結論だ。今できることは誠意をもって謝罪すること、正面から向き合うことであると、プロデューサーは理解していた。

「だから、分からなくて、すまん。もし大丈夫なら……どうして怒っているのか、教えてほしい」

ただひたすらに重く、余計な言葉を取り除いた謝罪。

それに対して、凛世は。

「……ぷ、プロデューサー、さま……」

顔を上げる。視界に映るのは眉根を顰めて胸に手を当て、悲哀の色を灯した瞳をもつ少女。深い色の赤が二つ揺れ、プロデューサーも心臓をわし掴みにされたような痛みを覚えた。

困惑、後悔、疑念――様々な感情が入り乱れているように見えるが、彼女が何を思っているのかは分からない。ただ凛世は遠慮がちに、苦しげな表情をしながら、静かに。震える声で、静かに告げる。

「違うのです……プロデューサーさま、凛世の、出来心で……ございます」

静かに、静かに。

懺悔を口にするように、わずかに許しを乞うように。

「……っ、失礼、いたします……っ」

それだけ言い残すと彼女は踵を返し、苦痛に歪んだ表情を隠して足早に去っていった。

秋風の残滓が肌を撫でる。胸中に残った暗い気持ちは消えることなく、新たな疑問を芽生えさせてしまった。沈みゆく夕日、黒の深みに嵌まっていく天蓋。それらと同じくらい落ちていく心を抱えたまま、プロデューサーはぽつんと一人の世界に取り残された。

『わびぬれば』

転瞬。天穿つ夏空から、星々流るる秋空へ。

よもやこれほど、時の流れが迅速であると誰が予想できただろうか。

荒れ狂う心や透き通った涙の伝う頬の感覚も過去となる。燃え盛るような夏はいつの間にか過ぎ去っており、穏やかな秋が我が身を包み込んでいた。

心地良い微風が肌を撫でた。思えば、いつの時もこの感覚を味わっていた気がする。

愛も哀もひっくるめて頬を優しく、時に厳しく通り抜けていったもの。冷たさや温かさはきっと心の映し鏡で、心が荒れるほどに風も吹き荒れるのだ。

杜野凛世の心は、風と共に在った。

それは彼女の体を吹き抜ける風と心を巡る風。

恋という名の気の揺らぎは、時に穏やかで時に荒んでいる、社会を気まぐれに過ぎてゆく自然現象に良く似ている。手綱を握ること、思うままに動かすことは難しい、というよりも不可能だ。

ならばこの自由奔放な恋心をどうすべきかといつだって悩んでいた。諦める、気持ち

を消すなどといった気こそ起きなかったものの、だんだんと心が前に進むのを恐怖し始めていたのである。

（あの夏……燃え盛るような祭の中で、プロデューサーさまが言ってくださったお言葉……）

かけがえのない大切な存在であると。自身との関係について向き合ってくれる、と。

彼からはいつも幸せをもらっているというのに、更にそれ以上を望んでしまっていいのか――口にできない自問自答を打ち破ってくれたのも、彼だった。

あの日あの時、思ったのだ。感じたのだ。

だからこの心はどこまでも、恋の色に染まってゆくのだと。

（プロデューサーさま……）

嗚呼、心が温かい。

胸の内に吹く風が彼にも伝われば、彼の胸にもざわめけばいいのにと思う。

そのためには――何をすれば、何を知れば良いのだろうか。

「じゃあこんな感じで。そーそー。姿勢綺麗だねぇ～」

「もうちょっと右かなぁ？　おっ、完璧！　じゃあ撮りますよ――！」

……。

遠地での撮影。いつもとは違う服装。動くたびに優雅に揺れるコートの裾がなぜだ

か面白い。

煩雑で喧噪の絶えない世界から切り離された田舎町は、故郷での生活を彷彿とさせた。都会育ちではない凛世にとって今回の活動は新鮮さよりも懐かしさの方が強い。

僥倖なことに、そんな世界に彼と二人きりで訪れることができた。予定を知らされた時の胸の高鳴りは今でも続いているかのようだ。

晴天と緩やかな秋風が平和を祝福する、この上ないほど穏やかな時間。撮影も終えて凛世は一人、懐かしさに耳を澄ませて感慨に耽っていた。

「へへー！　見て見て、ホウキ！」

「またホウキ？　ほかにないのー」

「うるせー、むずかしいんだもん、しょうがないだろ」

自然の音に耳を澄ませていると、人の声も当然入り込んでくる。音に反応して見れば、少し高い声音が一カ所に集まっていた。街の子どもたちが遊んでいるようだ。

しかし子どもの表情はどれも徒然に辟易しているように見え、凛世は無意識のまま彼らの方へ足を運んでいた。

「……あやとり……」

子どもたちが各々で手にするのは長めの紐。一人の子がなれない手つきで箒を作ると、周囲も真似をして箒を表現している。だがそれ以上の発展はなく、繰られた紐がほ

かの姿に形を変えることはない。

単純に、他のモノの作り方を知っている者がいないようだ。十人の子どもが集まって一つのものを作ったところで退屈だろう。

「良ければ、お貸しいただけないでしょうか」

「んー？　おねえさんだれ？」

「きれーな人！　あやとりできるの？」

「はい……多少の心得が、ございます」

「みせてー！」

一番近くの子どもに紐を渡され、白く細い手指にそれを通す。赤く柔らかい紐が手中を通り抜けていく。するりするりと流麗な動作で変化していくあやとりの形に、子どもたちは釘付けになって真剣なまなざしを向けていた。

指を繰り、紐を潜り、伸ばして緩めて通り抜け。複雑な動作の連続の末、誕生したのは『八段はしご』。一本の線が連なって完成した形状に子どもたちは感嘆の声を上げる。

「すごーい！」

「他にもやってやってー！」

「ブランコ！　ブランコ！」

思い思いの言葉を発する者たちに凛世はほほえみを浮かべ、新たな紐を受け取った。

「ふふ……承りました」
ブランコ、糸巻き、とんぼの連続技。
カニ、花かご、六角星。ヒトデに扇子に東京タワー。
幼い頃に遊んだ記憶を思い返しながら次々に、懐かしさに思いを馳せて紐を操る。新たな形ができるたびに歓声があがるのが気分が良くて、しばらく凛世はあやとりを披露し続けた。
「……はい、どうぞ。ここに指を」
「わ、わ、すごい！　あたしの手にはいった！」
「おねえさん！　これやってー！」
一通りのあやとりを終え、次に渡されたのは鞠。花柄の鮮やかな模様に再び童心が刺激される。
「できる？」
「手鞠も、大変懐かしい記憶になります……えいっ」
小さなかけ声で、まるで昔に戻ったかのような心持ちでまりつきを始める。
その後はお手玉や季節違いのはねつきをして、時間が流れるままに過ごした。
「……もう、夜が近いのですね」
元々夕方に近い時間帯だったため、気がつけばあたりの暗くなり始めている状態。子

どもたちは凛世の言葉を聞くと楽しげな表情を曇らせ、不満げに唇をとがらせた。
「えー、かえりたくないー」
「まだあそぶ！」
「お家の人が、心配されることでしょう。凛世は……お姉さんは明日も来ます。また明日にいたしましょう」
「えー……わかったー。明日だよ！」
「また明日ぜったいだよー！」
意外とすんなりと納得したようで、名残惜しさを抱えながら子どもはそれぞれの帰路へとついていく。夕日を背景に幼い背中を見送っていると、一人だけ帰らずにコートを引っ張る子の存在に気づいた。
茶髪でお下げの女の子だ。やや垂れ目で、先ほどの時間もほとんど声を出していなかったような気がする。花かご状になったあやとりの紐を片手でもつ姿はどこか自信がないように見える。
「あ、あの、おねえさん」
「はい、なんでしょうか」
「……なまえ、しりたいなって」
少し恥ずかしげに俯いて言う。幼さ特有の可愛げのある仕草に凛世は胸に温かさを

感じた。

「……凛世です。杜野凛世と申します。貴女のお名前も、教えてくださいますか？」

「え、えと……雷……らいっていう、の」

コートを握っていた手を放し、雷と名乗る子どもは頬を朱に染めながら顔を上げる。

幼さの中に、筆舌に尽くしがたい美しさを感じる顔立ちだった。

「またね、りんぜおねーさん」

そう言うと、皆がそうしたように彼女も夕日の世界へ溶け込んでいく。凛世は再び一人となり、静寂と虫のさざめきが入り混じった音を感じ取る。

一際心が穏やかになる時間を過ごした。しかしどこか物足りなさを感じる。理由は明白、彼の隣にいたいという気持ちが強いから。

もっとも、この日の彼女が自らプロデューサーに接近することは一切なかったのだが。

凛世ちゃんが今度行くところって、旅館がすっごく綺麗なところじゃない!?　私この前雑誌で見たよ！

そう……なのですね。それは、楽しみです。

いいな～。あそこ、豊かな自然に囲まれてるって書いてあったし……景色も絶対綺麗

だよ～。旅館のバルコニーから見る夜空とか、見てみたいなぁ……。

……夜空……。

えーっと、どこだっけ……あった、この雑誌！　の……ほら、この旅館だよ！　『満天の星々が映る夜景に一見の価値あり』だって！

星々……満天の、夜空……。

――美しい夜景を、彼と見上げることができたのならば。

「……おねえさん？　どーしたの？」

「いえ、なんでも……ございません」

口では否定しながらも凛世は思考を張り巡らせていた。

彼女が一人、脳内で真剣になって考えることと言えば一つしかない。しかし小さな子どもと自分としかいないこの場において、それを悟る者は誰一人としていなかった。

二日目。

滝や山道といった自然の風景をメインに撮影を行い、初日と同じように何事もなく仕事を終えた凛世は、再び幼い者たちが集う場所へと足を運んでいた。時間的に少し遅くなってしまい、あまり長く遊ぶことはできなさそうだが、彼らは凛世の姿を見るや否や

手をあげて喜ぶ。

何度見ても癒やされるほど愛らしい姿に微笑みながら、凛世は子どもたちの持ち寄った玩具を使って技を披露する。昨日と少し違ったのはあやとりのやり方をそれぞれが家で学んできたらしいことだった。箒しか作れなかった子が四段のハシゴを作り上げた瞬間の盛り上がりといったら、それはもう。

純真無垢な心。それを感じ取って思わず吐息を漏らす。

「本当に、綺麗、ですね」

「んー？　なにが？」

「ふふ……ひみつ、です」

「えーなにそれ！　気になる！」

「なになに――！」

自然とは良いものだ。

都会や人の多く集まる場所にも勿論特有の良さがあるように、人の少なく大自然に囲まれた場所にも、他の追随を許さない良さがある。

豊かさ、緩やかな時間の流れ、心安らぐ安寧。それらの全てを一心に受ける感覚を、彼を味わうことができたらどれほど幸せなのだろうか。

「りんぜ、おねーさん」

「……雷さん。如何なさいましたか」
「おねーさん、とおくから来た人、でしょ？」
「はい。少し遠い所から……仕事で、参りました」
「いっしょにいたおにーさんと、なんで、話さないの？」
「――！」
話しかけてきた雷の瞳に灯る光の色が変わった。どこまでも心情の先を見透かすような鋭く、確固たる意志をもった光が宿っている。
「けんか、してるの？」
「……いえ。そういう、わけでは」
「んんー、よくわかんないけど……雷は、おねーさんすきだからおうえん……してるよ」
突然踏み込んだ質問をされて喉を詰まらせる凛世に、彼女はにこりと満面の笑みを浮かべた。真意の読み取れない言葉をかけられて困惑する凛世をよそに、子どもたちの遊びの時間は終わりを迎える。夕焼けによく似合う音楽と鐘の音が響き渡り、一日の終わりを告げた。
子どもたちは昨日と同じように、少し寂しそうにして「また明日」と言葉を交わして去っていく。雷の言ったことがよくわからないまま凛世も帰ろうとした、その時。
「凛世。今、いいか？」

「――っ、プロデューサー、さま」
びくりと一瞬だけ身を震わせて反応。凛世の表情は申し訳なさそうな、話したくなさそうな、なんともいえないものになっていた。
彼と話すことが気まずい――といっても、それは全て自分の言動のせいなのだが。
「……？　プロデューサーさま？」
「すまん。何にも、分からなくて」
淡々と繰り出される謝罪は唐突で、しかし凛世には何のことなのか瞬時に理解できた。
「俺、多分凛世をまた悲しませるようなことをしたんだよな。けど何をしたのか、なんで怒っているのか……全然、わからなくて」
内容はやはり予想したとおりのもの。
昨日と今日で、凛世はプロデューサーを突き放すような態度をとっていた。勿論なぜそんなことをするのか、彼は一切知らない。何も、知らない。
「だから、分からなくて、すまん。もし大丈夫なら……どうして怒っているのか、教えてほしい」
ただひたすらに重く、余計な言葉を取り除いた謝罪。
それに対して、凛世は。

「……ぷ、プロデューサー、さま……」

彼は理由を知らない。何も知らぬ者からすれば自分の態度はどう映っていたのか。少し考えてみれば今のプロデューサーの心情を理解するのは呆れるほどに容易だった。

――いっしょにいたおにーさんと、なんで、話さないの？

――けんか、してるの？

つい数分前の声が蘇って反響する。顔を上げた彼の表情を見る。

苦痛、ひたすら真っ向な罪悪感、誠実な心。きっと彼は今、全てにおいて自分自身に非があるのだと思っているに違いない。この瞬間に至るまでの凛世の態度がひどく身勝手で、思い返せば思い返すほどに正気を疑うような理由であることも知らずに――自分だけを責めていた。

後悔。その念を抱くのは自分の方だと凛世は歯噛みする。どれほど軽率で愚かで浅ましい行為であったかを、彼の反応をみてやっと自覚したのだから。

だから凛世は遠慮がちに、苦しげな表情をしながら、静かに。震える声で、静かに告げた。

「違うのです……プロデューサーさま、凛世の、出来心で……ございます」

静かに、静かに。

懺悔を口にするように、わずかに許しを乞うように。

「……っ、失礼、いたします……っ」

それだけ言い残すと彼女は踵を返し、苦痛に歪んだ表情を隠して足早に去っていく。

ああやってしまったと、曇り募る罪悪感に表情を歪めながら。

だから空を見上げた

一種の試しのようなものだった。
そんな言い訳が通用するはずもないことは自分でもよく分かっている。なんとなく、こうなってしまう予感はしていたのだ。それでもやってしまった。
純粋に反応が見たかった、普段と異なる態度をとったら彼がどうなるのかを。
異常を察知して心配するか、不誠実な態度を咎めるか、或いは――
「……凛世は」
見てみたかった。彼が、プロデューサーが、自分のことをどう思っているのか。
『もしもし？　凛世ちゃん？　大丈夫？』
「……はい」
通話越しに少し音質の悪い少女の――園田智代子の声が聞こえてくる。
彼女はいつもと変わらぬ口調だ。少し気を落としている凛世の様子を通話の開始直後に感じ取ったらしく、まず始めに心配そうな声色で問いかけてくれた。
『って、あんまり大丈夫じゃなさそうだよ？　……もしかしてさ、あのことだったりする

？』

「いえ……。……はい、智代子さんのおっしゃるとおりでございます」

『そうなんだ……良かったら聞かせてもらえないかな？』

電話の音が鳴る部分から小さく流れていた音楽が止まる。旅館の一室は凛世と、遠く離れたところにいる智代子の声だけが響く空間と化した。

室内は暗い。明かりをつけていないからだ。夏も過ぎて少しずつ気温が下がり始めている夜は、窓を開けずとも肌寒く感じてしまう。寒さの原因は気温か、それとも精神的な問題からくるものか。

「プロデューサーさまに、お辛い思いをさせてしまいました」

凛世は姿勢を正して起こったことをそのまま述べる。

「新たな一面を垣間見ることができれば。……そう考えての凛世の行いは、プロデューサーさまのことを何も考えていない、身勝手なものであったと……実感、いたしました」

語る最中、事の発端であるやりとりを思い返す。

そう、あれは一週間ほどまえの出来事。今と同じように智代子と電話をしていたときのこと。

――。

ねえねえ凛世ちゃん！　この前貸した漫画、どうだった!?

はい。心のざわつきと高鳴りを感じながら、熟読いたしました。あれが恋の駆け引き……というものなのですね。

そうなんだよねー！　ずっと奥手だった女の子が、好きな人の気を引きたいから急に冷たくなっちゃって！　男の子の方も、今まで全然気にしてる素振りなんて見せなかったのに、すっごく不安になって……だんだん意識し始めるの、良いよね！

……冷たくされると、あのようになるもの、なのでしょうか。

え？　どうだろうなあ。必ず漫画みたいになるって訳じゃないと思うけど、好きな気持ちがちょっとでもある人に冷たくされると意識しちゃうって結構ある話じゃないかな？

好きな気持ちを、冷たくされると意識するようになる……もしも、凛世が……。

――。

あのとき、凛世は思った。

自分はプロデューサーのことを想っている。慕っている。恋慕の想いは揺るぐことはなく、わざわざ何かして確かめる必要はないほどにはっきりとしていた。

しかし、プロデューサーはどうだろうか、と。大切な存在とは言ってくれたものの、彼

の中で自分はどの程度の認識をされているのか、どの程度の感情を抱かれているのか――興味がわいた。好奇心がかき立てられた。

それが間違いだったのだ。

「ほんの少しでも……あのお方の心を理解できれば。そのように考えておりました。……しかし実際は、理解とは程遠く」

彼の反応を見るどころか、ただ傷つけてしまっただけだった。無意味に悩ませてしまっていたのだ。

少女漫画ではそれまで無関心を装っていた少年の内に秘めた想い、恋心を上辺の外套を剥がして素直にさせる、という展開を見た。僅かにでもプロデューサーが自分に対して思っている本心を見ることができたら良いと思ってとった行動だが――少女漫画の真似事が現実に通用するわけではないと痛感。

きっと彼はずっと、今日の夕方のように悩んでいたのだろう。優しい彼ならまず自分を責める所から始まる――今までのことから、予測できないわけはなかったはずなのに。

「申し訳ありません……智代子さんに力を貸していただいたにも拘わらず、凛世は……」

『凛世ちゃん……えっと、ね？』

それまで黙として話を聞いてくれていた智代子が、宥めるような優しい口調で話し始

める。

『私もね、凛世ちゃんに頼まれた時はびっくりしたよ。冷たくって、突き放すような言葉を教えてほしいって……でも、あの漫画を読んだあとにそうなっちゃうの、ちょっと分かる気がするんだ』

なんとなく、彼女が電話の向こう側でどんな風にしているのか分かる気がした。

きっと目の前に相手がいるわけでもないのに、身振り手振りで表現しようとしているのだろう。そう感じるくらいに思いやる心が伝わってくる。

『私も憧れだもん。少女漫画みたいな恋とか、ドラマチックな恋とか。凛世ちゃんのことだからたぶん、プロデューサーさんの事なんだろうなって思って……ちょっとでも、何か分かることがあればいいなって思ったの』

「智代子さん……ですが」

『結果的には傷つけるだけになっちゃったんだよね。そこは普通に、怒ったりしてないことをちゃんと伝えて、あとはー……凛世ちゃんの知りたいことを、凛世ちゃんの言葉で聞いてみるのも、いいんじゃないかな』

「凛世の知りたいことを、凛世の、言葉で……」

窓の外を見ると、夜空に星が点々と輝き始めていた。

大自然の夜景。その美しさに目を奪われ、思わず息が漏れる。

『――って、あはは、何言ってんだろ私。なんか上手くいえないけど……プロデューサーさん優しいから、ちゃんと伝えれば大丈夫だと思うよ』

「……はい、プロデューサーさまはとても優しく……いつも凛世たちのことを、一番に考えてくださるお方です」

だからこそ、そんな彼だったからこそ。

凛世は胸の前で拳を握る。やらなければならないことが見えたような気がした。

◇　◇　◇

一方、プロデューサーは夕方以降もさらに悩んでいた。

真っ向から謝罪したのは良かったが、逆に謝り返されたような感覚。凛世の表情と、彼女の言っていた『出来心』という言葉。久しぶりに凛世らしい口調を聞けたと思えばすぐにどこかへ行ってしまい、謎は深まるばかりだった。

「出来心……出来心ってなんだ……？」

分からない。そもそも凛世が怒ったり苦しんだりしているのかすら分からなくなってきていた。

彼女の行動の理由、深層心理。何一つとして分からない。もっと彼女のことを知りた

いと、彼女との関係に向き合いたいと思っているのに――理解できることはほとんどなかった。

――やっぱりお兄さん、その人のこと、すっごく大切に思っているんだなって。

奏子の言葉を思い出す。たった二回しか顔を合わせていない相手にも感じ取れるくらい、自分は凛世に対しての思いを出すことができているのだろうか。

同時に、直後の言葉も想起する。

――どうしてそこまで、その人のことを分かっていて、悩んでいる自分も見えているのに、『恋じゃない』って思うんですか？

――お兄さんには何か、自分の感情を認めたくない理由があるように思えます。それが何なのかは分からないですけど。

凛世に冷たくされた事に対してのモヤモヤがなんなのか、明確に言語化できていない。それは謝罪をしたところで揺るぎない事実だ。

彼女とまともに会話ができないのは嫌だ。その『嫌』は、どんな感情なのか。

今までほとんど考えてこなかった部類の悩みゆえに答えがなかなか出ない。彼女に拒絶に近い反応をされたとき、最初に浮かんだ感情は、いったい――

「……ん？」

コン、コンと、部屋の扉をノックする音が二つした。
空は夕日すら飲み込まれている時間帯、旅館の一室。わざわざこの部屋を訪ねてくる人物は一人しかいない。プロデューサーは固唾を呑んで立ち上がり、扉に近寄って開けた。
「……プロデューサーさま。少々、お時間を頂いても……よろしいでしょうか」
「……勿論良いよ、入ってくれ」
「はい。夜分遅くに、失礼いたします」
ぺこりとお辞儀をして室内に入る凛世。彼女はプロデューサーが部屋の真ん中に座ると、対面するように少し離れて真正面に座った。畳の匂いの中に甘く、落ち着く香りが混じり始める。
和室の空気も相まってしばらく沈黙が続きそうだと思っていたが、凛世は座るとすぐに口を開いた。
「夕方の、数刻前のことでございます。貴方さまのお言葉に対し、凛世は正確な返答もせずに去ってしまいました」
「い、いや、いいんだよ気にしなくて。言ったとおり、俺も何かしちゃっただろうから……」
「いえ。プロデューサーさま」

すぱりと否定されて目を見開く。彼女の言葉は強く、曖昧な表現を一切許さんとする勢いをもっていた。
「凛世は、機嫌を悪くしているわけではございません。貴方さまが頭を下げる必要は一切ないのです……数々のご無礼を……お詫び申し上げます」
「え？　え……？」
反射的に疑問符を浮かべながら瞬きを数回。強い意思のこもった眼光に射貫かれて唖然とするプロデューサーの様子を、凛世は何も言うことなくじっと見据えている。
「えっと、怒っていたわけじゃなかった……のか？」
「はい」
「じゃ、じゃあどうしたんだ？」
「……お恥ずかしい話で、ございます」
彼女は目を伏せて膝に置いていた片手を胸元に持ち上げ、自身に問いかけるように深い呼吸をした。
そして目を開き、赤の双眸が闇夜に鋭く光る。
「凛世は、貴方さまのことをもっと深く、知りたかったのです。ただそれだけ――ただの、少女漫画の真似事です」
「少女漫画……？　やっぱり、よくわからないけど……」

何を思い返したのか微笑む凛世の姿を見て、一気に肩の力が抜けた。吐息をこぼして脱力するプロデューサー。

心の内にあるのはただ一つの安堵、何事もなくて本当に良かったという安心のみである。

無理にただしていた姿勢を崩し、自然と頭が下がった。

「はぁ～……嫌われたとかじゃ、なかったんだな……よかった……」

「凛世が貴方さまを嫌いになるなど、絶対に有り得ません……プロデューサーさま。凛世の我儘で、私欲のままの言動を……どうか、お許しいただけないでしょうか」

「許すも何も、俺が怒ることとかは何にもないよ。それよりも安心感が強くてさ。凛世とこんなふうに話すの、何日間ぶりって感じがするくらいだ」

未だに丁寧すぎる姿勢のままな凛世に言葉をかける。しかし彼女は申し訳なさそうな表情をして、それ以上の言葉が見つからないらしかった。

少しでも和やかな雰囲気にしたい。そう思った時、すでに腕は彼女の頭の方へ伸びていた。

「……ぷ、プロデューサーさま？」

「あ、悪い。なんか勝手に……嫌だったらやめるよ」

「嫌だなどと、そのようなことは……寧ろ、嬉しく思います」

頭を撫でられ、温かそうな笑みを浮かべて口元を緩める少女の姿を目に焼き付ける。ああ、これだと思った。

彼女が安心している姿を見ると、幸せそうにしている顔を見ると、自分も温かい気持ちになる。その温度は高くも低くもなく、絶妙に心地の良いものだった。

「よくわからなかったけど、なんともないなら気にしてない。だから凛世もあんまり申し訳なさそうにしないでほしい。俺は君にそうして、嬉しそうにしていてほしいな」

「……はい」

結局のところ彼女がなぜ突然冷たくなったのかについては何一つ分かっていない。しかし本人が自分に非はないというのだから、それは嘘偽りのない事実なのだろう。

それが分かるだけで良い。今は、嫌われていないことが分かるだけで他のことはなんだってよくなっていた。

「なあ凛世、せっかくこうして旅館に泊まっているんだ。普段できないことをしないか？」

「普段できないこととは、どのようなことでしょうか」

「例えばそうだなあ。じゃあ、一回外に出よう」

そう言って触り心地の良い頭から手を離し、立ち上がって外――入り口の反対側にあるバルコニーを指さした。凛世は何かを察したような目を輝かせて頷く。それを合図

にプロデューサーは戸を開いて外に踏み出した。
僅かに冷えた空気が身を包む。虫のさざめきをはじめとする様々な自然の音が耳に入り込み、多種な音は混じり合って一つの音楽を奏でているかのような錯覚を与えてくれた。
あまり広くないスペース。柵でしっかりと転落防止がなされているバルコニーは、手を伸ばせば木の枝に届くほどの位置に置かれている。
「ほら、凛世。上」
「――！　これは」
天を仰ぐ。
空を見る。
星が煌めく。
夜空に散らばる一面の星海は、一人の視界ではとても見渡せないほど広く長く、どこまでも続いている。
「パンフレットで見たんだ。夜景が綺麗だって」
「はい……凛世も、」
満天の星空に息を呑み、彼女は一度言葉を句切った。目を細めて満足げな顔をしている姿は、夜景に匹敵するほど美しい。

「凛世も、貴方さまと……この空を眺めたかったのです」
「奇遇、だな。じゃあしばらく見ていても大丈夫そうだな」
「はい。瞬きする時間すら惜しいほどに、麗しい世界です」
両の手を合わせて祈るように空を見る凛世。星空に釘付けになる姿がなんだか面白くて笑いそうになるが、笑ってしまうと目を細めてしまうことになる。
今は、それすらも惜しかった。
「無限の星羅、移り行く世界……しかし恒久に、幾度も輝く星空……」
恍惚とした表情で言葉を口にする彼女は、何を思っているのだろうか。
――そんな彼女を眺める自分も、何を感じているのだろうか。
やはり問いかけに明確な答えは浮かばない。嫌われていなくて良かったと思ったときの感情が果たしてなんなのか、それでも難しい答えだった。
「凛世は、貴方さまと。この世界を見たかったのでしょう」
「でしょう、って？」
「いえ……ようやく、理解しました。何を知りたかったのか」
言葉の裏の思いは分からない。ただ、彼女も自信の行動に対して見いだしたものがある、ということだけわかった。
永久に続く星たちの旅。黒に煌めく無数の光は決して途絶えることなく、長い時間並

んで天を仰ぐ二人を見守っていた。願わくばこの時間がいつまでも続きますように―
―そう思ったのは果たして、どちらだったのだろうか。

そして風が吹いた

「あっ、お兄さーん！　おはようですー！」

元気が有り余った挨拶を投げかけられてプロデューサーは声の方を向いた。そこには案の定、裏表のなさそうな屈託のない笑顔の少女の姿がある。

「今日もバイトなんだな、働き者なことで……」

「褒めても割引しませんよ～、でも買っていってほし――っと、おや？」

聞いているだけでテンションが上がりそうな口調が一瞬止まり、表情も呆気にとられたものになった。

理由はプロデューサーの背後にいた存在。昨日と一昨日では二人の会話の場には一度も現れなかった凛世がいることである。

「うまくいった、っぽいです？」

「ああ。仲直り――っていうと変だけど、もう大丈夫だよ」

「プロデューサーさま、そちらのお方は……」

「ここに来てすぐに知り合った人だ。なんというか、いろいろ世話になった」

意外と説明が難しいことに気づく。思えばなぜ初対面の相手にあそこまで深い話を持ちかけたのか、今になってみると理解できないことだ。

「あなたが杜野凛世ちゃんですね～！　奏子っていいます、よろしく！」

「はい、よろしくお願いします」

「といっても、今日で帰るんだけどな」

「え？　もう帰るんですか、早いなあ。暇なときがあれば観光名所とか紹介したかったんですけどね」

「それはだいたい撮影で回ったかな」

午前中で観光協会との最後のコンタクトを終え、現在は昼を少し過ぎたあたり。バスの時間まですることもないので街中を凛世とぶらつこうかとしていた――要するに、今の二人は相当に暇である。

かといって今更観光の名所を回る気にもならない。撮影で寄った場所を全て回ろうとしても時間が足りず、何をするにも微妙な時間しか残っていなかった。

「そういうことでしたらとっても素敵な場所がありますよ！　観光地じゃないですけど、この地域に来たら一度は行ってほしいところです！」

奏子が片目を瞑って提案。ややいたずらっぽさのある笑みを刻んでおり、プロデューサーは訝しげな視線を送る。

「大丈夫か？　変なところじゃないよな」
「ひどーいお兄さん！　なんで疑うんですか！　ちゃんとしたところですし、なんならデートスポットとしても最適ですよ！」
「でーと、すぽっと……」
「ちょっ、変なこと言わなくて良いから！　とりあえず……オススメの場所なら、聞くだけ聞いてみようか」

――そうして、奏子の紹介を受けて二人は街外れの小道を進み、一際紅葉の色付く山の麓に辿り着いた。
見上げると天を貫かんとする威勢で伸びる山がある。雲を割りそうなほど伸びる頂は下からでは見えず、どこを見ても紅葉が秋色を宿らせていた。
景観はさすがというべきか、昨晩の夜景にも劣らない。
「ここ、だな。『紅葉渡り』って呼ばれているのは」
視線を下ろして先を見ると、自然のつくった赤や黄色の手のひらが舞い降りる、少しだけ回顧的な感情を呼び覚ます小道があった。見渡す限りの木々や枝葉、全てが他の季節感を徹底的に排除した、まさに『紅葉渡り』の名を冠する風景だ。
「奏子が言ってたとおりだな……どの道を選べば良いんだろう」

「どれも同じ景色が、永遠に続いているようでございます」
　進む先には道がいくつかある。凛世のいうとおり道に違いはなく、どれも突き当たりが見通せない程に長い。
　この道の意味は、他者との意思の疎通、らしい。
「二人で違う道を進んで、行き止まりで出会うことができたら相性が良いんだったな」
「相性が、良い――」
　いわば縁結びのような役割を担っているようで、枝分かれする道の先で会うことができた者同士は結ばれるという――これは、奏子が耳打ちで教えてくれた情報だが。
　そこまで迷信めいたものに縋る人がいるとは思えないが、秋らしさがあって面白そうだと感じた。
「……プロデューサーさまは、奏子さんと大変打ち解けた様子でございました」
「え、そう見えたか？　まあ話しやすい人柄ではあったけど」
「凛世は……。いえ、言葉にする必要は、ないのでしょう」
　一瞬だけ凛世の瞳の中に燃えさかる闘志のようなものを感じて、プロデューサーは首を傾げる。
「ど、どうしたんだ凛世」
「ふふ、なんでもございません。ですが敢えて申し上げるのであれば……蜂吹く、でござ

います」
「え、どういう――」
言い終えた凛世はコートの裾をはためかせて目の前を横切っていく。キャスケット帽にトレンチコートにスニーカー、スカートとブラウスの色だけが一昨日と異なる着こなし。いつもと違った雰囲気の彼女は、いつもと違った香りを残して過ぎていった。
そうして、左から二番目の道に入っていく。その歩みには一切の迷いがなく、何かを信じているかのようだ。
「……俺も、行くか」
プロデューサーも遅れないように足を進める。一歩、一歩と進むたびに乾いた落ち葉がこすれる音がして、歩くたびになんだか楽しい気持ちがわき上がってきた。
一分、二分、三分――それからしばらく無言で秋の紅葉を楽しみながら進んだ時、順調だった足取りが急停止。
「ま、まだ道が別れるのか……？」
今度は三つに道が別れていた。まるで迷路でも進まされているかのような気分だ。
唐突に、自分はまっすぐに進んできたのか不安になり始める。しかし後ろを振り返っても最初にいた分岐点はもう見えない。凛世は今どのくらい進んだのだろう、もしかしたらもう道の終わりに辿り着いているのかもしれない。

別れた上で、さらに枝分かれする道。最初に選んだ道がそもそもどこにつながっているかわからない。三つのうちどれかを選んでも凛世に出会える可能性があるかどうかわからない。

答えのない選択肢。それは昨晩まで思い悩んでいた感覚を彷彿とさせる。

――自分が凛世のことをどう思っているのか。

プロデューサーは立ち止まったまま考える。彼女との今までの歩みを振り返り、自分は過ぎゆく日々の中で彼女に何を思い、何を見てきたのかを振り返る。

少なくとも、最近自覚するようになった『凛世と一緒にいると楽しい、心が落ち着く』という感覚は最初から持ち合わせていたわけではない。それこそ彼女がアイドルになってすぐの頃は、表情がほとんど変わらない姿に毎回オーディションでヒヤヒヤしていたし、何を考えているのか分かりづらい子だという印象が強かった。

それが変わったのはいつからだろう。

いつから、彼女に対する認識が変化していったのだろうか。

少女漫画にある台詞を自分に向けて言われたときか。

雨の中一緒に雨宿りしたときか。

桔梗の柄の風鈴を眺めていたときか。

どこまでも続く鳥居の道で彼女を見つけたときか。
ともにブランコを漕いだときか。
撮影のとき、ほんの僅かに台本にはない笑顔をみせてくれたときか。
アイドルになってよかったと、彼女の口から聞けたときか。
それとも、今年の春や夏のように彼女の悩みに触れたときか。

どの日、どの時、どの瞬間。彼女のことを強く思うようになったのは、知りたいと思うようになったのは果たしてどこなのか。そして、この感情に名前をつけるのならばなんと呼べば良いのか。
——なぜ、いつまでも答えがでないのか。
「なんで、だろうな」
意味のない独白、自問。
答える者はいない、ただ優しい風が吹くばかり。
逆になぜ答えが出ないのかについて深く考えようとすると脳がそれを拒むように思考が鈍くなる。ただ漠然と、杜野凛世はアイドルである、自分はプロデューサーであるという事実ばかりが思考に宿っていく。
もしかしたらこの意識が枷なのかもしれないと思った。奏子に恋だといわれて否定

も肯定もできないのは、この立場を含めた考え方のせいなのかもしれなかった。

「……自分があの子のプロデューサーだから、そんな感情を抱くのは間違っている……なんて、思っているのかな」

ただの仕事仲間ではない、大切なかけがえのない存在。しかしそれはこの職種があったからこそつながることのできた関係。彼女と自分は立場上の関係が何もない場所であっていたらどうなっていたのだろう。やはりこの感情は成長する我が子のように見守る父親みたいなものなのだろうか。

思考は迷宮入り、道も進まず。きっと凛世はすでに辿り着いて待っている。だというのに足が進まない。ここで間違った道を選んで、もし凛世と会えなかったら――自分は信じてもいない縁結びを背に、『これは恋慕ではなかったんだ』と言ってしまいそうで。

「――凛世」

ぽつりとつぶやく。響きもしない小さな声で。

その声に呼応するかの如く風が吹いた。やや強めで地面の落ち葉を舞い上がらせ、勢いよくしかし静かに葉っぱを運んでいく。

「……？　これは」

何の気はなしに風の行く先を見ていたら、流れる落ち葉のほとんどが真ん中の道に向かって運ばれていることに気がつく。それもかなり不自然で、とても風が吹いただけで

は起こりえないほど緩やかに流れていっている。
もしかしたらこの先に何かあるのかもしれない。そう思って、ほとんど思考をする暇もなく体は動いていた。
小道を進む。風が吹く。
紅葉が流れる。風が吹く。
どのくらいそうして歩いただろうか。ついに道は終焉を迎え、『帰り道はこちら』と薄れた字で書かれた看板のある場所に辿り着いた。
凛世は、いない。ぐるりとあたりを見渡すが彼女らしい姿も影もない。ただ落ち葉が舞うばかり、自然の香りが鼻孔をいたずら気味にくすぐるばかり。
「ハズレ、だったんだな」
存在感を強く主張する帰り道だけが冷たい空気を漂わせている。早くこの場を立ち去れと言わんばかりだ。
おそらく道が交わっていないのなら凛世はすでにこの道の先に行っている。文字通り、縁がなかったとあきらめるべきなのだ。
——進もうとした、そのときだった。

とん

とん

とん

とん

とん

とん

とん

とん

とん

とん

とん。

落ち葉を踏みならすにしては緩やかで静かすぎる足音がいくつも鳴った――否、鳴ったという表現は全くもって正しくない。音が鳴ったのかもすら怪しい、不思議な、妙な音だった。

――そんな音に包まれて、吹き抜ける風と共に少女が現れた。

幻想的。景色や空気、少女の雰囲気の全てを言い表すにこれほどふさわしい言葉はない。

洋風な装いをしながらもどこか雅で、落ち葉をならしてかわいらしく遊んでいる姿はそれでも綺麗としかいいようのない佇まいだ。微笑みは一つの花がゆらりと揺れるように魅力的で、赤い瞳には幸せの色が伺える。

綺麗だ。この世の何よりも――そう思ってしまいそうなくらい、絶世の眺めだった。

「ふふ、プロデューサーさま。再びまみえることが、できました」

彼女は秋の情景に溶け込みながら声をかけてくる。プロデューサーは思わず見惚れてしまい、うまく言葉がでてこない。

「凛世と貴方さまの相性は……良、ということになりましょうか。そうであれば、凛世は……」

「凛、世……」

瞬間、何か心の中でずっとつかえていた蟠りが霧散したのが分かった。

鍵のかかった錠前があっさりと外れたように、道を立ち塞ぐ茨が消え失せたように。

感情に辿り着く道を隠していた闇が、晴れたのだ。

「凛世」

もう一度名を呼び、嬉しそうに微笑む少女に歩み寄る。
なんと嬉しそうな顔をしているのだろう、ただ数分後に再会しただけなのに。
――きっと自分も、同じくらい喜んでいるのだろう。
「これからも、よろしくな」
「……はい。いつまでも、貴方さまのお側に」
もっと他にかける言葉があったはずだ。
もっと気の利いた、風景に合った言葉が。
しかしそんなものはやはりどうでもよかった。歯牙にもかける必要はないのだ。
はっきりしたのだ、感情の名が。
夏の一件があったから、凛世のことを最近よく意識するようになったから、そんな理由ではない。いつからだとかなにが切っ掛けだとかそんなものはなく、プロデューサーは杜野凛世という少女に心を奪われていたのである。
それはいつの間にか、彼女との歩んできた道の中でほんの少しずつ蓄積されてきた感情の発露。プロデューサーとアイドルの間に抱く感情でないとか、そんなことも気にならないほどに鮮明に胸に焼き付いている。
冷たくされて苦しかった。彼女の精神面に何かあったのかと心配するよりも先に辛いという思いがわき出た。それはなぜか、理由は明白だ。この感情が『そういう形』を

しているからである。

その名は、まさしく〝恋〟だった。

「――はは、なんか色々すっきりしたよ。ありがとう、凛世」

「お礼を申し上げるのは凛世の方でございます。身勝手な凛世を、プロデューサーさまは……」

「それはいいんだよ、行こう」

「……ふふ。はい、プロデューサーさま」

渡り終えた紅葉は帰り道にはない。ただの草花が生い茂った、少し整備されただけの道。

危ないと思い彼女の手を握った、僅かに強い力で握り返された。彼女の頬が赤い。自分は赤いだろうか。

「そういえば凛世、どうやって道を選んだんだ?」

「はい、それは」

凛世はキャスケット帽のつばを空いた手で上げて視線を合わせてくる。その瞳の色はやはり幸せに包まれていた。

彼女は秋によく似合う静かで綺麗な声色で、告げる。
「――道に風が、吹いたのです」

◇　◇　◇

「うまくいきそう、なの？」
「さーあね。どうなるかはあの二人次第でしょ」
遙か空高く、山の頂上にて。
あたりの全てを見下ろす二人の少女が並んでいる。栗色の髪と茶色の髪の、容姿がよく似た少女たちだ。一人は十六歳程度、もう一人は五歳程度の背丈をしていた。
「まあ、人って基本的に前途多難だし。常にうまくいく関係なんてどこにもないよ」
「そうなんだ……むずかしいね」
「だから悩む。壁に当たることもあるしすれ違いも起こる。それに関して言えば、どうにかできる存在なんてないんじゃないかなあ」
栗色の髪の少女は、人差し指をくるくると回しながら言う。大地に宿る秋色を心地よさそうに眺め、目線の先には道を歩く二つの人陰があった。
「なんでヒントあげちゃったの？　基本、手助けなしの紅葉渡りなのにさ」

「だ、だって……りんぜおねーさん、すきだから」
「あーっ！　勝手に姉を追加するな！　でもあの人可愛かったからなあ……無理もないか」
「お、お姉ちゃんだって、たすけたでしょ」
「私はいいんです～！　……はは、細かいことは気にしなくて、いっか」
二人の少女は高い場所から眺め続ける。今後どうなるか見えない二人の関係を楽しそうに、どこか別の次元めいた視点で見ていた。
少なくとも、その関係はしばらくは円満に続きそうだと予想する。
「まあ、明日は明日の風が吹くって言うし。これからどうなるか分かんないけど、上手くいってほしいね」
「うん、うん」
「じゃ、お兄さん、杜野凛世ちゃん――またいつか」
ビュウ、と風が一つ。
色付く秋に祝福を与える優しい風が吹いた。
それは木々を揺らし、葉を撫で、人々をすり抜けていく。
そして、心の中にも風が吹いた。
一方通行気味だった青の心から吹く風。想いを馳せて飛ばす心の風。

一つだった風が、二つに。ゆっくり、少しずつ、爽やかな風が男の胸の内から吹き抜けた。

木々を抜けていく爽やかな秋風の響きを、人は爽籟と呼んだ。

凍蝶―Ｗｉｎｔｅｒ―
見えない寒さと。過：現

凍蝶、という言葉を知っているだろうか。

凍蝶、読みはいてちょう。

それは『寒さのため凍てついたようになる蝶』のこと。飛んでも鈍く翅は固まり、逃れられぬ極寒を前にほとんど動くことはない。俳句では当然冬を指す季語である。

冬まで生き延びるもその後動くことはなくじっと世界に溶け込む。微かな命が今にも消えそうな、もしくは既に落命して動かなくなってしまった――そんな儚くも美しい、大自然の創り出した芸術品。冷淡で冷酷で、けれども消えることのない生命の輝きを感じることだろう。

『凍蝶に　なほ大いなる　凍降りぬ』

小さなたったひとつの命へ向けた句ですら、果てしなく広がる自然の神々しさと厳し

さを感じさせてくれるほど、この言葉は美しい。降り積もる雪を見て身を寄せる生き物の傍にはそんな情景も描かれているのだ。

凍る冬は切なく、春の暖かさも夏の輝きも秋の風も消し去って、奪い去っていく。

足元に生えた草花は潰える。木々は枯れ絶える。厳しくも綺麗で容赦のない、むき出しになった大地が教えてくれる静寂と終末の冬空は、緩んだ心すらも覆い尽くして。

それでも尚、心に灯す熱に意味があるというのなら。肌に触れる冷たさも祝福の一部となるだろうか。

死にゆく凍蝶にも、儚く失われるだけの命にも大いなる意味が残されているのなら。意地悪な雪も春風になるだろうか。

答えのない白銀の空と大地。

すべてに等しく降り注ぐ雪が白に染め上げていく。街も木々も、人類の歩んだ轍も纏めて白に還すのだ。優しく包み込んでくれる安寧はもう終わりだと告げんばかりに、ただ非情に。

世界が姿を変え、季節が失われる。訪れた冬を前に静かに、静かに一陣の風が吹く。

足音を鳴らす寒気を前に、秋は静かに息を引き取った。

『

【過：見えない寒さと。】

「今更になって寒くなってきたな……」

窓の外を恨めしそうに見ながらプロデューサーが言う。

快適で過ごしやすい秋の後にやってくる冬という季節は、雪と寒さを引き連れて世界が自然の厳しさを教えてくれる機会である。家庭に導入される暖房器具や重ね着といった手段で人類は圧倒的な極寒地獄を逃れてはいるものの、年々その寒気は訪れる時期にずれが生じ始めている。

いつ寒くなるかと思えば年を越しても雪が降らなかったり、もうすぐ春になるというのに雪が降り始めたり。降り積もった雪の中で過ごすクリスマスを迎えられない地域も既にあるほどだ。

曖昧な季節の境目。プロデューサーは2月半ばになって降り始めた雪を前にため息を吐いた。

「わぁ……っ！　雪が降ってきました……！」
「そうだな、積もらないといいんだけど」
「……雪、積もったらだめなんですか？」
　事務所内から目をキラキラさせて外を見る果穂が、億劫げに返すプロデューサーに対して純朴な視線を向ける。
　それを受けてプロデューサーは「しまった」と言葉に詰まった。
「いや、ダメなんてことはないぞ。積もったら綺麗だろうし、俺も楽しみだ！」
「そんな微妙な顔して言っても説得力ねーだろ……」
　空元気に拳を振り上げる様子に呆れるのは樹里だ。彼女はプロデューサーが何を懸念しているのか分かっているようだった。
「あんまり降りすぎると、今度のイベント中止になるかもだしな。気持ちは分かるぜ」
「あっ……そっか、積もったらお客さん来られなくなっちゃいますよね……」
　今度は果穂が目に見えて分かるほど落ち込む。
　イベント、というのは一週間後に迫っているライブと洋菓子の販売会のことである。放課後クライマックスガールズの行う冬季のミニライブと、有名なスイーツ店が出張する販売会の合同イベント――双方のＰＲを目的に行われる――もので、前もって重ねている告知により期待値はなかなかのものだ。

「もう降らないかもしれない」といわれていた雪に喜びたい気持ちと、天候によってみんなで準備してきたイベントが中止になるのを懸念する気持ち。果穂の中にはどちらの思いも同じくらい強くあるに違いない。

「そんなに降らないって聞いてるから、大丈夫だとは思うよ。……すまん、余計な心配させちゃったな」

プロデューサーは申し訳なさそうな表情でフォローする。実際、今回の積雪量はそこまで多くはならないと予想されているので、あまり心配する必要はない。もう一度窓の外を見ても、優雅に舞い降りる牡丹雪が映っているだけだ。

「でもこんな時期に初めての雪か。アタシも積もらないとは思うけどさ、季節がズレてる感じはするよな」

「まだまだこれから寒くなるだろうなあ。明日からもう少し重ね着してこようか……」

「プロデューサーさん、寒くないですか？　あたしのマフラー使いますか？」

「ありがとう果穂。だが今日はな……カイロを持ってきたんだ！　帰りがどれだけ遅くなってもいいように！」

「あんま無理すんなよ、プロデューサー……」

ポケットからカイロを取り出して得意げにしてみせると、樹里に憐みの視線を向けられてしまった。

「今は来週のイベントに向けての準備がメインだし、俺もそんなに遅くならないうちに帰れるとは思うよ。……というか、今何時だ？」
「はいっ！　今はー……１６時１０分です！」
「アタシらはそろそろ練習の時間だな」
　彼女のいう練習はライブ時のダンスの自主練のことだろう。果穂と樹里が同じ動きをするパートがあるため、二人で合わせる時間を作っているらしい。通常のレッスンや学業に加えて大変だろうに、と少女たちの熱心な視線に感心する。
「んじゃ、そろそろ――って、そうだ」
　荷物をまとめて外へ出ようとした樹里が足を止めて振り返る。視線はプロデューサーでも果穂でもなく――座って黙々と作業を続けていた凛世へ向けられた。
「凛世はいつ頃帰るんだー？　時間が合えば一緒に帰るか？」
　少し大きめの声。
　凛世はぴたりと動きを止め、やや遅めの動作で首をもちあげる。深く澄んだ瞳が樹里へと向いた。
「樹里さん……凛世はおそらく、あと一時間ほどになるかと」
「ん、了解」
　それだけの短い返事をして樹里は事務室の外へ出ていき、果穂もぴょこぴょこと可愛

らしい動きで後を付いていく。二人が室内から姿を消したことで、事務所は凛世とプロデューサーだけになった。

先ほどまで話し声がしていたとは思えないほど静か。窓際にいたプロデューサーが凛世に歩み寄ると、足音が強く響いた。

「順調か？」

「……はい。滞りなく進んでおります」

返事をしながら凛世は手を動かす。しなやかな手指は色のついた折り紙を畳んでは広げ、一枚の薄い紙の形を丁寧に変えてゆく。既に机の上には様々な花の形をした折り紙が大量に並べられていた。

「もうこんなに作ったのか！　確か小さい頃からよく作っていたんだよな……綺麗にできてる」

「凛世も、昔を思い出しておりました」

音を立てず数々の花々を作り出す姿は、彼女の容姿も相まって〝雅〟と呼ぶべき雰囲気を醸し出している。

以前、彼女が事務所で同じように紙を折っていたことがあった。聞けば、昔から手持ち無沙汰なときによく折っていたのだという。

「椿、菖蒲、紫陽花、向日葵、朝顔……同じ一つの紙が、たくさんの形に成りました。幼

い頃も……このように」
　また一つ作り終え、手を休めることなく凛世は次の作業へと移った。戸惑うことなく形を変えていく紙の姿が見ているだけでも気持ちよくて、しばらく無言で見つめてしまう。
　そうしてプロデューサーが棒立ちしている間にもう一つの花が完成した。
「プロデューサーさま……よろしければ、こちらを」
「え、俺にくれるのか？」
「はい。桃色の胡蝶蘭です」
「へぇー、コチョウランか。紙一つでそんなものまで作れるんだな。ありがとう、凛世」
「……いえ」
　プロデューサーの言葉を受け取ると、凛世が何か言いづらそうに俯く。表情こそ曇っていないけれど、躊躇いがあるような顔をしている。
「ど、どうしたんだ？　何かあったか？」
「その……プロデューサーさま……」
　十秒。
　二十秒。
　三十秒、と。

数えればすぐに過ぎていく時間が永遠にも感じられるほどの沈黙が響く。樹里も果穂も出て行ってしまった今、二人きりの事務所でプロデューサーは凛世の言葉を待つことしかできなかった。

彼女は時々、何かを口にしかけては飲み込むことがあるように思える。それがなんなのか今はまだ分かっていない。

「……いえ、なんでもございません」

分かりたいけど言葉にしてもらえないことは全然分からなくて、けれどその沈黙に踏み込んでいいのかも自分では判断できなくて。

結局その日も、凛世の心を聞くことはなく終わっていった。

【現：見えない寒さと。】

すっかり冬色に染まった舗装道路を歩きながら、智代子は白い息を弾ませて歩いていた。

かなり遅い雪の到来、平日の午前の道に人の気配はない。既にイルミネーションやクリスマスといった冬らしいものは、昨年の１２月に全て置き去りにされている。淡い雪が降り注ぐ街は殺風景で、けれども美しい景観をもたらしていた。

「ら～ら～ら～てい～んく～るすの～ふれ～♪」
「あら智代子、随分ご機嫌ね」
「えへへっ、わかる？　また雪が降ると思ってなかったから、なんかテンション上がっちゃうんだよね！」
　くるっとその場でターンを決めてポーズをとってみせる智代子。夏葉がそれを見て優しげな笑みを浮かべる。
　雪が降るといえど、現在は二月の半ば――もう3月に差し掛かろうとしている時期だ。
　年越し前の１２月に一度雪が降って、少し積もってすぐ止んで。中途半端な白と排気ガスに汚された雪ばかりが見える寒い冬は、春を目前にしてようやく雪景色を作り上げてくれたらしい。
「ふーりーはーじーめたんだー♪　って歌ったら止んじゃったんだもん！　もう降らないと思ってたよ～」
「確か一年前の冬もこのくらいの時期に降っていたんじゃなかったかしら。これはこれで、いいものだけれど」
　屈んで足元の雪を一握り、夏葉が純白のボールを作った。彼女は見惚れてしまいそうなくらい整ったフォームで振りかぶると、少し進んだ地点の大地に向かって剛速球を繰

り出す。
擦過音と共に雪玉がめり込んだ位置の雪が抉れ、夏葉は満足げに頷いた。
「果穂も喜ぶわね。これで今年も雪遊びができるわ」
「うん！　また雪像とか、作っちゃう？」
「いいじゃない。もっとクオリティの高いものを作るわよ、智代子！」
「よーし、今年も頑張っちゃうぞー！」
足跡を一つ一つ刻みながら会話に花を咲かせていると、ふと智代子が立ち止まる。
「……12月といえば、年末に花火上がってたよね。夏葉ちゃん」
季節外れな単語、ではない。花火は夏の夜の風物詩という印象が強いが、冬の夜空に打ち上げ花火を行う地域は日本中にたくさんある。
夏のように気軽に外出できる気温ではないため、あまり馴染みのない人も多いという。しかし凛と張り詰めた空気に咲く炎の花は、格別美しいものだ。智代子の言うように昨年末、都内で大きな花火が空に上がった日があった。
あの日の赤は、青黒い夜空と相まって最上の輝きを放っていた。
「ああ、そうね。すごく綺麗だったわ」
「雪が降ったのってあの日あたりだったよね？　花火もまたやってくれないかなあって」

「流石にこの時期には上がらないんじゃないかしら。近々イベントがあるわけでもないし……」
「でもでも！　雪が今みたいに積もってるときの花火ってすっごく綺麗だと思うんだよ！」
かじかんだ手先に白い息を当てて温める智代子。柔らかい雪と過酷な寒さに包まれて、しかし彼女はとても楽しそうに笑っている。
「だからね夏葉ちゃん！　提案があります！　今度の休みの日に――って、あれ？」
会話に夢中で気づかなかったが、雪に足跡をつけているうちに二人は事務所の前に到着したらしい。日常的に目にしている建物が視界に入り込んだことで智代子は言葉を中断する。
しかし疑問符を上げた理由はそれだけではない。彼女の視線の先、二階へと続く階段をのぼり切ったところには二つの人影があったのだ。
誰なのかは目を凝らすまでもなくわかる。プロデューサーと凛世だ。
『……で、――から……？』
『はい……――。……』
智代子は無意識のうちに二人を下から覗き込むように壁に張り付いた。夏葉は唐突な行動に首を傾げる。

「……何をしているの？」
「なっ、なんか、邪魔しちゃまずいかなって思って……！」
口ではそう言いながら覗き見の姿勢はやめない。
凛世は事務所に来る日は必ずといっていいほど一番にやってくるらしい。智代子も夏葉も今日は時間に余裕をもって早めに到着したつもりだが、それでも彼女のほうが既に着いているあたり、杜野凛世という少女の勤勉さと熱意がうかがえる。
おそらくプロデューサーには「仕事熱心」程度にしか思われていないのだろうけれど。
「二人とも中に入らずに、何の話してるんだろう……？」
会話の内容が気になる。耳を澄まして二人の会話に意識を集中させ、智代子は目を瞑った。
『――んとに俺でいいのか？　もっと他に……』
『いえ、プロデューサーさま……凛世は貴方さまと――です』
『そ、そうなんだな。じゃあえっと……この日は――だから……から、なら』
『……！　はい、ありがとうございます……プロデューサーさま……』
「……ん、んんー？」
「智代子。眉間のシワ、とれなくなるわよ」
「えっ!?」

よく聞こえないからどんどん険しい顔つきになっていく智代子を呆れた様子で夏葉が見つめている。思わず素っ頓狂な声が上がり、小柄な体が飛び跳ねると同時に声があたりの枯れ木に木霊した。

「……？　智代子さん、いらしていたのですね」

「お、夏葉もいるな。おはよう、二人とも」

さすがにボリュームが大きかったのか、上にいる二人にもしっかりと聞こえていたらしい。

「おっ、おおおはようございます凛世ちゃんプロデューサーさん！」

「ど、どうしたんだ？　……あー、寒いから震えてるのか。すぐに中を暖めるからな二人とも！」

動揺を寒気と勘違いされ、プロデューサーは急いで事務所の中へと駆け込んでいく。凛世も凛とした佇まいで彼の後に続いた。結局何の話をしていたのか分からず仕舞いだが、これ以上首を突っ込むと罪悪感が芽生えそうだ、と判断する。智代子は今回の件のことは綺麗さっぱり忘れ去ることにした。

階段を上りながら見えた、屋内に入っていく凛世の手元。

握られている二枚のチケットは、おそらく映画館のものだった。

ひとつ咲いた過…現

【過…ひとつ咲いた】

見渡す一面に雪化粧。

優しく募る白は、結果的に大した量にはならなかった。イベントの開催にほとんど影響しないどころか、美しい雪景色を作り上げてくれたので当日は想像以上に盛り上がりそうだ。

良かった、と安堵から胸を撫で下ろすプロデューサー。

「……」

「あっ、いや！　雪、積もってほしかったなー！」

「アタシにそれ言ってもしょうがねーだろ……」

突然慌ただしく首を振る彼に樹里は溜め息を吐いた。数日前に果穂が落ち込んでいたときのことを、彼なりに気を遣っていたようだ。

しかしこの場に果穂はいない。いるのは樹里とプロデューサーの二人だけである。

「……まあ積もらないおかげで、こうして準備もできるわけだし……アタシは良かったと思う」
「はは、今頃大雪だったら逆に大急ぎで片付けだな」
パイプ椅子をいくつかまとめて運びながら言う。屋外でのイベントは観客席を用意する必要があるため、手の空いた者たちで設営なども行わなければならない――わけではないが、樹里としては会場の準備を手伝えるところは手伝いたかったらしい。
どうやら設営スタッフに街中での知り合いがいるようで、それが理由かは分からないが樹里はいつもに増して張り切っていた。現に本来の集合時間より一時間早くやってきて準備を始めてしまっている。
「この勢いだと、みんなが来る頃にはほとんど終わってそうだな。なんて」
「椅子はこれで全部だよな？　次は何すればいい？」
「本当に張り切ってるな、樹里……！」
力が漲っているようだ。本番に向けての意気も十分。
感動するプロデューサーを尻目に、彼女は肩を回して次の仕事へと移る準備体操をしている。
「色んな人が見に来るんだろ。お年寄りから子どもまでだっけ」
「逆かな」

「子どもからお年寄りまで、か。おばちゃんも楽しみにしてたし、頑張らねーとって思ってさ」
「終わったらチョコフォンデュもあるもんな」
「そうそうチョコフォンデュも――って、ちげーよ！　いや、楽しみではあるけどさ……！」
からかうように問いかけてみせると、噛みついてきそうな視線を返された。
スイーツ店との合同イベントということもあり、無事に終了した暁にはスイーツパーティという名の褒美を用意してもらっているのだ。メインとなるのは巨大なチョコフォンデュで、味は絶品との評判だ。
果穂や智代子はもちろん、夏葉や凛世もそれを楽しみにしている。聞かされた時は微妙な反応だった樹里もなんだかんだいって楽しみにしているようだった。
「すまんすまん、でも俺も楽しみだよ。スイーツパーティなんて滅多にできないし」
「チョコが毎日のように魅力を語ってくるから、その……ちょっとだけな、ちょっとだけ興味が出てきたっつーか……それはいいんだよ！　アタシは成功するように、頑張るだけだしな」
「皆頑張って練習してきたし、大丈夫だ！」
合同イベントとはいえ、放課後クライマックスガールズが行うのはいつもステージで

やるように歌って踊ること。五人揃っての実施であるため、少なくとも今回はトークショーなどを挟むことはない。出番が終わった後にスイーツ販売で売り子をするくらいだ。

だがそれだけに留まらないのが、彼女たちの良いところである。

「……他の準備もしてきたしな」

「凛世が作ってくれた折り紙、すげー量だよな」

段ボール箱いっぱいに詰められた折り紙を二人で覗き込む。子どもの客も多くなるだろう、という声を聞いて、何かスイーツと一緒に持ち帰れるものを作りたいとなった皆の総意だ。手際が良い凛世がスケジュールの合間に熱心に取り組んだので、予定していた量を凌駕する折り紙の山が出来上がっていた。

整然たる様子で咲く紙の花々が、冷たい冬に凛々しく開いている。

「どうやったらこんな綺麗にできるんだろうな。凛世はすげーよ」

「綺麗すぎて、手に取ることすら躊躇いそうだな、これは……」

「……」

非の打ち所がない出来栄えに嘆息していると、何かに引っかかったのか隣に立つ樹里が眉をひそめた。随分と、ここ最近で一番といえるほど難しい顔をしている。

「大丈夫か!?　具合が悪くなったとか」

「ああいや、そういうんじゃなくて」

過保護気味な反応をするプロデューサーに対し、彼女は落ち着き払った様子だ。既に設営の大部分が完成したステージのほうを見やって、形容しがたい微妙な表情で口を閉ざしている。

寂しげ、というには複雑な感情の入り混じった顔。意気揚々と準備に勤しんでいた覇気は何所かに置いてきたかのように静かで、物憂げだった。

「アタシが言うべきことじゃねーだろうけどさ……」

もう一度、ため息を一つ。相当込み入った事情が彼女の中にはあるようだ。

「プロデューサー、明後日のイベントの後に他の予定が入ってるとか……ないよなぁ……」

「えっなんだ!? どういう質問!?」

「予定空いてない?」的な問いと真逆の言葉に困惑する。予定が入っていないとまずいことでもあるのだろうか。

「いーけどよ。皆でスイーツパーティできたらアタシは楽しいし」

「待ってくれ樹里。話が全く見えてこないんだが……」

「なんでもねーよ! 終わったらプロデューサーも一緒にチョコフォンデュ食べろよな」

勢いよく首を振られて話を切られてしまい、彼女はそのまま折り紙が大量に入ったダンボールを持ち上げてステージへ歩き始めた。
作業続行、と言わんばかりの姿勢だ。とるべき行動としては素晴らしいのだが、不明瞭な言葉を投げかけられてプロデューサーは頭に疑問符を浮かべたまま立ち尽くしてしまう。
「やっぱ、誘えなかったんだな……」
当然、去り際の呟きなど彼の耳には入るはずもなかった。

【現：ひとつ咲いた】

積もり始めたばかりの雪が既に溶け始めている。頭上を鳥の鳴き声が通過する現在の時間は１７時３７分、数か月前ならとっくに日も暮れている頃合いだ。
凛世は夕日に追い縋る黒鳥を無言で見つめながら歩いていた。
「日も長くなったよな、まだ寒いけど」
傍らを並んで歩く樹里が呟く。おそらく視線は同じ方を向いているのだろう、凛世を通り抜けて夕焼けへ飛ばされた呟きは、僅かな哀愁を交えて黄昏の街へと消えていった。彼女の言う通り、最近はすっかり日が落ちるのが遅くなってきている。

「まだ寒さを残してはおりますが……冬らしさを見つめるのは、難しくなりました」
「雪があちこちに残ってなかったら、もうなんの季節か分かんなくなっちまいそうだよな」
地平線の彼方へ沈む大きな大きな橙色。更に上を見やれば、昼間は高く開いていたはずの天蓋が少しずつ夜色に変化しているのが分かる。夕日を望める時間はあと一時間弱といったところか。
事務所からの帰り道、馴染み深くなった制服に袖を通した二人は、何度通ったかも忘れた商店街に足を踏み入れる。寮までの道のりでここを通り、他愛もない会話に花を咲かせることができるのは凛世と樹里だけが持つ時間だった。
昼間に一度通った時とは異なって、流石に人の数も減っている商店街。まだ店仕舞いには気が早いが、客の雪崩に忙殺される時間帯も過ぎている、微妙に手持ち無沙汰な頃である。
二人にはこの時間に通る商店街の空気が心地よく、活動で蓄積した疲労を街が浄化している気さえしていた。
「今日も寄ってく、のはどうだ?」
「ふふ、賛同いたします」
屋根に乗った雪が落日に浮かされ流れ落ちる。

主語のない会話だが、似たようなやり取りは何度も行っているものだ。。二つ返事でこくりと頷く凛世を見て、樹里は嬉しそうに頬を緩めた。
「アタシは今日はカニクリームかな、凛世は？」
「……凛世も、同じものを考えておりました」
「お、奇遇だな。じゃあカニクリーム二つで――」
「ですが、気が変わりました」
「え？」
珍しく強い口調で付け加える凛世。街路を蹴る靴音は止まぬまま樹里が凛世の方へ振り向くと、同じくして頬を緩めた可憐な少女の横顔があった。
「肉じゃがにいたします」
「あー、うめーもんな。でも急にどうしたんだよ？」
「味は、二つのほうが……楽しめますので」
「……」
目を細めて微笑む凛世の表情と、建物の隙間から差す日差しが重なって樹里の瞳を強く刺激する。彼女は思わず片手で日差しを遮った。
勢いよく腕を振りかぶるものだから、今度は凛世が樹里を見る。小首を傾げて数秒見つめていたが、すぐに納得と言わんばかりにふっと表情を和らげた。

それはまるで、薄日が差すような微笑で。
「眩いですか、樹里さん」
「え、あぁちょっとな。気にしなくていーからな、この時間帯はしょうがねーし……って」
目をこすりながら返事をしていた樹里だが、正面に咲く笑顔を確認して気恥ずかしそうに口端を吊り上げる。
「……なんか、機嫌良いな、凛世」
「……そう見えますでしょうか？」
「そりゃあ、な」
はっきりいってびっくりするくらい上機嫌だ――とは言わないけれど、少なくとも笑顔を真っ向から受け止めた樹里が謎の羞恥心を感じる程度には幸せそうな顔をしている。余程良いことでもなければ、ここまでの笑みを日常の欠片で零すことはできない。
そして樹里は、そんな眩い笑顔の理由に見当がついた。
「なんか楽しみなことでもできたのかって顔してるよ、今の凛世」
「……！」
「いや分かりやすいな」
心を見抜かれて赤の瞳孔が丸くなる。

夕日に照らされながら、樹里が苦笑した。
「……樹里さんの仰るとおり、プロデューサーさまと、その……」
「あーなんだっけ、映画のチケットだったっけ」
「はい。五日後でございます」
「予定近いな⁉　なるほどな、でもそっか……」
樹里は頭の後ろで両手を組んでズカズカと歩く。もうすぐ目的の精肉屋に到達する、というところまできていた。
映画のチケット。三日後。
凛世がどこからかペアチケットらしきものを入手したのは知っていた。おそらく商店街に住む知人から受け取ったものだ。どういう意図でペアのチケットを渡したのか、相手の思惑は分からない。しかし樹里はそれを知ったとき、凛世の不安げな表情も見た。
――そういえば去年の同じ時期にも同じことがあったと思い出す。
確かあの時も映画のチケットだったと思う。福引で当てたチケットをどう使うかと悩んでいた凛世の姿は、今でもよく覚えている。ユニットのメンバーは時間的に都合が合いづらく、では誰を誘って行くのか、となって。
「もう一年前なのか」

結局、誰も誘えずにチケットは別の人に譲渡した。

丁度同時期に開催された、スイーツ店との合同イベント。時間的にかなりの空きができるため、凛世はその後に誘って映画を観に行くはずだったのだ――プロデューサーと。

奥手だとか立場だとか双方の想いだとか、きっとあの時の凛世は様々な思考が入り混じってしまい、誘うに至らなかったのだと思う。

「じゃあ、今年は誘えたんだな」

凛世にも聞こえない声で呟く。

杜野凛世が抱えるプロデューサーへの感情は彼女自身の問題。樹里は基本的に、それらに首を突っ込むような野暮な真似は（突っ込んだところで経験のない自分が役に立つかという点も含めて）しないと決めている。そもそも周りが手を出していい話ではないのだ。

けれどあの日、たくさんの折り紙を作り終え、樹里の自主レッスンが終わるのを待って、いざ帰ろうとしたときの凛世の寂しげで苦悩に満ちた横顔を見たとき。

ただ純粋に心配だった。

ただ純粋に不安だった。

彼女の原動力は間違いなくプロデューサーだ。ゆえにプロデューサーのためなら何

だってできる。

　だからもしも二人の間に確執でも生じたら、凛世はどうなるのだろうと。下手に手を出さないと決めた樹里ですら不安になるほど、その時の凛世の横顔がひどく印象的だったのだ。

「なんか、安心したよ」

「安心、ですか？」

「おう！　変わっていくんだなって、安心した」

　夏ごろに夏葉が、奥手な凛世の手助けをした。

　――言いたいことも素直に言えない状態が続いたら、いつか溜め込んだものが抑えられなくなる。

　一年前の冬から春、そして夏へと移り変わる季節の中で、彼女も同じことを考えたようだった。二人の仲に直接介入はしないけれど、少しでも悩む彼女の手助けになれば――そんな思いがあったのだろう。

　凛世はよく思い悩んでいた。触れがたい顔をして口を閉ざしている彼女の姿を、樹里はよく目にしていた。

　友が苦しんでいるときに何もしないでいられるほど、西城樹里は我慢のできる人間ではない。だから夏葉と共に、凛世が「言いたいことをはっきりと伝えられる」よう協力

したのだ。
「変わる、か」
「……」
凛世が何を考えているのか、その全容を把握することはできない。様々な季節を経て、その後彼女がどうなって、自身の感情と置かれている立場にどう向き合っていったのかも、彼女以外が知る事はなかった。
だから嬉しかったのだ。一年前に叶わなかった彼女の想いが、今こうして現実になっていることが。
「……凛世は、変わることができたのでしょうか」
ぽつり、と。
街の空気に添えるように置かれた呟きが耳に入り、二人は自然と足を止めていた。
精肉屋がすぐそこにある地点で、制服を着た少女たちは金色の街に照らされる。樹里が視線を巡らせると、いつもと同じ街並みがあって。変わらないものを感じながら彼女は淡く息を吸い込んだ。
「……商店街から店がひとつ消えても、あんまり景色が変わるわけじゃないし」
想像に任せるように瞳を閉じ、脳裏の過去に思いを馳せる。記憶の視界には、今はもうない一つの店と、皆でのぼった階段と、坂道ばかりの見慣れた景色が浮上した。

「なくなったんだ、くらいに思う人もいるんだろうけどさ」
　ふわりとまぶたが上がって現実が見える。眩しい。
「ちゃんと変わってるんだよな、アタシらとか……いっつも見てる人からすれば、違って見えるんだよな」
「……はい」
「だからさ、凛世……あー、なんていえばいいんだろーな、こういう時……」
　上手くまとまりきらない言葉をどうにか紡いで、樹里は自身の金髪を軽く揺らしながら凛世に向き直った。
「変わってるんだと思うぜ、アタシは」
　五拍くらい置いて、凛世がふっと微笑む。
「……ふふ、ありがとうございます、樹里さん」
「え、えっと……アタシ、変なこと言ってねーよな？」
「はい――凛世も、変わっているのだと、思うことができました」
　その笑顔を見て「そっか」と安心したように息をつく。凛世の後ろに見える夕日が更に小さくなっているのを視認して、夜が近くなったのを感じた。樹里は目の前にある精肉屋へと、凛世の手を引いて足を運んだ。
　なんだか今日は、暗くなる前に帰りたいと思ったのだ。

「あ、そうだ」

慣れ親しんだおばちゃんに声をかける前に、言い忘れそうになった言葉を凛世に向ける。

「別の味にしてくれてありがとな、分けて食べよーぜ」

「……はい……勿論です」

おばちゃーん、と樹里の一言から始まるいつもの光景。変わっていないように見えてその実、彼女たちの世界は少しずつ前へと進んでいるのだろう。樹里自身も、もっとアイドルを頑張ろうと思えたのだった。

夕日がまだ眩しい。でも、そんな眩しさが大好きだから。

消えぬ季節：過

ｐｉｘｉｖプレミアム無料体験
作品を投稿

【うつろふものは瞬過愁灯】　＃４
凍蝶―Ｗｉｎｔｅｒ―
２６，０３５　文字（読了目安：　５２分）

四季が毎年、徐々に変化を見せています。近年では秋のはじめと終わりが非常に分かりづらいように感じますが、同様に冬も「１２月に雪が降ってクリスマスパーティ」のような形が崩れてきているのではないでしょうか。

冬編、と銘打つには大遅刻してしまいました、「爽籟―Ａｕｔｕｍｎ―」に続くお話です。

とはいっても、このシリーズはすべて単品でもある程度読めるようお話を作っているつもりですので、春夏秋の作品と併せて読んでもらえればなー……とは思いますが今作のみでも話は完結しております。

春編の投稿から約一年。四季にわたって様々な凛世とプロデューサーの様子を描いてまいりましたが、四季ごとの話は今作で一区切りとなります。季節の移ろいと二人の関係性の変化、想いの在り方を少々変わった見せ方で描写しました。よろしくお願いいたします。

感想や御指摘などありましたらこちらまでお願いします！

（ｔｗｉｔｔｅｒ／ＨＹＫ＿１２２４）

追記

四季シリーズということですが、構想段階から四季＋１（ｐＳＳＲコミュがＴＲＵＥ含めて５つのため）の話だったので、あと一作ほど続きます。投稿はいつになるか分か

りませんが、気長にお待ちいただければありがたいです。
続きを読む
ＰドルＰ杜アイドルマスターシャイニーカラーズシャニマス杜野凛世Ｐ凛
２３
４０
７８５
２０２０年５月１０日　２１：２１

前へ

【過：消えぬ季節】

「お疲れさまでした！　乾杯！」
グラスのかち合う不揃いな音を合図に、小さな宴が始まる。
チョコレートリキュールがなみなみに注がれた器を持ち上げ、一口ほど喉に流し込んでみた。味わい深い甘さと僅かな苦み、それでいて爽やかな舌触り。思わず息が零れるほどの満足感だ。

「これ、美味しいな」

適当な位置にあった椅子に腰かける。窓際に近い場所に置かれていたもので、室内の中心で楽しげに騒がしくしている皆からは少し離れたところだ。輪の中には、四十は越えているであろうスイーツ店の店長や大人の従業員のほかに、五人のアイドルと同じくらいの歳の男女もいる。

多分、アルバイトの学生だろう。歳の差がない人間と会話したほうが気が楽だと考えたのか、従業員たちは学生組とアイドルたちが会話しやすいよう距離感を保ってくれていた。有難い気遣いだ。

そんなパーティの様子を、腰を落ち着かせながらグラス片手に眺めるのもまた一興。こういう景色も良いな、とまだ若いのに随分年老いた感慨を抱くプロデューサー。

「あとでチョコレートフォンデュだけ使わせてもらおうか……」

独り言が空振りする。

輪の中に混ざっていくことも考えたけれど、穏やかにアイドルたちが仕事以外で楽しんでいる様子を見られる機会はなかなかない。一通りの挨拶を済ませ、「ゆっくりお休みになってください」と物腰柔らかな店長に言われたので、現在はこうして部屋の隅のほうで人々の喧騒を眺めている。

果穂と智代子はコンビニに売っていないような洋菓子を食べ比べており、笑顔の絶え

ない二人の並びはとても微笑ましいものだ。
　樹里と夏葉はチョコフォンデュの塗装具合を競っている。些細なことでもああやって笑い合いながら勝負事に持ち込める関係というのも、なんだかんだ言って平和だと思う。
　そして凛世は――。
「……って、凛世は？」
「こちらにございます」
「うおぉっ!?」
　少し大きめな驚愕の声が漏れる。いきなり隣から声がすれば誰だってこうなるだろう。
　先程まで皆と楽しんでいたはずの凛世は、いつの間にかプロデューサーの隣の椅子――には座らず、凛とした姿勢で佇んでいた。
「いつからそこに……何かあったのか？」
「いえ。その……プロデューサーさまが、お疲れのようでしたので」
　じっと見つめてくる瞳には心配そうな、此方の身を案じている気配が感じられる。
「心配してくれたのか、ありがとな凛世。でも今日はなんというか、この席から見るのが一番いいかなって思っただけだから」

なんて言いながら、心身ともに疲弊しているのを自覚していた。

こういう全体で何かの催し事をした際、大人の自分がどの位置にいるべきか悩むことは稀にある。

無論同じく大人同士で会話していればいいのだが、余程顔に出ていたのか相手から「ゆっくりお休みになってください」なんて言葉が飛んできてしまっては、蓄積していた疲労を認めざるを得ない。

イベント一週間前あたりまでは「今回はそこまで過酷なスケジュールではないな」と思っていたけれど、終わってみれば想像以上にハードな仕事だったな、と思って外の景色を眺めた。

一週間ぶりに何も考えず見る外の景色。何せスイーツ店とアイドルの合同イベントなんて初めて聞いたものだったから、余計に気を張っていたのかもしれないと自嘲気味に笑った。

「……ちゃんと、成功してよかったよ」

「……はい」

凛世がどんな顔をしているのか見えない。今視界にあるのは外の景色だ。ついこの間降り始めた雪はもうほとんどが溶けており、道路の隅に集められた灰色混じりの雪と、日陰でこっそり生きながらえた寂しい雪だけが冬の輪郭を静かに残していた。

「やっと冬が来たかと思ったら、もう終わりそうだよなあ」
「あまり積もらず……短い季節でございました」
　遠くの景色ばかりに気を取られていて気づかなかったが、窓の外側には一頭の蝶が止まっている。銀色の美しい羽模様にプロデューサーは驚いた。もうすぐ三月とはいえ気が早すぎるだろう。
　しかし数秒見つめて、何故こんなところにいるのか分かった。既に死んでいるのだ。
「……止まる場所、間違えたのかな」
　あと数か月早く見つけていれば、弱っているところを助けることもできたに違いない。プロデューサーは骸となった生命の抜け殻を悲しそうに、痛ましそうに見つめる。雪がなかなか降らないから、外をじっくりと眺める者も少なく、誰もこの命の瀬戸際に気づかなかったのだろう。
　季節とは残酷だと、意味もなく悲しい気持ちが湧き上がってきた。
「プロデューサーさま……」
「ん、あ……いや、なんか変な雰囲気にしちゃったよな、すまん」
「いえ、凛世は……」
　凛世は、の続きはなんだろう。少し待ってみるが言葉が続く気配はなかった。
　一週間前にも彼女が何か言いかけて止まったことがあったと思い出す。どうして凛

世は何か言いかけると、よく言葉を自ら遮ってしまうのだろうか。
彼女がそうするようになったのは、出会って少ししてからのこと。付き合いもそろそろ長くなってきた頃合いだが、未だに凛世との距離感や関係性は掴めていない。
ずっとこのままなのか、それとも――。
「……冬がさ、冬っぽくなくなっただろ？」
「……？　……はい」
窓の外に意識を向けたまま話し始める。
すぐに春の一つや二つが降ってきそうなくらい、冬らしさの失われた外の世界。気温の低さだけを残して雪もほとんど降らず、いつこの季節が過ぎていったのかも分からないくらいに、曖昧な冬だった。
「こんな風に、どんどん季節の境目が分からなくなっていってさ。秋とか冬とか、春とか夏とかがぐちゃぐちゃになって……四季っていう分け方も変わっていくのかなって、少し思ったんだ」
自分でも驚くほどすらすらと言葉が出て、つい喋りすぎたかと我に返る。振り向けば凛世が綺麗な立ち姿でプロデューサーのことを見据えており、心の読めない深々と彩られた瞳と目が合った。
彼女は今、何を考えているのだろう。

「……」
「ごめんごめん、独り言。気にしないでいいから、凛世ももっと皆と――」
「――っ、凛世も……今ある世界が変わっていくことに、少し……少しだけ、不安を覚えます」
「え……」
一瞬苦しそうな表情を見せたかと思えば、彼女は意を決したように言葉を紡ぎ始める。
「景色が、空が、凛世のいる……この世界が」
瞳に熱が宿るのを感じた。彼女の情熱を映すように、赤の瞳が煌めきを増す。
真っ直ぐ、ただ真っ直ぐにプロデューサーを見つめては、逸れないようにとそれだけに心を注いで。
「いずれ冬のように大きく、変化するかもしれません」
表情から不安の色だけは消えぬまま。
「けれど凛世は知りました」
それでも伝えたい、届けたい〝何か〟があるようで。
「貴方さまと出会い、みなさまと出会い……」
藁人形を掴む手に力が込もっている。

「変わりゆくのが世界なのだと……知りました」
真っ直ぐな視線と向き合おうとする心に、プロデューサーも吸い込まれていく。
「冬は雪が降り、肌寒いものでございました」
「……そうだな、昔からそうだ」
「ですが今の凛世の冬は……少し違うのです」
そう言って彼女は目を閉じ、両手を胸あたりにもってきて祈るような姿勢をとった――否、祈っているのではい。想いを馳せているのだ。
昔と今の、冬に。
「みなさまがいて、貴方さまのお傍に凛世がいて」
彼女は目を開けて外を見る。何度見ても冬の残滓があるばかりの、形容しがたい季節が転がっていた。
けれど凛世はそれをみてふっと優しく微笑んだ。
「雪が降る、降らないと……寒さを前に話します」
彼女の瞳には何が映っているのか、外がどう見えるのか。やはり今のプロデューサーがそれを理解するには、彼は杜野凛世について知らないことが多すぎた。
少しだけ今でも理解できるのは、彼女が今の冬を愛おしそうに見つめているということ。

「僅かな白綿を見て、貴方さまが笑うのです」
「……」
「……綺麗だ、と。その笑みで凛世は……」
最後に彼女はもう一度プロデューサーのほうを向き、少し不安が消えた瞳でしっかりと見据えてからにこりと微笑んだ。首を傾げて笑いかける姿が美しくて、思わず言葉を失ってしまう。
「……冬が咲いたと、思うようになりました」
言い終えると凛世は、それ以上何も続けるにぺこりと一つお辞儀をしてから去っていく。足早に元の場所へ戻っていく後姿を茫然と眺め、プロデューサーは息を吐いた。
凛世からあんなにたくさん言葉を貰ったのは、いつぶりだろう。もしかすると初めてかもしれない。
「冬が咲いた、か」
彼女の伝えたかったことがなんなのか。頭の中で反復する言葉を噛みしめてみるが、裏に隠された想いを自分で言葉に変換するのは容易ではなかった。何度も明媚な声音が脳裏で蘇り、もはや彼はチョコレートフォンデュどころではなくなっていく。
「……難しいな、冬とか、景色とか」
激務で疲弊しきった頭が飲み込むのは難しく、一度思考をリセットしてもう一度息を

吐く。理解できるのは今ではないのかもしれない。

ただ、ふと窓の外を見たときに思ったのだ。

綺麗だ、と。

消えぬ季節：現

【現：消えぬ季節】

「凍蝶、かあ」

シアター全体が明るくなり、大きな画面を共有していた人々が少しずつ去り始めていく。数秒前まで会話の一つすら聞こえてこなかった館内に声が響き出す。

胸中に落ちるのは一本の作品を見届けたという満足感と、終わりを迎えたことに対する虚しさ、それらが混ざり合ったなんともいえないものだった。

映画タイトルは『バタフライ・オブ・スノウ』――凍えるような寒さの冬に生きる、二人の男女の恋模様を描いたラブストーリーである。登場人物の奥ゆかしい深層心理の行き交いや、冬特有の冷たさ・寂しさが丁寧に描かれているとして話題を呼んでいるらしい。

世間の評判を受け、プロデューサーも珍しく予定のない休日を利用して観に行ったわけだが。

「面白かったな……」

半端な語彙力の人間が凄まじい衝撃を受けると口数が少なくなる。その現象をまさに身をもって感じている最中であった。

冬の到来から春への移り変わりまでの期間を描かれた劇中では、とにかく『蝶』というワードが絡んでくる。メインテーマは「雪を被っても消えぬ想い」。前途多難な二人が愛を失わずに冬を越し、暖かな春を迎えるハッピーエンドだ。

構成そのものはそこまで奇をてらった内容ではなく、ＣＧを用いた吹雪などの演出と役者の迫真の演技、そして最後までブレることなく筋を通して進むストーリーの王道的な熱さにただただ魅了されるばかりであった。

近頃は仕事に追われて、純粋な娯楽を楽しむ余裕があまりなかったため、プロデューサーも今日ばかりは仕事のことを忘れて映画を楽しむことができた。未だに席を離れずスクリーンを眺めている姿はおそらく、傍目から見れば子どものように映っていることだろう。

「……」

満足げに正面を眺めているプロデューサーの隣、彼のことを微笑ましく見つめている少女がひとり。この日のために予定を合わせていた凛世である。

「……っと、誘ってくれてありがとな凛世。すごく面白かったよ」

「はい。雪の中に温かさを思える、素敵な作品にございました」
いい加減に人も少なくなってきたので二人は立ち上がって外へと向かった。
今日という日は、凛世が偶然手にした映画館のチケットを理由に『バタフライ・オブ・スノウ』を観に行く予定日だったのだ。
「もう昼過ぎか。店も混んでなさそうだし、どこか食べに行きたいところはあるか？」
「……」
「どうした？」
「いえ……」
映画館の出口へ歩きながら次の目的地を決めようとすると、凛世が言葉に詰まった様子で俯く。しかし苦悩している感じではなく、寧ろ嬉しそうに口角が上がっているのが分かった。
藍色の着物といつものように結った艶やかな髪と、ここ最近ではよく目にするようになった彼女らしい柔らかい微笑みと。横から眺めているだけで心が温かくなるほど美しい姿だ。
凛世は少し間を置いてから顔を上げ、こちらではなく正面へと視線を向けたまま口を開く。
「こうして貴方さまの隣に居られることが、凛世にとって大変喜ばしいことだと……ふ

と、思ったのです」
「はは、急に、だな」
そう言った彼女の顔はほんのりと朱に染まっていた。以前なら唐突にそんなことを言い出すことはなかったのだが、彼女との関係も随分と変わったのだとプロデューサーも微笑んだ。
それから幾つかの会話を挟んだのち、二人は映画館の外に出て、先ほど中断してしまった昼食の話を再開する。12時をオーバーして回る時計、何を食べようという会話をする頃合いとしては丁度いい。モール内のフードコート、飲食店の並ぶ通りなどを見て回り、あれがいいかこれがいいかと模索する。
しかしこれがなかなか決まらないものだ。映画を見る予定しか立てていなかったため、その後の予定は一切ないのである。
「店が多すぎてさ、目移りしてしまうんだよなあ」
「ふふっ……決まるまでじっくりと、考えましょう」
「とはいっても、さすがにそろそろ腹が空いてきたし……あんまり連れ回したら凛世も疲れるだろ？」
「いえ、凛世は……今この瞬間も幸せでございます」
「そ、そこまでか……！　じゃあ、落胆させないような店、選ばないとな！」

ガッツポーズを意味もなくとってみせるプロデューサーを見て、凛世が上機嫌に笑う。今日何度目かもわからない笑顔を見て、プロデューサーも「綺麗な笑顔だ」と思った。

「さーて、本当に決めないと」

休日の昼を過ぎた頃の飲食店は意外にもそこまで混み合っておらず、どこを選んでもすぐ席につけそうな様子だ。再びぐるぐると徘徊しながら周囲の状況を観察し、顎に手を当ててうーんと唸る。

別に自分一人のときならば、かかる時間を優先してファーストフード店などでも良い。しかし女の子を隣に置いておきながらその選択肢は、些か気が回らなさすぎるだろう。

「……そうだな……。……」

自身の優柔不断さを呪い始めた。一向に決まる気配がしない。

洋食か和食か、の段階で思考が止まっているのはまずいだろう。かといって凛世に何が食べたいか尋ねても、彼女自身どの店にどんな食べ物があるのかをあまり把握できていないようで、難しそうな表情を見せるばかりだった。

もういっそ、蕎麦とかにしてしまったほうがいいのでは――そんな風に考え始めたところで。

「……」
「……おっ」
右隣を歩く凛世の視線が一点に止まっていることに気が付く。どうやらそこは洋食店、主にパスタやバゲットがメインで出てくる店らしい。彼女からすれば馴染みのない店だったのか、それとも味を知っているからかは分からない。けれど歩きながら凛世の意識がそちらに向いていることは分かった。
「よし、あの店にしよう」
「……プロデューサーさま?」
「気になってた、んだよな?　あそこ結構美味しいんだよ」
「……はい……ありがとうございます、プロデューサさま」
そうして二人は店の中へと入っていく。
その後は別段特筆すべきこともなく、昼食のパスタを楽しく食べることができた。
都会に来て洋服をよく着るようになったり、流行の文化や知識を多く取り入れるようになったりした凛世だが、パスタのような食べ物についてはまだ馴染みのないものだったらしい。
美味しい、と心からの笑顔を向ける少女が真正面に座るものだから、プロデューサーはなんだかむず痒い気持ちになって変に笑ってしまった。

本当に最近の凛世は、よく笑う。
「……外、まだ少し寒いな……！」
その後。店を出て少量の買い物を済ませ、軽くゲームセンターに立ち寄ってみたり、そのあたりを意味もなくふらついてみたりして、今度は外に出てまた別の場所に向かって二人は歩き始めた。
外は寒く、もう二月も終わろうとしている頃なのに道端には雪が残っている。横から吹き付ける風が自然の過酷さを教えてきた。
時刻は１６時過ぎ。あっという間に過ぎ去る時間を名残惜しく感じる一方、鮮やかに彩る朱の夕焼けに心を奪われる時間帯。
そんな中を変わらず、二人歩く。
「『バタフライ・オブ・スノウ』の上映季節間違えてるかと思ったけど、間違えてなかったんだ……」
「まだ、冬のように思えてしまいます」
「実際冬じゃないか？　ちょっととはいえ雪もあるし」
ある、といってもほとんどが汚れて撥ね退けられた塊ばかりだが。
「でも、もう三月だしなあ。公園とかには雪がまだ残っているって聞いたけどさ」
歩いて目指す先はその公園。映画を観る予定しか立てていなかったのにも拘わらず、

二人がいつまでも一緒にいるのには別の予定があったからである。

――そう、ある人物が提案した、面白おかしく心躍る共通の予定が立っていた。

「……って、なんかこの話、前にもした気がするよ。はは」

「はい。昨年の雪もあまり積もらず……冬はすぐに、過ぎてしまいました」

「やっぱり温暖化とかそういう問題なのかな。あ、でもオゾン層はだんだん閉じてきてるって話だし……」

ぶつぶつ呟きながら凛世に歩調を合わせて歩くプロデューサー。時折傍らの存在を確認しつつ前へ進む彼を見て、凛世も温まる胸を抑えるようにそっと手を胸に添える。

「冬も益々、短くなってまいりました」

地球の未来を巡る討論を一人で始めそうになっていたプロデューサーに、凛世の声が差し掛かった。

「――凛世も……今ある世界が変わっていくことに、少し……少しだけ、不安を覚えておりました」

「え……」

背後にある二つの影が長く伸びていく。秋空に似た色の天蓋が淡く照らしているのだ。

そんな天然の風景はしかしプロデューサーの視界に留まらない。彼は刹那、いつか聞

いたような響きをもった声に溢れんばかりの既視感を覚えている。
それは冬の到来と残酷な終わりに嘆息していた彼に贈られた言葉とよく似ていて。
他でもない、彼女が等身大の想いを込めた言葉と重なって。
「景色が、空が、凛世のいる……この世界が」
過去と現在の言葉が。
脳裏に響いた甘く凛々しい声音と、目の前で囁くように紡がれる声色が。
「いずれ冬のように大きく、変化するかもしれません」
二つの、過去の凛世と今の凛世が重なって、一つに聞こえる。
「けれど凛世は知りました」
あの時と、今が。
「貴方さまと出会い、みなさまと出会い……」
きっと何も分かっていなくて、理解しようともしていなかったあの時の言葉が。
自分の知らない「杜野凛世」がいて、そんな彼女の姿をたくさん知っていきたいと思うようになった今が。
「変わりゆくのが世界なのだと……知りました」
同じ言葉を聞いている気がする。それなのに、彼女の表情は記憶と全く異なっていた。

嬉しそうに、幸せそうに　、今という時間を噛みしめるように。凛世が笑う。花が小さく綻ぶように笑う。

「冬は雪が降り、肌寒いものでございました」

――ああそうだ、冬なんて昔から、寒いものだ。けれど――

「ですが今の凛世の冬は……少し違うのです」

歩みを止めぬまま彼女の言葉は続く。横顔しか見えないけれど、道端の雪さえも愛おしそうに見つめているのが分かった。想いを馳せているのが分かった。

過去と現在の、冬に。

「みなさまがいて、貴方さまのお傍に凛世がいて」

――はい！　杜野は、自慢のアイドルですから！

あれからどれ程の時が経ったか。きっとまだ、そう遠くない過去の話だ。

凛世をもっと知りたい、知っていきたいと思うようになった秋――そして、常に慕ってくれる彼女を自分がどう思っているのか自覚した秋。

「雪が降る、降らないと……寒さを前に話します」

それからすぐに冬が来て、少しだけ雪が降る時期になった。

屋上で二人で見た花火。共に過ごした時間はほんの僅かだったけれど、あの時確かに二人は同じ空の下で、同じ空を見上げていた。

「僅かな白綿を見て、貴方さまが笑うのです」
物置と化していた部屋の整理整頓も行った。どうしても捨てられないものを幾つか見つけて、カレンダーを一思いに破って――思い出を確かめるように、語り合ったものだ。
年明けには年賀状が届いた。『来年も凛世をよろしくお願いいたします』と、足すものも引くものもなく、ただそれだけの真っ直ぐな文章が飾られていて。
重なる声が教えてくれる。同じ言葉でも違いがあるように、変わっていないように見えて変わっているものもあるのだと。
「……綺麗だ、と。その笑みで凛世は……」
それだけの思い出を積み重ねたから今がある。
一年前と同じことを口にする彼女が、あの時とは違う思いを抱えていることが分かった。
まだ全然完璧とは言えないけれど、少しだけ凛世が分かるような気がしたのだ。
「……冬が咲いたと、思うようになりました」
「……そうだよな」
頷いて、足を止める。
公園まであと数分といったところで、プロデューサーは空を仰ぎ見た。

「それが凛世の、冬だったんだよな」
あの時どうしてあんなことを言ってくれたのか、今なら少し理解できる気がする。
凛世はあの言葉に続けてこう言いたかったのではないだろうか。
「――ちゃんとまだ、冬が咲いてる」
「……はい。まだ冬が、ちゃんと……ここに」
少女の整った顔を見る。深い瞳が様々な感情を宿して控えめに訴えかけていた。
やはり口元には微笑が刻まれている。幸せ、とよく口にするが、それが嘘偽りない現実であることを証明するように。確かに彼女の笑顔がそこにあった。
「俺もさ」
止めてしまった時間を再び動かすため、目配せして歩みを再開。隣を正確に付いてくる凛世の方を向きながらプロデューサーは笑った。

「凛世とこうして一緒にいて、寒いとか雪が降ったとか……そういうことを言い合っている時は冬なんだって思うようになったんだ」
「……プロデューサーさまも……」
「凛世と同じ気持ち、少しは持てたっていえるのかな」
「――はい、凛世も同じ気持ちで、ございます……！」

笑顔が繋がって心が温かくなる。笑い合う二人の間を一頭の蝶が通過して、留まることなく過ぎ去っていった。

今度は冬を越して、綺麗な翅を空に羽ばたかせる美しい蝶が通る。凍蝶はもういないけれど、冬は世界に輪郭をうっすらと残したまま、確かにそこにあった。

「――あっ、プロデューサーさんと凛世さんです！」

「やっほー！　こんにち……もうすぐ夜だよね、こんばんは？　ど、どっちかな……？」

「お疲れ様、二人とも。準備は出来ているわ」

「よっ、時間ぴったりじゃねーか。ほら、二人のぶん」

公園に辿り着くと四人の少女が出迎えてくれる。まだこの辺りは雪が溶け切っていない上に車も通らないので、比較的冬色が多く残されていた。街中の開けた場所で冬を楽しもうと思ったら、公園くらいしか残っていないに違いない。

そんな中、樹里が二人に手渡してくれたのは線香花火――火力が強めのもの。

「いやー、こういうのも風流でいいですなあ。なんちゃって」

「あたし、冬に手持ち花火なんて初めてで……きっときれいですよねっ！」

雪がまだ残っているうちに花火をみんなで楽しみたい、なんて言い始めたのは智代子だった。１２月の花火が非常に印象深かったのだろう。わざわざ全員の都合が良い休日のために、こうして準備してくれていたのだ。

公園のは一面がまだ真っ白と言える程度に雪が薄く積もっているので、雰囲気としては抜群である。しかし木々には既に早咲きの桜が芽生えており、春のにおいも漂いつつあった。

「二人とも。それ、線香花火といっても結構火花が飛ぶみたいだから、気をつけなさい」

「ま、ちょっと離してれば大丈夫だと思うけどな。一応気持ち遠めにしろって書いてある」

四人はそれぞれ線香花火を着火し始め、一本ずつ渡された棒をしばらく眺めていたプロデューサーと凛世も遅れて火をつけ始めた。

注意書きに書いてあったらしい気持ち遠め、という距離を感覚的に設定して持つ。なるほど確かに大きい火花がバチバチと飛び散っている。想像の三倍近い火力があった。

「なんか夏を思い出すな、凛――」

笑いながら振り向いて、プロデューサーは言葉を失った。

「……？　はい、プロデューサーさま」

早咲きの桜が宙を舞っている。空に散る薄桃色が優雅にふわり、春のようにゆらりと流れ落ちていた。

手持ちの花火が赤色の熱を散らしている。炎は灼熱。真夏の日差しすらも彷彿とさせた。

夕焼け空が橙色に、黄金に世界を照らしている。朱と黄金に染まりゆく色合いが秋の穏やかな心地を思わせた。
足元に残る雪が静かに冷気を帯びている。静謐に静寂に飲まれ塗れ、ただそこには冬があった。

春夏秋冬の色を揃えた世界の中心。振り向いて濡れたように艶やかな青髪を揺らし、透き通っているのにどこまでも深い赤の瞳をもつ可憐で美麗な少女がいた。
「……綺麗、だな」
「はい。とても美しいものでございます」
絞るように漏れた声に優しい返事が返される。きっと線香花火が綺麗と言ったと思ったのだろう。
しかしそれでは足りない、と――。
「凛世、綺麗だよ」
「……っ、ぷ、プロデューサーさま?」
「本当に、すごく――」
春夏秋冬の眼差しにあてられて、彼は息を吐いた。
冬の中にいる少女に、ただ想いを馳せながら。

そして春へ

某日、事務所の一室にて。

他の者がレッスンやらなにやらで出払っている中、樹里はある物が置かれていることに気が付いた。

「……ん、なんだこれ？」

「ああこれか。……何に見える？」

「うーん……花っぽくはあるんだけど……」

机の上に何個か置かれた折り紙を見て樹里が唸る。プロデューサーが作ったにしては綺麗すぎる折り筋だから、きっと凛世だろう――と、失礼な感想を抱いて。

「一応、俺が折ったんだけどな？」

「マジか!? アンタ器用だな……」

「いや、去年は全然ダメだったよ。折り鶴も微妙って感じでさ」

事務所の椅子に背中を預けて大きく仰け反るプロデューサー。その動作をしている間も彼の意識は折り紙に向けられていた。

桃色の紙が少しずつ、花のような形を模していく。
「はい、出来た。正解は胡蝶蘭だ。結構上手だろ？」
「なんか意外すぎてなんとも言えねーけど……」
——胡蝶蘭。
どこかで見たことのある形だ。
「……なんで急に折り紙なんてしてんだ？」
「いやいや、急にってわけじゃないぞ。今年から始めたんだ。こうして仕事の合間に練習をな」
「ふーん……」
「なんか懐かしくてさ、こういうの。子どもの頃とか、雪が降りすぎてどこにも行けない日はたまにあやとりとか折り紙とかしてたんだ。その時は下手だったけど」
彼はもう一枚紙を手に取って、「ほら」と素早く手を動かす。くるくると手の中で形を変えていく紙が今度は正確に折り目をつけられた鶴へと変化した。
「ちょっと教えてもらったんだよ。上達したから楽しくてついな」
満足げに完成された作品を並べてから、プロデューサーは仕事に戻っていった。あれで休憩になったのかと問いたいところだが、樹里はそれよりも先ほどの胡蝶蘭が気になって仕方がない状態だ。

桃色の胡蝶蘭。一つ手に取ってみて間近で眺める。正確には覚えていないけれど、一年前に同じものを見た気がする。

「――なんだ、アンタも変わってるんじゃねーか」

窓の外、冬の気配がすっかり消えた空を見て樹里が微笑んだ。

桜がどこも咲き始めている。もう冬も完全に終わりだろう。見渡す限りの雪も、肌を刺すような寒さもとっくに消えている。

暖かくなって、静けさの中に少しずつ命の芽吹きを感じて、張り詰めた大気はいつしか柔らかな肌触りを取り戻す。

夏葉も、智代子も、果穂も、樹里も、凛世も――そしてプロデューサーも、移り変わる季節を感じながら、平穏な日常に身を任せる。

蝶が舞い、鳥が歌う。そんな日常に。

そうして季節は一巡し、春が再びやってきていた。

――続――